

すといふ如き場合に使ふ。	In <i>character</i> (或は <i>keeping</i> ) with.
By <i>means of</i> (を手段として、により).	(似合て、一致して).
By <i>dint of</i> (同上) (これは尋常穏和にあらざる手段を用ふる時に使ふ).	In <i>contact with</i> (に接觸して).
By (或は in) <i>virtue of</i> (の力によつて), ( <i>virtue</i> は効力の意である).	In <i>peril of</i> (の危険に臨んで).
By <i>help of</i> (の助けによつて).	In <i>danger of</i> (の危険に瀕して).
By <i>force of</i> (の力により).	At <i>sight of</i> (を見るや否や).
In <i>charge of</i> (擔任して、の長として).	In <i>sight of</i> (の見える處へ).
By <i>way of</i> (の積りて、の様な目的で).	In <i>presence of</i> (の前に).
In <i>need of</i> (を要して).	In <i>front of</i> (の前面に).
In <i>want of</i> (同上).	In <i>case of</i> (の場合には).
For (或は from) <i>want of</i> (がない爲め).	In <i>receipt of</i> (受取て持て居る).
In <i>default of</i> (がない場合には).	On <i>receipt of</i> (受取りの上).
In <i>spite of</i> (に拘らず).	In <i>course of</i> (time) (時の進む中に) (In the <i>course of</i> ten years 十年の経過する中に).
(In) <i>despite of</i> (同上).	In <i>process of</i> (をして居る中に).
On <i>account of</i> (の爲めに), (これは原因理由を説くに用ひる).	In <i>possession of</i> (を占有して).
In <i>order to</i> (の爲めに), (これは目的を説くに用ひる).	In <i>proportion to</i> (に比例して、の割合に).
For <i>fear of</i> (が恐ろしい爲めに).	In <i>comparison with</i> (と比較すれば).
From <i>fear of</i> (が恐ろしさに).	In <i>answer to</i> (に答へて).
In <i>consequence of</i> (の結果として).	In <i>reply to</i> (に答へて、の答辨として).
In <i>search of</i> (を搜索に).	In <i>addition to</i> (の上に、に搦て、加へて).
	In <i>token of</i> (の印として).
	In <i>appreciation of</i> (を感謝して、の功により).
	In <i>deference to</i> (を敬重して).

In <i>proof of</i> (の證據として).	On <i>pretence of</i> (と詐て).
In <i>memory of</i> (の紀念として).	Under <i>penalty</i> (或は <i>pain</i> ) of (の罰を設けて) (禁止の目的に用ふ).
In <i>commemoration of</i> (の紀念として).	

204. (十) 時刻及び季節の名と冠詞——本章定冠詞の部第 181 節(百四十八頁)に *day, night, morning* の如き時刻の名に *the* の用處を擧げたが、あれには下の如き例外があつて、*the* を省略して使用しない。又た四季の名は *(in)* といふ前置詞を附した時に多く省くけれども、附けてあることもある。之れにも *time* といふ詞をクツケると *the* を要する。

At <i>night</i> (夜中).	After <i>dark</i> (日暮れて後).
In (又は at) <i>dead of night</i> (又 winter) (真夜中、嚴冬に).	At <i>nightfall</i> (暮れに).
At <i>evening</i> (夕暮に).	At <i>sunrise</i> (日の出に).
At <i>dusk</i> (薄暮に).	At <i>sunset</i> (日没に).
At <i>noon</i> (正午に).	In (the) <i>spring</i> (春季に).
At <i>twilight</i> (薄暮に).	In (the) <i>winter</i> (冬日に).
At <i>dawn</i> (曉に).	In the <i>spring-time</i> (春季に).
At <i>daybreak</i> (夜明に).	In the <i>winter-time</i> (冬日に).

205. (十一) 書籍、著作、新聞、雑誌の表題、並に其の一部分の題及び見出しは之を表題及び見出しとして記す時に限り大概その前に冠詞を省く。

Contents. (目次、目錄)	Index. (索引)
Appendix. (附録)	Addendum. (追加)
Introduction. (概論)	
"History of Western Civilization." (西洋文明史)	
"Text-Book of Algebra." (代數教科書)	
"New National Readers." (新國民讀本)	
"Merry Wives of Windsor." (キンゾーの陽氣女)	
"London Daily Mail." (ロンドン日々郵便新聞)	

“Quarterly Review.” (四季評論雑誌)

但し此れ等の名を文章の中に挿んで其の話をする時には、前きの the の用法の部に説明して置いた通り、冠詞を加へなくてはならぬ。

Do you read the London Daily Mail? (君はロンドン日々郵便新聞を見ますか)

Here is the latest number of the Quarterly Review? (四季評論雑誌の最近號が此處にあります)

Where is the contents? (此の本の目録は何處にありますか)

206. (十二) Last と next といふ形容詞を現在の前後に於て最近といふ意味を以て時の名例へば year, month, day などに使用する時には定冠詞を略す。

Where did you spend last month? (君は先月一月を何處で暮らしましたか)

What will become of it next century, I wonder. (來世紀になったらあれがどうなるのか知らん)

The evening before last (evening). (昨夕の前の晩、即ち一昨夕)

The morning after next (morning). (明朝の後の朝、即ち明後日の朝)

然しながら是れは「昨」或は「前」、「明」或は「來」といふ場合に限るのであって、last を「最後の」、next を「その次の」或は「翌」といふ意味に使ふ時は、他の優絶級の場合の如く the を要する。時に關係ない事でも同様である。

I was the last (man) to leave the place. (私があつた場を立去る者の中で一番あとになりました)

It was the last year but one of last century. (夫れは前世紀の終りから二年目であつた) (the last year but one は一年の外の最後の年であるから、即ち最後から二年目である)

The next day left London. (其の翌日自分は倫敦を去た)

He lives in the next street. (彼は此の次の通りに住んで居

る) (これは場處の事であつて時の事ではない)

The next train will arrive in a few minutes. (この次ぎの汽車は間もなく来る)

207. (十三) 優絶級の形容詞が前置詞と合して phrase を爲す時は大概 the を省略することになつて居る。

I think he is at least thirty years old. (私はあの方が少くも三十歳だと思ふ) (At the least といふ句も使はれる、又た very が附く時には the が伴ふ。He is at the very least twenty years of age. あの方はどんなに少くも二十歳だ)

I think his daily earning is at most half a yen. (自分の思ふにあの人の日々の儲は多くも五十銭だらう) (At most は at the most にもなることがある)

At best (或は at the best) he can make both ends meet. (どんなに旨くいっても收支を相償ふ様にする支けです、即ち儲けを少しでも残すことは出来ない) (at its 或は their best は「盛り」といふ意味に使ふ、The cherryblossoms were at their best. 櫻の花は真咲りてあつた)

At worst (或は at the worst) he will only suffer a loss of a few yen. (どんなに悪くても三四圓の損失を蒙るだけだらう)

They will come back on Sunday morning at (the) latest (或は at the furthest). (どんなに遅くても日曜日の午前には還て來ます)

此の外 from first to last (始めから終りまで) (これは別々にすれば from the first 及び to the last となる)、from worse to worst (愈よ下降して最も悲むべきことに) (然しながら最も恐るべき時の過ぎた事を the worst is over といふ) などは the を使はない方である。

208. (十四) 同一の名詞が同一の clause 若くは同一の phrase の内で繰返される時には何れも冠詞を省くを法とする。

Let *kuckle answer kuckle*. (擲たら此方からも擲り返せ)

*Fire answered fire*. (砲火互ひに相交はった)

They fought *gunnel to gunnel*. (その船は舷々相摩して戦た)

The two sat *face to face*. (二人は向ひ合て座を取て居た)

We choose to fight *hand to hand*. (吾々は短兵相接して戦ふことを好む)

We rode *side by side* for about five miles. (吾々二人は五哩ばかりの間轡を駢べて馬を進めた)

That boy walks *hand in hand* with his brother. (あの男の兒は兄弟手を引ぱり合て歩く)

*Night after night* his lamp burned brightly until near dawn. (連夜彼れの燈火は黎明近くまで明るく點て居た)

Hundreds of farmers left England *year by year*. (年々歳々幾百といふ農夫が英國を去た)

The report passed from *mouth to mouth*. (その風評が世人の口から口へと傳はった)

此の外に *day after day* (昨日も今日も明日も、連日), *year after year* (連年), *week by week* (毎週毎週), *day by day* (毎日毎日), *year in year out* (年去り年來り), *week in week out* (今週となり又た來週となり), *from time to time* (絶えず、隨時), *from door to door* (家々をめぐって), *from branch to branch* (枝より枝に), *from shore to shore* (此方の岸より彼方の濱に), *arm in arm* (腕を貸し合て), *shot after shot* (一弾また一弾) 等皆な同類の例である。

名が違て居ても其の實質が同じであるか或は酷似して居る物が對語を爲して一句を作す時にも同じく冠詞が省略せられる。

He was driven from *pillar to post*. (彼は彼方此方と轉々追まはされた)

Are they *brother and sister*? (あれは兄妹か)

He worked hard *day and night* (或は *days and nights*). (彼

は夜晝セッセと稼いだ)

Can you give *chapter and verse* of it? (君はその齋を詳しく話すことが出来ますか)

The couple fought with *tooth and nail*. (夫婦は必死となつて喧嘩をした)

They shot me between *wind and water*. (彼等は僕の急所を射た)

209. (十五) 相關的意義の二名詞か、或は正反對又た兩極端の意義の二名詞が接續詞で結合されるか、若しくは中の *phrases* に並置せられる場合には、何れにも冠詞を略す。

They are *man* (或は *husband*) and *wife*. (あれは夫婦です)

Both *father and son* were badly injured. (親子重傷を負んだ)

I don't know whether he is *sage or fool*. (僕はあの人は賢哲だか白痴だか知らない)

We have lived here *man and boy*. (私共は小供の頃から始終此の地に住み慣れた)

Neither *lawyer nor client* was aware of it. (辯護士も被辯護人も共にそれに心づかなかつた)

A wonderful being half *man half god*. (半神半人の不思議な人體)

Both *rider and horse* fell dead. (馬も騎り手も共に死して殞れた)

For the first two years they lived from *hand to mouth*. (初めの二年の間は其の日暮しをして居た)

He went *head over heels* (或は *heels over head*). (彼はモンドリ打て飛んで行た)

He wrote and wrote from *morning till night*. (或は *until evening*) (朝から晩まで書きに書いた)

It measured seven feet from *head to tail*. (頭から尾まで七尺あつた)

I got drenched from *head to foot* (或は *to toe*). (自分は頭から足まで或は爪尖までグシ濡れになった)

We could make neither *head nor tail* of it. (吾々は夫れが何ともかとも解らなかつた)

此の外に from *beginning to end* (初めから終りまで), from *bow to stern* (船から艦まで), *master and servant* (主従), *doctor and patient* (醫師と病容), *debtor and creditor* (借金人と貸主), *landlord and tenant* (地主或は家主と借地人或は借家人), *teacher and pupil* (師弟), *principal and interest* (元利), *pen and ink*, *knife and fork*, (庖刀と肉叉子), *hammer and chisel* (槌と鑿), *hand and glove* (手と手套、即ち親密の關係), *under lock and key* (錠前をさして); *through thick and thin* (緩急あるも始終渝ることなく)等も此の類に屬する。

210. (十六) 或る疑問語に the を附けると名詞の働きをする。  
例へば *why* といふ疑問副詞に *the* を添へると理由即ち *the reason* の義となるの類である。

*The how* (=way) is quite simple. (その仕方は甚だ簡單だ)

*The why* is more than I can tell. (その理由は僕の言ひ得る限りでない)

*The wherefore* (=purpose) is not known. (その目的は解て居ない)

211. (十七) 抽象名詞には抽象的の意義に用ひた限りは之れに *the* を附しないのが規則であるが、前置詞を伴ふ場合には屢ば *the* を戴く、而して是れは *on* の伴ふ場合に殊に多い。

On the <i>move</i> (運動進行中)	In the <i>long run</i> (長い間には).
On the <i>march</i> (行軍中).	To paint to the <i>life</i> (本物の様に、實物を手本として).
On the <i>watch</i> (見張て居る).	In the <i>abstract</i> (抽象的に、空漠に).
On the <i>lookout</i> (同上)	
On the <i>alert</i> (用心して居る).	
On the <i>wane</i> (衰へかゝって).	By the <i>way</i> (時に、序でながら).

## 第八章

### VERBS.

#### (動詞)

#### 一、動詞の定義と分類、

212. 定義——動詞 (*verb*) は動作、出來事、状態を表はす語である。

例——Go (行く), speak (ものをいふ), fight (戦ふ), occur (起る), begin (始まる), collide (衝突す), is (ある、なり), become (なる).

一、上に述べた動作とは人及び物のすべての働を含む。出來事とは自然に發生する事故、即ち夫れをなした者の不明な行爲をいふのである。例へば「爲す」(*do*) は誰か夫れをした者の明かな場合に使ふ言葉であるが、「起る」(*occur*) といへば之れを起らしめたものが不明な言ひ方である。動作と出來事との區別は之に存ずる。また状態とは英語の *being* といふと同じ事て「ありさま」をいふ。He is an old man. (かれは老人なり) といへば此 *is* は *being* 即ち「あるさま」を表はして居る、而して是れは出來事でも動作でもない。動詞は以上三種の用を爲す詞である。

二、上に挙げた状態をあらはす動詞は動作や出來事を表はす動詞と明瞭に區別を立てて了解して置いて貰はねばならぬ。もし此の區別が明かになつて居ないといふと屢ば動詞を使ひ誤ることになるからである。因みに云ふ、邦語で「——して居る」といふ義の詞は皆な状態の動詞である。

働作出來事の動詞  
grow (生長す)

状態の動詞  
be (is, are, am, was, were, been  
など、變化す) (ある、居る、てある、なり)

spring (生へる)	exist (生存して居る、存在して居る)
learn (知る、覚える)	know (知て居る)
take (取る)	have (持て居る)
bear (運ぶ)	bear (持て居る)
stand (up) (立上る)	stand (立て居る)
sit (down) (腰をかける、坐る)	sit (坐て居る)
employ (雇ふ)	keep (持て居る、置いて居る ep —して居る) (例へば keep waiting 待て居る、keep it warm それを冷さない様して居る)
die (死ぬ)	live (住んで居る、生きて居る)
move (動く)	remain (—のまゝて居る)
come to rest (静止す)	rest (静止して居る)
lie (down) (臥す、ねる)	lie (横はって居る、臥て居る)
	love (愛して居る、好んで居る)
	like (好いて居る)
	hate (悪んで居る、嫌て居る)
put (on) (着る、かぶる)	wear (着て居る、被て居る)

213. 動詞の種類—動詞は三様の分ち方がある、一は目的 (*object*) の有無によって、二は補辭の有無によって、三は過去體及過去分詞體の變化の正則と變則とによって區別が立つのである。

214. (一) 自動詞と他動詞—動詞を目的の有無によって分類すると、

- 一、 *Tran'sitive verb.* (他動詞)
- 二、 *Intran'sitive verb.* (自動詞)

の二種となる。即ち他動詞は目的を要するもの、自動詞は目的を要せざるものである、之れを換言すれば、働きが他の人或は物に加

へられる性質のものであれば、之れを表はす動詞は他動詞であり、働きが他の人或は物に及ばずして止むものなる時は、之れを表はす動詞は自動詞と稱へられるのである。一例を挙げれば、

I like it. (私は夫れを好む)

の like といふ動詞は其の「好く」といふ働きが他の物即ち it に加はり、it は其の働きの目的になって居るのであるから、隨て like は他動詞、it は其の目的である。若し it がないとすれば、I like だけでは何の事だか譯の分らないことになって、ツマリ無意義の文字の聚合としか見られない。して見れば like といふ動詞は目的なしには用を爲さぬのである。然るに

We live. (吾々は生存す)

といふ文の live といふ詞は唯だ是れだけで用を爲して居るし、意味がよく分る。ツマリ生存するといふ働き (或は寧ろ状態) は別に他の人にも物にも加らない性質のものである、隨てその目的となる物がないのである。此くの如き動詞を稱して自動詞といふ。通常動詞の分類といへば以上二種の區別の事になる。

他動自動の區別を下の例に就いて考へみよ。

他動詞	自動詞
try (試みる)	walk (歩く)
visit (を訪ふ)	go (行く)
drop (を落す)	fall (落ちる)
remove (を取除く)	move (動く)
pour (を注ぐ、流し込む)	run, flow (流れる)
set (を据える)	sit (坐る)
plant (を植える)	grow (生へる)
lose (を失ふ), miss (を見失ふ)	disappear (見えなくなる)
erect (を建てる)	stand (立つ)
raise (を起す)	rise (起きる、立上がる)

一、此の自他二種の別は日本語にも勿論あるのであって、他動詞には「を」の一字を加へて自動詞との區別を明かにするといふ便があるが、英語には斯かる見易い目印しがな

くて區別に多少の困難が伴ふ。然しながら英語の動詞を邦語に譯して「を」の附く詞は皆な他動詞であり、附かない詞は皆な自動詞であるかと云ふに、必ずしもさうではない、少しは日英兩語に於て一致しない點が見える。これが往々邦人の使ふ英語に誤を生ずる源となる故一言注意して置かねばならぬ。今一例を擧げて之を指示すれば「這入る」「達する」といふ詞である。這入るは英語で enter. といひ、「達する」は reach といふ。此の二詞は日本語では「を」を伴はない故他動詞でない様に見えるが、英語では意外にも他動詞であつて目的を持つべき詞である。即ち「家に這入る」は to enter the house, 「それに達する」は to reach it である。之に反して英語 to fly through the air (空を飛ぶ) の fly は自動詞、to walk in the country (田舎を歩く) の walk も自動詞であるが、邦語では「を」を伴て他動詞に使ふ詞になる。今注意の爲め邦人の最も誤り易い詞を二三擧げて置かう。

英語では他動詞として使ふ詞

attend (に出席す)	obey (に従ふ)	influence (に影響す)
reach (に達す)	touch (に觸れる)	approach (に近づく)
enter (にはいる)	affect (に障る、影響す)	join (に加はる)

これ等の詞が既に他動詞である以上は決して之れに前置詞(即ち日本語の「に」に相當する詞)を附ける必要がない、隨て to attend to the meeting (會に出席す), to enter into the house (家に入る) に to や into を附けるのは大なる誤りである。

二、今一つ注意を喚んで置きたい事は、邦語で自動詞に使ふ詞が英語に缺けて居るが爲めに、之れを英譯するには夫れに相當する詞を受け身體に變じて使ふことを要する一事である。例へば「驚く」「怪我する」といふ邦語の動詞は自動詞であつて(人を驚かす、他人を怪我させると他動にも働く)、初學者は英語の surprise, (或は astonish) 及び injure (或は wound) に相當すると思ふであらうが、決してさうでない、即ち英語には「驚く」「怪我する」に當る自動詞がなく、已むを得ず「驚かす」「怪我させる」(即ち「傷ける」)を受け身に變へ、「驚かされる」「傷けられる」に當る詞を以て之れを補ふ。前に擧げた surprise, astonish は「驚かす」の意、injure, wound は「傷ける」事である故、之れを受け身に直すと

I was surprised. (私は驚かされた=驚いた)
He is astonished. (彼れは驚かされて居る=驚き呆れて居る)
They were wounded. (彼等は傷けられた=傷いた、怪我した)
She was injured. (あの人は傷けられた=傷いた、怪我した)

となる。若し之れを

I surprised.	He astonishes.
They wounded.	She injured.

と書くとなれば、「私は驚かした」「彼は驚かす」「彼等は怪我させた」「あの人は傷けた」といふ事になって、全文が意味の分らぬ事となる。此の點に就いての注意は

生れた, was born.	縫た, was clothed.
難船した, was wrecked.	復仇した, was revenged.
溺死した, was drowned.	受けた, was subjected (to).
壊れた, was broken.	嫁した, was married.

(これは皆な單數第一三人稱の過去である)

等に必要である。尙ほこの外感情を表はす動詞は過半同様である。

affect (感動させる)	enrage (激怒させる)
touch (全上)	vex (憤らせる)
move (全上)	irritate (癢に觸らせる)
amaze (呆れさせる)	discourage, dismay, dishearten (氣落させる、落胆させる)
perplex, puzzle (惑はせる)	daunt (勇氣を挫かせる)
embarrass (惑亂させる)	mortify, annoy (他の心を苦める、惱ます)
delight, please (喜ばせる)	satisfy (満足させる)
anger (怒らせる)	

214. 動詞の目的——動詞の目的辭となるものは名詞代名詞のみではない。他類の詞がいくらかも之れに使用せられる。下に例を擧げて之れを示す。

(一) 名詞。

I know a man who once killed a bear with a dagger. (私は短刀で熊を殺した人を知て居る)

Have you read the book? (君は彼の本を通讀したのか)

(二) 代名詞。

I know him.

Heaven helps those who help themselves. (天は自ら助くる者を助く)

Whom do you mean? (君は誰の事をいふのか)

What do you want? (お前は何かを要するのか)

Show me the book which you bought yesterday. (昨日君の買つた本を見して呉れ)

(三) 形容詞 (其の下に名詞を略した時)

Show me some. (少し見して呉れ)

Have you any? (多少持て居るか)

I have only three. (私は三つしか持て居ません)

(四) Infinitive.

I had to walk all the way. (全距離を是非なく歩きました)  
(こゝでは to walk が動詞の目的辭となつて居る。或は to walk all the way といふ infinitive phrase が目的だといつても可い。Have や had に infinitive を目的辭として添へると「何々しなければならぬ」「何々するの外なかつた」といふ意味になる)

He wishes to have a look at it. (一寸それを拜見したがって居る)

I was allowed to go alone. (私は獨りて行くことを許されました)

(五) Gerund.

I remember rowing with you on the Sumida one moonlight night. (僕は君と月明の夜隅田川で舟を漕いだことを覚えて居る)

From that time on he avoided speaking with Takahashi. (それから以後は彼は高橋と物をいふことを避けた)

(六) Clause.

Ask him if his father is well. (あの人に父上は御機嫌よろしいかと聞いて見ろ)

I wonder whether he is angry with me. (あの人ば僕に對して怒て居るのか知らん)

I think we shall have some more rain to-day. (僕は今日まだ雨が降ると思ふ)

He says that he will complete it to-morrow. (彼は明日あれを仕上げると云て居る)

215. (二) 完全動詞と不完全動詞——補辭の有無によって成立つ區別は

一、Complete verb. (完全動詞)

二、Incomplete verb. (不完全動詞)

である。動詞にして補辭がなければ用を爲さないのは之れを不完全動詞といひ、補辭を要しないのを完全動詞といふ。例へば

He is (あの人ば——だ) It became. (それが——なつた)

Let me (私を——呉れろ)

I was appointed. (私は——に任ぜられた)

といふのみでは何の事か分らない、語を換へて言へば、is や became や let や was appointed では言葉が足りなくて用を爲さないのである。隨て此等の動詞には其の働きを助成する詞即ち補辭が要る。試みに上の文句に補辭を添へて

He is a teacher. (あの人ば先生だ)

It became rotten. (それは腐た)

Let me go. (私を逃がして呉れろ)

I was appointed Governor. (私は知事に任ぜられた)

と云ふと初めて完全な意義を生じて文となる。即ち上の動詞は不完全動詞であることが明かである。然るに

He teaches. (あの人ば教える)

It grows. (それは成長する)

She went. (あの人ば行た)

I live. (予は生存す)

といへば言葉は實に簡單ではあるが兎に角完全な意義を表はして居る。かくの如く別に補辭はなくとも一の意義の分る動詞を完全動詞といふ。

完全不完全の區別は自動詞に限らない。自動詞にも他動詞にも完全と不完全の二種がある。例へば他動詞 make を「——を——にする」といふ義に使用して、

I will make you my servant. (その方を家來にしてやる)

といふ場合に、その目的は you であるが、此の you といふ目的があるといふだけでは動詞 make の働きは完全にならない。隨て I will make you (お前を——にしてやる) では殆ど無意義である。是

に於て my servant といふ補辭が必要になって来る。して見れば此の make は明かに不完全の他動詞である。此の不完全他動詞を文法家は *factitive verb* とも名づける。Factitive verb は其の数が僅少である。その重なるものは

make (—を—にする、 —をして—ならしめる)	appoint (—を—に任ず)
have (—を—させる)	let (—を許して—せしむ)
elect (—を—に撰む)	compel, force (—に迫て— させる)
create (—を—に叙す)	oblige (—をして不得止— させる)
nominate (—を—に任ず)	

等である

216. 不完全動詞の補辭——不完全動詞をして其の働きを完全ならしむる補辭 (*complement*) は名詞形容詞のみに限らない。下に悉く之れを擧げて見やう。

(一) 名詞.

He was a one-eyed man. (それは一眼の人であった)

*imposer* He then turned sharper. (その時彼は詐偽師になった)

They were all taken prisoners. (彼等は皆な捕虜に取られた)

They elected him president. (彼等は彼を會長に撰擧した)

(二) 代名詞.

It was I that did it. (夫れをしたのは私でした)

If I were you, I would buy it. (僕が君ならば夫れを買取るのだけれども)

It is not mine, but yours. (あれは僕のでなくて君のだ)

(三) 形容詞.

He is poor but honest. (あれは貧乏だが正直です)

He is growing rich. (あの人は金持になりかゝって居る)

I hope it will come true. (僕は夫れが本ごとになるだらうと楽しみにして居ます)

His head has turned gray. (あの人の頭は鼠色になった)

Paint it gray. (それを鼠色に塗れ)

Cut it short. (あれを切りつめよ)

(四) 副詞.

The flowers are out. (花が咲いて居る)

The buttons are all off. (ボタンが皆なとれて居る)

Father is out. (父は留主です)

I was then away from home. (私は其の時家を去て他行して居ました)

This knife cuts well. (此の小刀は善く切れる)

(五) 分詞.

He is speaking with a customer. (お客様と話して居ます)

He is engaged. (只今仕事をして居ます、只今用がある)

The trees were fallen and the flowers (were) faded. (樹が倒れて花が萎れて居た)

She sat weeping. (彼れは坐て泣いて居た)

The man got slightly hurt. (その男は少し怪我をした)

He got married. (あれは結婚した)

I felt the floor shaking. (私は床が震動するのを感じた)

I want to have it mended. (私は夫れを繕て貰ひたく思ふ)

I should like to get it washed. (それを洗濯して貰ひたいのですけれども)

(六) Infinitive.

He is to come to-morrow. (あの人は明日来る筈になって居る)

The best way would be to transplant it. (一番よい方法は夫れを植換へるのであらう)

He wants it to be varnished. (彼は夫れにニスを塗りたく思て居る)



He caused his men to **destroy** the bridge. (彼は兵をして橋を破壊させた)

The Russians were seen to **retreat** eastward. (露兵は東の方へ引揚げて行くのが見えた)

We saw the Russians (to) **retreat** eastward. (同上)

His father would have him (to) **study** medicine. (あの人の親はあの人に醫學を是非學ばせたいと思て居た)

We felt the floor (to) **shake**. (吾々は床が震動するのを感じた)

You had better (to) **go**. (あなたは行く方が宜しい)

#### (七) Gerund.

Teaching is **learning**. (教ふるは即ち學ぶなり)

It would be, as it were, **dropping** coins into the sea. (そんな事は云はゞも金を海へ投込む様なものだらう)

#### (八) Phrase.

She looked me **in the face**. (彼は私の面を見詰めた)

The pastor made himself **of no reputation**. (牧師は自分で評判を失墜した)

He laughed her **to scorn**. (彼はその女を嘲笑した)

The nurse sang the child **to sleep**. (乳母はその兒に歌をうたって寝かした)

He was intended **for a doctor**. (彼は醫者にしやうと思はれて居た)

#### (九) Clause.

He made that school **what it is**. (彼はあの學校を今日の有様にした)

The question is **whether it should be done at any cost**. (今研究すべき問題はどんな損をしても夫れをすべきものか否かである)

The result was **that all concerned were turned out of school**.

(その結果は關係したものが悉く學校から退學させられるといふ事になった)

216. (三) 動詞の正變——動詞を過去體及び過去分詞體の變化の正變によって區別すると下の如く又た二種になる。

一、*Regular verb.* (正則動詞)

二、*Irregular verb.* (變則動詞)

動詞の過去體と過去分詞體を作るには通常その根基體 (*verb-root*) の末尾に *-ed* を附けること下の例の通りである。

根基體	過去體	過去分詞體
<u>pat</u>	<u>patted</u>	<u>patted</u>
<u>skin</u>	<u>skinned</u>	<u>skinned</u>
<u>stir</u>	<u>stirred</u>	<u>stirred</u>
<u>trim</u>	<u>trimmed</u>	<u>trimmed</u>
<u>stay</u>	<u>stayed</u>	<u>stayed</u>
snatch	snatched	snatched
waste	wasted	wasted
admit	admitted	admitted
refer	referred	referred
report	reported	reported
detain	detained	detained
confine	confined	confined
advise	advised	advised

この語尾に *ed* を附け或は *ing* を附けるには緩字上に下の規則があつて固く之を守らなくてはならん。

一、一の *syllable* 即ち緩音より成る詞で、其の中の母音が促音即ち短音であるか或は末尾が *ar, er, ir, or*, 又は *ur* なる時は、其の末尾の子音字を一つ増した上で *-ed* *-ing* を加へること。

pat	patted	patting
skin	skinned	skinning
stir	stirred	stirring

二、二の *syllable* から成る詞でも後の方に *accent* のある詞は上述の通りの法によつて *-ed* と *-ing* を附けること。

permit'	permitted	permitting
infer'	inferred	inferring
occur'	occurred	occurring

三、語尾に無音の e の附いて居る語は此の e を除いて後に -ed と ing を附けること。

confine	confined	confining
advise	advised	advising

四、語尾に子音と y が並んで居る語には y を i に變へた後 -ed を附けること。

try	tried	trying
descrie	descried	describing

然るに或る動詞になると其の過去體或は過去分詞體、若くは兩方とも上述の法則によらないて出来る。斯くの如き變體の變化を irregular conjugation (不規則變化) といひ、之をなす動詞を不規則又は變則動詞といふ。之に對して上述の正則變化 (regular conjugation) をなす動詞は皆な正則動詞である。

根 基 體	過 去 體	過 去 分 詞 體
be	was, were	been
see	saw	seen
speak	spoke	spoken
wear	wore	worn
sleep	slept	slept
feel	felt	felt
deal	dealt	dealt
pay	paid	paid
put	put	put
set	set	set
fly	flew	flown
grow	grew	grown
bring	brought	brought
fight	fought	fought
strike	struck	struck, stricken

かくの如き變則な變化をするもの (或るものは全然形體上の變化をしない) は皆な變則動詞である。下に此の類の動詞を悉く擧げる。此の表に現はれて居ない動詞は皆な正則動詞である。

## 變 則 動 詞 變 化 表

此の表に出て居る變則動詞の中少しは正則變化もするものがある。それはイタリックで印刷してある故一目して分る。又太い字母で刷てある詞は他のよりも之れを使ふ方がよいといふ事を示してあるのである。現今使用しなくなったのは一切除いてある。

根 基 體	過 去 體	過 去 分 詞 體
abide (住む、待つ)	abode	abode
arise (起る)	arose	arisen
awake (覺める)	awoke	awaked
be, am, is, are (ある、なり)	was	been
bear (生む)	bore	born
bear (運ぶ、待つ)	bore	borne
beat (打つ)	beat	beat
begin (始む)	began	begun
behold (見る)	beheld	beheld
belay (締める)	belaid	belaid
bend (曲がる、曲げる)	bent, bended	bent, bended
bet (賭ける)	bet, <i>betted</i>	bet, <i>betted</i>
bereave (取上げる、奪ふ)	bereft	bereft, bereaved
beseech (嘆願す)	besought	besought
bid (命じて—させる)	bid, bade	bidden, bid
bind (縛る)	bound	bound
bite (噛む)	bit	bitten, bit
bleed (出血す)	bled	bled
blend (混ざる)	blent, <b>blended</b>	blent, <b>blended</b>
bless (恵む)	blest, <b>blessed</b>	blest, <b>blessed</b>
blow (吹く)	blew	blown
break (破る、壊す)	broke	broken

breed (育てる)	bred	bred
bring (持て来る)	brought	brought
build (建てる)	built	built
burn (焼く、焼ける)	burnt, burned	burnt, burned
burst (爆破す、破裂す)	burst	burst
buy (買ふ)	bought	bought
cast (投げる)	cast	cast
catch (捉ふ、攫む)	caught	caught
chide (叱る)	chid	chid
choose (撰む、好む)	chose	chosen
cleave (クック)	cleaved	cleaved, clave
cleave (割る、割れる)	clove, cleft	cleft, cloven
cling (せがみつく)	clung	clung
clothe (衣る)	clothed	clad, clothed
come (来る)	came	come
crow (鳴く)	crew, crowed	crowed
cut (切る)	cut	cut
dare (敢てす)	durst, dared	dared
dēal (扱ふ、商ふ)	dēalt	dealt
dig (掘る)	dug	dug
do (爲す)	did	done
draw (引く)	drew	drawn
drēam (夢みる)	drēamt, drēamed	drēamt, drēamed
dress (装ふ)	drest, dressed	drest, dressed
drink (飲む)	drank	drunk, drunken
drive (驅る、驅逐す)	drove	driven
dwell (住む)	dwelt	dwelt
eat (食ふ)	ate	eaten
fall (落つ、倒る)	fell	fallen
feed (食はせる、育む)	fed	fed

feel (感ず)	felt	felt
fight (戦ふ)	fought	fought
find (發見す)	found	found
flee (逃る)	fled	fled
fling (投げつける)	flung	flung
fly (飛ぶ)	flew	flown
forbear (候へる)	forbore	forborne
forget (忘る)	forgot	forgotten
forsake (見捨つ)	forsook	forsaken
freeze (凍る)	froze	frozen
get (得る)	got	got
gild (金色にする)	gilt, gilded	gilt, gilded
gird (まく、帶をしめる)	girt, girded	girt, girded
give (與ふ)	gave	given
go (行く)	went	gone
grave (彫る)	graved	graven, graved
grind (磨く)	ground	ground
grow (成長す)	grew	grown
hang (かける)	hung	hung
have (持つ)	had	had
hear (聞く)	heard	heard
heave (ふくらむ)	hove, heaved	hoven, heaved
hew (切る)	hewed	hewed, hewn
hide (隠る、隠す)	hid	hidden
hold (持つ)	held	held
keep (持つ、つゞける)	kept	kept
kneel (跪く)	knelt	knelt
knit (編む)	knit	knit
know (知て居る)	knew	known
lade (積む)	laded	laded, laden

lay (置く、横へる)	laid	laid
lead (導く)	led	led
leap (飛ぶ)	leapt, leaped	leapt, leaped
learn (知る、聞知る)	learnt, learned	learnt, learned
lend (貸す)	lent	lent
lie (臥す、横はる)	lay	lain
〔「詐る」といふ意の lie は正則動詞である〕		
light (点火す、煙草の火をつける)	lit, lighted	lit, lighted
lose (失ふ)	lost	lost
make (作る、—をしてせしむ)	made	made
mēan (積りて居る、意味になる)	mēant	mēant
meet (遇ふ)	met	met
mow (刈る)	mowed	mown, mowed
pass (通る)	past, passed	past, passed
pay (支拂ふ)	paid	paid
pen (かこぶ)	pent, penned	pent, penned
prove (証明する)	proved	proved, proven
quit (捨てる)	quit, quitted	quit, quitted
rap (狂喜せしむ)	rapt, rapped	rapt, rapped
rēad (讀む)	rēad	rēad
rend (裂く)	rent	rent
ride (騎馬で行く)	rode	ridden
ring (鳴らす、鳴る)	rang	rung
rise (起きる、立上る)	rose	risen
rive (割る)	rived	riven
run (走る)	ran	run
saw (鋸き切る)	sawed	sawn
say (云ふ)	said	said
see (見る)	saw	seen
seek (求む、力む)	sought	sought

seethe (煮る)	sod, seethed	sodden, seethed
sell (賣る)	sold	sold
send (送る)	sent	sent
set (据える、置く)	set	set
shake (震ふ、揺れる)	shook	shaken
shape (形づくる)	shaped	shapen, shaped
shave (剃る)	shaved	shaven, shaved
shear (剪み取る)	sheared	shorn, sheered
shine (照る、輝く)	shone	shone
shoe (馬蹄をつける)	shod	shod
shoot (射る、撃つ)	shot	shot
show (示す)	showed	shown, showed
shred (裂く)	shred	shred
shrink (縮む、皺にする)	shrank	shrunk, shrunken
sing (歌ふ)	sang	sung
sink (沈む)	sank	sunken, sunk
sit (坐す)	sat	sat
slay (殺す)	slew	slain
sleep (眠る)	slept	slept
slide (滑る)	slid	slidden, slid
sling (投る)	slung	slung
slink (潜遁する)	slunk	slunk
slit (裁る)	slit, slitted	slit, slitted
smell (嗅ぐ、香ふ)	smelt, smelled	smelt, smelled
smite (斬る)	smote	smitten
sow (蒔く)	sowed	sown
speak (語る、話す)	spoke	spoken
speed (急ぐ)	sped	sped
spell (綴る)	spelt, spelled	spelt, spelled
spend (費す)	spent	spent

spill (こぼす)	spilt, spilled	spilt, spilled
spin (織ぐ、まはる)	spun	spun
spit (唾を吐く)	spit, spat	spit
spoil (損ず)	spoilt, spoiled	spoilt, spoiled
spread (ひろげる、ひろがる)	spread	spread
spring (生ず)	sprang	sprung
stand (立つ)	stood	stood
stave (破る、洩らす)	stove, staved	stove, staved
stay (停る)	stayed	stayed
steal (盗む、忍ぶ)	stole	stolen
stick (挿す)	stuck	stuck
sting (刺す)	stung	stung
stride (大またに歩む)	strode	stridden
strike (打つ)	struck	struck, stricken
string (繋ぐ)	strang	strung
strive (力む)	strove	striven
strow, strew (散らす)	strowed	strown, strewn
swear (誓ふ、罵る)	swore	sworn
sweat (汗を流す)	sweat, sweated	sweat, sweated
sweep (拂ふ)	swept	swept
swell (膨む、漲る)	swelled	swollen, swelled
swim (泳ぐ)	swam	swum
swing (フラ、揺く)	swung	swung
take (取る)	took	taken
teach (教ふ)	taught	taught
tear (裂く)	tore	torn
tell (語る)	told	told
think (思ふ、考ふ)	thought	thought
thrive (榮える)	throve, thrived	thriven, thrived
throw (投げる)	threw	thrown

tread (踏む)	trod	trodden, trod
wake (覺ます)	woke, waked	woke, waked
wax (ワックス)	waxed	waxen
wear (着て居る)	wore	worn
weave (織る)	wove	woven
wed (嫁す、娶る)	wed, wedded	wed, wedded
weep (泣く)	wept	wept
wet (濡ふ)	wet, wetted	wet, wetted
whet (研ぐ)	whet, whetted	whet, whetted
win (得、克つ)	won	won
wind (捲く)	wound	wound
work (働く、細工する)	wrought, worked	wrought, worked
wring (絞る)	wrung	wrung
write (書く、著す)	wrote	written

217. 動詞の他の名稱——動詞の分類法は以上の三種あって、各二種づゝに分たれるのであるが、尙ほ文法上に *fi'nite verb*, *ver'bal*, *reflex'ive verb*, *cog'nate verb*, *da'tive verb* などいふ術語があつて、各一種の動詞を表示して居る故、序を以て之れを説明して置く必要がある。

218. *Finite Verb* (正動詞) と *Verbal* (准動詞).——主辭に對用せらるゝ動詞を *fi'nite verb* といひ、然らざるものを *ver'bal* といふ。故に動詞が其の本來の用を爲し通常の任務を盡す場合には *finite verb* となり、異常の用を爲す時には *verbal* となるのである。此の異常の用とはどういふ事を指すかといふに、或は名詞の用を兼ね、或は形容詞の用を兼ね、或は他の種類の詞の用を兼ねた時をいふのである。今之れを動詞 *say* に就いて例示するならば、

They say he is going abroad. (あの人は洋行をするさうだ) の *say* は *they* といふ主辭に對用せられて居るから、動詞の本來の任務を盡す様に用ひられて正動詞になって居るのである。然るに

(I have made up my mind) to say no. (自分はいやだといふ

ことに決心した)

の to say は動詞でありながら一方には動詞の用を爲して have made up my mind といふ *verb phrase* (複成動詞) を形容して居るし、又た

I told him *to say* nothing to others about our plan. (僕は彼れに吾々の計畫の事を何も人に話すなと申付けた)

といふ時は to say は動詞の性質を維持しながら名詞の用を爲して told といふ動詞の目的となり、又た

I have nothing to say to it. (それに就いては言ふべき事は  
何もない)

といへば、此の to say は又た動詞の性質を保有して居て一面に nothing を形容するといふ形容詞の任務を持ち、又た

I never thought of *saying* anything of the sort to a friend.

(私は未だ嘗て友達にそんな事を言はうと思つたことはない)

の *saying* は矢張り動詞にして名詞の用を兼ね前置詞 of の目的になつて居る。更らに

The *said* ships and cargoes. (前記の船舶及び積荷)

といふ時は *said* は ships と cargoes とを形容しながら「言ふ」といふ動作を表はして居る故、形容詞の用を兼任して居る。尚ほ

So *saying*, he went his way. (さう云つて彼は行つた)

の *saying* は he went his way といふ働きの起つた時を表はして居る故副詞と動詞の二用を兼ねたものである。此くの如く動詞の作用を失はずして他の一方には名詞、形容詞、副詞などの用を爲す時の動詞、即ち to say (これは *infinitive* である)、*saying* (これは *gerund*)、*said* (これは過去分詞)、*saying* (現在分詞) の如きものを准動詞即ち *verbal* といふ。ツマリ *verbal* は *infinitive*, *gerund*, *participle* の事であつて、其の他の動詞は皆な *finite verb* である。

219. *Reflexive Verb* (自加動詞)。— 働作者が他に加へずして自己に加へる働きを表はす動詞を *reflexive verb* といふ。換言すれば他動詞が *reflexive pronoun* 即ち -self, -selves の附いた代

名詞を目的に持つ時に *reflexive* と稱せられるのである。随て自動詞に *reflexive verb* は決してないのである。

He killed *himself*. (彼れは自殺した)

They *behave themselves* well. (あの人だちは行がよい)

の killed (殺した)、behave (行はせる) は此の場合に於て他人他物に及ぼさずして自己に加へた働きを表はして居る故ともに *reflexive* である。動詞の中には *reflexive* のみに用ひられ、或は最も多く *reflexive* に用ひられるのが若干ある。下に其の主なるものを擧げて置く。

absent oneself (缺席す、姿を  
隠す)

acquit oneself (品行をする)

addict oneself (耽る)

bear oneself (舉動をする)

behave oneself (品行をする)

betake oneself (行く)

bethink oneself (思ひつく、考  
ふ)

bother oneself (心を苦しめる)

break oneself (of) (廢する)

bring oneself (—する) (簡に  
なる)

carry oneself (舉動をする)

defend oneself (防ぐ、自衛す)

demean oneself (舉動をする)

devote oneself (身を委ぬ、熱  
中す)

drink oneself (drunk) (酔ふ)

engage oneself (従事す)

employ oneself (同上)

exert oneself (盡力す)

forget oneself (自から忘る、夢  
中になる)

give oneself up (to) (身を委す)

help oneself (to) (食ふ、飲む)

interest oneself (身を入れる)

kill oneself (自殺す)

make oneself (己が思ふ事を  
—させる)

offer oneself (自薦す、申込み)

overeate oneself (食ひすぎる)

overdrink oneself (飲み過ぎる)

overreach oneself (體を伸ばし  
過ぎる)

oversleep oneself (眠り過ぎる)

pride oneself (on) (得意とする)

plume oneself on (同上)

possess oneself (of) (横領す)

pride oneself (on) (得意とする)

report oneself (届出る、復命  
す)

revenge oneself (on) (復讐す)	teach oneself (獨學す)
rid oneself (of) (絶縁す)	turn oneself (into) (化ける)
ruin oneself (落ぶれる)	trouble oneself (心を苦める、心配す)
seat oneself (坐す)	

220. Cognate Verb (類意動詞).—*Cog'nate verb* は之れと同一或は類似の意義の目的辭を有する動詞である。

邦語に「吐息をつく」といふ語があるが、此の「つく」といふ動詞の意義は既に其の目的辭たる「吐息」の「吐」の字に現はれて居る故、多少重複の嫌があるけれども、吾々は多年之れを誤りとはせずして使用して居る。また謠「葵の上」の中に「一禱りこそ禱たれ」といふ句があるが、これの如きは最も明ら様に目的辭「一禱り」の中に現はれて居る働きを更ら動詞「禱たれ」に表はして居る。此の「つく」と「禱たれ」の如きは即ち *cognate verb* の好例である。之れと同じ様に英語で

He dreamed a strange dream. (彼れは奇妙な夢を見た)

The man looked me a stealthy look. (その男は私をソット偷視した)

などといふ。即ち目的辭と同一の働きを其の前にある動詞でも表はして居る。又た

They fought a desperate battle. (彼等は必死の惡戦をした)といふ場合の如きは上の例と少しく撰を異にし、動詞と目的辭と同一の語を以て同一の働きを表はして居るのではない。然かも fought (戦た) と battle (戦闘) は詞形及び語源こそ違へ、意味は殆んど同一といって不可なき程近似したものである。此の fought の如きも *cognate verb* の一つである。尙ほ此の動詞は大概自動詞に之れと類意の目的辭が添へられたが爲めに他動詞となったのが多い。

下の文は普通ある類意動詞の例である。

He died an unnatural death. (あの人は非命の死を遂げた)

Three nights he dreamed the same dream. (三夜同一の夢を見た)

He lives a solitary life in a remote village. (彼は僻村に侘しき生活をして居る)

They fought a desperate fight (或は fighting). (彼等は必死と惡戦した)

The old man glanced a stealthy glance. (老人は盗む様にチラと一目みた)

He sighed a sigh and prayed a prayer. (彼は一吐息つき一禱り祈た)

She sang a curious song. (彼は珍な歌を唱た)

We slept a sound sleep. (吾々はよく熟睡した)

The lawyer smiled a roguish smile. (辯護士は一物ありげな笑ひ方をした)

What a laugh he laughed! (どんなに笑たらう)

They shouted a deafening shout. (人々は耳も聾せん計りに喚めいた)

下のは准類意動詞とも謂つべきものである。

It was then blowing a cool breeze. (その時涼しい微風が吹いて居た)

The bell rang a melancholy peal. (鐘が物哀しい音をして鳴た)

Try to act your part as best you can. (君の本分を力の限りよく盡せ)

A volley was fired. (一齊射撃をやった)

They volleyed a hot shot. (猛烈に一齊射撃をやった)

We will run a race. (一競争やらう)

221. Dative Verbs (二重目的の動詞).—二重の目的を要する他動詞を dative verbs といふ。例へば give といふ動詞は他動詞であつて「—をやる」といふ意味である故、無論目的を要するのではあるが、此何々をといふ目的の外更らに誰々にといふ目的がなければ其の表はす事が完全にならない。此の第二の目的辭を

*dative object* といひ、動詞を *dative verb* といふ。*Dative verb* の目的辭は邦語に於て「—を」といふ方を直接目的辭 (*accusative* 或は *direct object*) と稱し、「—に」といふ方を間接目的辭 (*dative object* 或は *indirect object*) といふのである。*Dative* も矢張り目的格である。下に擧げてあるものは重なる *dative verb* である。

give (him a book) (彼に本をや る)	do (me good) (私に効を奏す)
take (her a letter) (彼へ手紙 を持って行く)	bear (him affection) (彼に親愛 の情を有つ)
bring (me the book) (本を持 て来る)	cause (them troubles) (彼等に 面倒厄介をかける)
show (見せる)	forbid (禁ず)
write (手紙を書いてやる)	hear (them their lessons) (彼 等の稽古の爲めにする読み 物を聽いてやる)
get (取て來てやる、世話して やる)	wish (you a happy new year) (君に新年を祝す)
send (送る)	refuse (拒む)
forward (差立てる)	teach (教ふ)
buy (買てやる)	owe (借りて居る、返さなくて はならぬ)
make (作てやる)	order (命ず)
lend (貸す)	envy (him his talent) (彼の才 を羨む)
call (him names) (彼を罵る)	afford (興ふ)
promise (やらうと約束す)	throw (投げ興ふ)
present (贈る)	deliver (渡す)
offer (やらうと申出る)	sell (賣り渡す)
bid (告げる)	keep (me company) (私に話相 手になる)
tell (語る、話す)	
ask (問ふ)	
forgive (him his fault) (その罪 を宥す)	
play (me a trick) (私に悪戯	

read (讀んで聞かせる)      pay (支拂ふ)

此の例の中には ( ) を附けて其の中に *direct object* と *indirect object* とが示してあるのがある、是れは *direct object* と *indirect object* をどんな風に使ふかといふ事を示したものである。此れ等の例の何れに就いて見るも明かであるが、*direct object* (即ち何々をといふ方) は *indirect object* (即ち何々にといふ方) の後になる。此の順序を顛倒すると *indirect object* に *to* 或は *for* を附けねばならん、而して其の時には動詞の目的は *direct* のみとなる故、最早や *dative* の性質は消滅して了たのである。

He gave me it = he gave it to me.

He gave me a pair of new shoes. (新らしい半靴を一足を私に呉れました)

He gave a pair of new shoes to my younger brother. (彼は私の弟に新らしい半靴を一足呉れました)

*Dative verb* は其の下に二つの名詞代名詞を伴ひ、*factive verb* も同じく其の下に二つの名詞 (或は代名詞) を伴ふ故、その形體が一見頗る相似て往々區別し難いことがある、然かも熟々其の意義が考へて見ると二者の區別は忽ち明瞭になって來る。例へば

He made me a kite. (彼は新に紙鳶を作て呉れた)

He made me a clerk. (彼は私を書記にして呉れた)

の二文に於て動詞は共に *make*、其の次に在る目的は共に *me* であるけれども、上は動詞が *dative* で下は *factive* である。如何にして之を知るかといふに、*factive* に在ては目的辭たる物と補辭たる物と同一物であるに定まって居るけれども、*dative* に於ては二つの目的辭が別々の物を表はして居るに極まって居る。上の例に就いて言へば、*me* と *kite* とは全然別物であるけれども、*me* と *clerk* とは同一物である、何となれば「私」と稱する人が書記になった故である。

He sent me his secretary. (彼は私の處へ秘書官をよこした)

He appointed me his secretary. (彼は私を彼の秘書官に任



命した)

此の場合に於ても上の me と secretary は別人であって、下の me と secretary は同一人に係る。そこで動詞の *factive* となると *dative* となるとを別つには其の下に置かれて居る二つの名詞(若くは代名詞)が同一物を指すか或は別の物を指すかを見分けるがよい。尙ほ又た *factive* であれば二つの名詞或は代名詞の中後の方が目的辭ではなくして補辭であるけれども、*dative* であれば前が直接目的で後が間接目的である。是れまた二者の相異點である。

223. 助動詞と主動詞——前述の名稱の外に動詞に關して尙ほ *auxiliary verb* 即ち助動詞と *principal verb* 即ち主動詞といふ術語がある。助動詞といふは其の名の如く夫れのみでは動詞の用を爲さないのもであって、他の動詞と連用せられて始めて役に立つのである。例へば

Shall I shut the window? (窓を閉ぢませうか)

の shall の如きものである。若し此處に shut といふ動詞が伴て居なければ、此の詞も文全體も無意味になつて了ふ。而して助動詞の後に在て主として働くべき動詞を主動詞といふ。主動詞といふは助動詞の要る場合に存在すべき名稱である、助動詞の要らない處には主動詞といふ名稱は要せられない。例へば

He shut the window. (彼はその窓を閉ぢた)

といふ文に在ては閉ぢたといふ働は shut 一詞で充分に現はれて居る故、無論助動詞がなくて済む、隨て shut を主動詞などといふ理由も必要もない。

助動詞は比較的が少い故悉く下に擧げて置く。

be (これは場合によつて am, is, are など、色々な變化する) (——される)

do (これは第三人稱單數で does 過去に於て did と變ずる)

have (これも have, had など、變化する) (——して居た、——して居た)

shall                      must                      could

will	may	ought (to)
should	can	need
would	might	dare

此の外の動詞は皆な主動詞になるが、助動詞になることはない。この中でも be, have, need, dare 及 do は主動詞となり得る詞である。詳きは各々其の用法の部に就いて説くこととする。

又た助動詞 be と have は他の助動詞と相伴て主動詞を助けるといふ特質がある。Shall be turned, will have gone, must be left, ought to have returned 等の形が出来る。他のものに至ては其様なことは出来ない。I have ought to go だの You are must do it だのといふ組立ては決して出来ない。

助動詞の次には ought を除く外決して to を付けてはならん。You will to go, you need not to go などの to は無用である。

助動詞はまた be と have の外如何なる場合にも語尾變化をしない。He wills だとか they musted などいふことは決してないのである。Need と dare には斯くの如き變化をするけれども、夫れは助動詞たる場合ではなくて、主動詞に用ひられた時に限る。又た shall は過去になると should となり、will は would となる。Can と could, may と might も互に同様の關係を有て居る。

#### 他動詞と自動詞

224. 自他兩様に用ふる動詞——或る動詞は其の使ひ様と意義の如何によつて自動詞にも他動詞にもなる。例へば water といふ動詞を口の中に唾を生ずるといふ事と植物に水をやること、兩様の意義を表はす故、前の意義に使ふ時には自動詞であるけれども、後の意義に用ふる時には他動詞となるの類である。

My mouth watered at the sight. (それを見て僕は口に津を生じた)

Please water these plants. (どうか此の植木に水をやって下さい)

尙ほ二三の例を下に擧げる。

He felt sad. (彼は物悲しく感 じた)	I felt his pulse. (私は彼の脈 を取た)
I felt for my purse. (私は財 布を捜した)	I felt my purse. (私は財布を 撫て、見た)
He returned yesterday. (昨日 歸て來ました)	He returned me the book. (彼 はその本を私に返した)
Did you speak with him? (君 はあの人に面談したか)	Do you speak English? (君 は英語を話すか)
These novels read well. (こ の小説は讀める)	Do you read novels? (君は小 説を讀むか)
My blood boiled. (僕の血が 湧きかへった、悲憤した)	Have you boiled the eggs? (お前かの鶏卵を煮たのか)

此の例の中 felt for は之れを複成語と見れば他動詞である。

225. 自動詞が他動詞に變ずる場合——自動詞は用ひ方と意義の如何によりては他動詞に變る。此の變化は下の場合に起る。

(一) Cognate verb (類意動詞) となって cognate object (類意目的) を伴ふ時。

前に言た如く類意動詞はもと大概自動詞である、例へば前に舉げた die (死ぬ) の如き live (生活す) の如き fight (戦ふ) の如き皆な目的を有たない動詞である。然るに此れ等の動詞と同意義の death (死), life (生活), fighting (戦闘) といふ名詞を添へると、夫れが動詞の目的となり、動詞は忽ち一變して他動詞となるのである。

He died a calm death at a ripe age of seventy. (氏は七十の高齡で眠る如くに永逝せられた)

They live a beastly life. (彼は犬の様な生活をして居る)

They fought a brave fighting. (人々は勇戦した)

(二) 自動詞が表はす働きを「なさせる」といふ義に用ふる時。

或る動詞は其の表はす働きを「する」といふ義にも「させる」といふ意にも使用することが出来る。例へば march は本來進む行軍すといふ自動の意味であるけれども、之れを進ましめるといふ意味

Lesson 212 = 73 頁

に使へば其の目的となるべき名詞或は代名詞が其の後に従ふ。その時は自動詞が一變して他動詞となったのである。

自動詞	他動詞
They marched upon the castle. (彼等は城を指して行進した)	The general marched out his men. (將軍は其の兵を城外に進ましめた)
Again he tried, and again he failed. (再びやつた、而して又々失敗した)	When we got home, our hearts failed us. (家に達した時吾々ガックリ氣も力も抜けた)
He walked into the parlour. (彼は座敷へ歩いてはいった)	He walked me into the parlour. (彼は座敷へ私を歩かせた)
The bell rang merrily. (鐘が面白く鳴た)	Some one is ringing the bell. (誰かリンを鳴らして居る)
He laboured under a nervous fever. (彼は神經熱に苦んだ)	All this his father laboured out. (これを皆な彼の父親が稼いで作た)
The tree soon fell with a great noise. (木がやがて大變な響をして倒れた)	He is felling the tree. (あれは木を伐り倒うさとして居る)

此の最後の例の fell は樹を伐り倒すといふ意味で過去は felled である。Fall は倒れるであつて其の過去は fell である。

(三) 自動詞の後に前置詞を加へて複成動詞 (compound verb) にすると他動詞に變ずるのがある。

その一例を舉げるならば、look は通常自動詞であつて、  
I only looked on. (私は見物して居たばかりです)  
He looked pale. (彼は蒼白い貌をして居た)

の如く目的辭を持たないのであるが、その後ろに for や on や upon 等を附けるとその次ぎに來る名詞代名詞が其の目的辭となり、look for (捜す), look on (或は upon) (as) (認める) といふ意味の他動詞となる。

They looked upon me as an enemy. (彼は僕を敵と認めた)

I was looked on by them as an enemy. (僕は彼等に敵と認められた)

What are you looking for? (君は彼を捜して居るか)

此の類の動詞の重なるものは、

laugh at (を嘲笑す)

ask for (を呉れと頼む)

call at (家を訪問す)

fall upon (に攻めかゝる)

call on (或は upon) (人を訪問す)

set about (を始める)

(をたのむ、を求む)

make up for (を償ふ、補ふ)

rely on (或は upon) (倚頼す)

listen to (を傾聴す)

send for (を呼びにやる)

feel for (を憐む、に同情す)

(四) 或る補辭を随ふる時。

Laugh といふ詞は通常自動詞で目的を要しない。例へば

They drank, and talked, and laughed. (人々は酒を飲んで、談論して、笑ひ興じた)

の如く如くなる。然るに此の laugh に down といふ副詞がその補辭としてクックといふと、忽ち變じて目的辭を持ち他動詞に變ずる。

They laughed me down. (人々は僕を笑ひのめした)

若し此の down といふ補辭がなかったら they laugh me では文をなさぬ、何となれば前述の如く laugh は自動詞であつて me を目的に持つことは出来ない故である。他に例を擧げるならば

The merchant played me false. (その商人は僕を欺いた)

She was talked into a marriage. (彼は結婚をすることに説き込まれた)

He drank himself drunk. (彼は飲んで酔た)

She looked me straight in the face. (彼は私の面を直視した)

226. 他動詞が自動詞に變ずる場合——他動詞も亦た使ひ方と意義の如何によつて自動詞に變ずる。其の場合には下の通りである。

(一) 廣義に用ひたる時、即ち其の目的につき何等の限りを定

めない場合。

吾々は他動詞を使ふ時に大抵其の表はす動作の目的といふものに制限を置いて言ひ表はす、例へば read (讀む) といふ他動詞を使用する時には、多く其の下に讀むべき行為の目的となるべき書籍、新聞、孟子、日本外史などいふ物の名を置く。例へば

I read Mencius when I was twelve. (自分は十二歳の時に孟子を讀んだ)

Do you read the Japan Times? (君は日本時事新聞を讀みますか)

の如きものである。然し吾々は往々かゝる詞を何々を讀むといふ如き狭い言ひ方でなく廣い意義に於て「君は讀書しますか」「讀むよりも書く方が六けしい」などいふ事がある。而してかゝる場合には勿論その目的といふものに何の制限をも設けない故、目的辭を置く必要がない。例へば

Few people read with profit. (世人の中利益を以て讀む人は少い、讀書をして利を得る人は少い)

Do you read on Sunday? (君は日曜日に讀書をするか) の如し。此の read の如きは即ち他動詞が自動詞になったのである。

他動詞

自動詞

I think that it is all right.

The beast does not think as

(私はそれで宜しいことを考

we do. (獸類は吾々人の様

へます、宜しいと思ひます)

に考へはしない)

(that 以下は think の目的

辭である)

What do you see in that tree?

We cannot see in the dark.

(あの樹の中に何が見えます)

(吾々は闇中で見ることは出

what は目的辭である)

來ない)

He can't write his own name.

That girl writes admirably

(あの人は自分の名が書けな

well. (あの女の兒は感心に

い)

旨く書く)

You speak German very well. (君は獨逸語を餘程うまく使ふ)  
 Can a bird speak? (鳥がものを言ひますか)

We eat biscuits and drink water. (吾々は乾蒸餅を喫べ水を飲んで居ます)  
 We eat and drink to live. (吾々は生きて居る爲めに飲んだり食たりするのだ)

(二) 自加目的 (reflexive object) が習慣上省略せらるゝ場合。

自加目的は reflexive pronoun 即ち himself, itself, yourselves の如き代名詞であるが、これが他動詞の後にあるべき意味の處に習慣上略してよい事がある。其の場合には他動詞が目的辭を失ふから自然自動詞の一種となる譯である。例へば open (開ける) は本來他動詞であつて目的を持つべき詞だから、

The servant opens the gate at 7. (小使は門を七時に開ける) office boy.  
 といふが如き組立になる。その open といふ詞を以て「開く」といふ意を表はすには

The lotus-flower opens itself early in the morning. (蓮の花は朝早く己れを開く)  
 といふべき筈であるが、實際は多年の習慣から自加目的の itself を除いて唯だ opens といふ。下の文に見える動詞も此の類である。

他動詞	自動詞
He feeds his dog on meat. (彼は自分の犬に肉を食はせて育てる)	That dog feeds (himself) on meat. (あの犬は肉を食て育て行く) dog
Will you sell me a copy? (僕に一部賣て呉れないか)	These books sell (themselves) well. (此の本はよく賣れます)
He told me to sit up and watch all night. (終夜起きて見張て居ると申しました)	Every shell told (itself). (一發毎に命中した)

(三) 受働 (passive) 即ち受け身の意義に使はた時。

他動詞を受け身に使ふ時には自動詞の is か are か be などを該他動詞の過去分詞に添へる、例へば make (作る、成す) といふ詞を受け身體にするには is made, are made 等となる。然るに或る他動詞はかくの如く形體を變更しなくても其の儘で受け身に働く。上の make といふ詞は即ち夫れの一つである。

What a noise you make! (何とい罷しい音をさせる、やかましいぢやないか)

Another month will make a year. (今一月が一年を爲す、今一月たてば一年になる)

これは make が普通の他動詞として使はれたのである。然るに

He will be unable to reach Kodiak Island before ice makes (=is made). (氷の成さるゝ即ち張るまでにコドゥヤック 嶋に達することは出来ない)

Preparations are making=are being made to receive them. (夫れを歓迎する爲めに準備がなされて居る最中だ、今準備中だ) といへば makes は is made, are making は are being made といふ義であることが明白である。此れ等が即ち他動詞を受け身に使つて自動詞になるといふのである。なほ下の例を見よ。

他動詞	自動詞
Count them if you can. (出来るならばあれを數へて御覽)	That counts for nothing. (それは何の效もない)
Long illness wore him out. (永の病氣でやつれ果てた)	His courage soon wore away. (その勇氣は間もなく抜けて行た)
Cut this beef. (此の牛肉を切れ)	This knife cuts well. (この牛肉は切て見ると強い)

You speak German very well. Can a bird speak? (鳥がも  
 (君は獨逸語を餘程うまく使 のを言ひますか)  
 ふ)

We eat biscuits and drink water. We eat and drink to live. (吾  
 (吾々は乾蒸餅を喫 ザは生きて居る爲めに飲ん  
 べ水を飲んで居ます) だり食たりするのだ)

(二) 自加目的 (reflexive object) が習慣上省略せらるゝ場合。

自加目的は reflexive pronoun 即ち himself, itself, yourselves の如  
 き代名詞であるが、これが他動詞の後にあるべき意味の處に習慣上  
 略してよい事がある。其の場合には他動詞が目的辭を失ふから自  
 然自動詞の一種となる譯である。例へば open (開ける) は本來他  
 動詞であつて目的を持つべき詞だから、

The servant opens the gate at 7. (小使は門を七時に開け  
 る) office boy.  
 といふが如き組立になる。その open といふ詞を以て「開く」とい  
 ふ意を表はすには

The lotus-flower opens itself early in the morning. (蓮の花  
 は朝早く己れを開く)  
 といふべき筈であるが、實際は多年の習慣から自加目的の itself を  
 除いて唯だ opens といふ。下の文に見える動詞も此の類である。

他動詞	自動詞
He feeds his dog on meat. (彼は自分の犬に肉を食はせ て育てる)	That dog feeds (himself) on meat. (あの犬は肉を食て育 て行く) dog
Will you sell me a copy? (僕 に一部賣て呉れないか)	These books sell (themselves) well. (此の本はよく賣れま す)
He told me to sit up and watch all night. (終夜起き て見張て居ると申しました)	Every shell told (itself). (一 發毎に命中した)

(三) 受働 (passive) 即ち受け身の意義に使は時。

他動詞を受け身に使ふ時には自動詞の is か are か be などを該  
 他動詞の過去分詞に添へる、例へば make (作る、成す) といふ詞  
 を受け身體にするには is made, are made 等となる。然るに或る  
 他動詞はかくの如く形體を變更しなくても其の儘で受け身に働く。  
 上の make といふ詞は即ち夫れの一つである。

What a noise you make! (何とい驚しい音をさせる、やか  
 ましいぢやないか)

Another month will make a year. (今一月が一年を爲す、今  
 一月たてば一年になる)

これは make が普通の他動詞として使はれたのである。然るに

He will be unable to reach Kodiak Island before ice makes  
 (=is made). (氷の成さるゝ即ち張るまでにコドィヤック 嶋に達  
 することは出来ない)

Preparations are making=are being made to receive them.  
 (夫れを歓迎する爲めに準備がなされて居る最中だ、今準備中だ)  
 といへば makes は is made, are making は are being made とい  
 ふ義であることが明白である。此れ等が即ち他動詞を受け身に使て  
 自動詞になるといふのである。なほ下の例を見よ。

他動詞	自動詞
Count them if you can. (出 來るならばあれを數へて御 覽)	That counts for nothing. (そ れは何の效もない)
Long illness wore him out. (永の病氣でやつれ果てた)	His courage soon wore away. (その勇氣は間もなく抜 けて行た)
Cut this beef. (此の牛肉を 切れ)	This knife cuts well. This beef cuts tough. (この 牛肉は切て見ると強い)

## 他動詞

Don't eat these *wafers*. (此の煎餅を食べるな)

Do you read the *Asahi*? (君は朝日新聞を読むか)

Never taste *wine*. (決して酒を飲むな)

Smell this *perfume*. (この香水を嗅いで見よ)

This blind man can only feel it. (盲人は唯だ夫れを觸覚する許りだ)

Shall I weigh *you*? (君の體量を量らうか)

Has the tailor measured you? (仕立屋は君の寸法を取たか)

They are beating *drums*. (彼等は大鼓を鳴らして居る)

The children are flying their *kites*. (小供達は紙鳶を揚げて居る)

They are printing a new *book*. (彼等は新しい本を印刷して居ます)

What are they building? (あの人たちが何を建て、居ますか)

## 自動詞

These wafers eat short and crisp. (此の煎餅は食べて見るとボリ、ボリ、碎ける)

The leading articles of that paper read well. (あの新聞の論説は讀める)

This wine tastes acrid. (此の葡萄酒は澁い味がする)

This perfume smells sweet. (此の香水はよい薫りがする)

This moss feels almost as smooth as velvet. (此の苔が手觸りが天絨の様に滑かです)

You weigh 120 pound. (君は量て見ると百二十斤ある)

The room measured 21 ft. by 27. (尺を取たら縦横二十一と呎と二十七呎あった)

The drums are beating. (大鼓が鳴て居る)

Kites are flying. (紙鳶が揚がって居る)

A new books are printing. (新版の本が今印刷中です)

A torpedo-boat is building. (水雷艇が建造中です)

## 三、Modification of Verbs.

## 動詞の文法變化

227. 動詞の文法變化——動詞は下の五種の變化を受ける。

- 一、 *Person*. (人稱)
- 二、 *Number*. (數)
- 三、 *Voice*. (體)
- 四、 *Mood*. (様)
- 五、 *Tense*. (時)

## (一) 人稱 (Person)

228. 規則——動詞は之れに對する主辭と人稱を同らず、故に動詞の人稱を定むるには其の主辭によるのである。

動詞には別に極まった人稱といふものはない(尤も be と have ととは多少定まって居る)。即ち其の場合々々に於て主辭の人稱によつて定まる。ツマリ主辭の人稱が第一人稱ならば之れに對用せられて居る動詞も亦た第一人稱、主辭が第二或は第三人稱ならば動詞も亦た第二若くは第三人稱である。例へば

*I have* the tooth-ache to-day. (今日は齒が痛む)

といふ文に於て、have は其の主辭が第一人稱なるが爲めに是れも第一人稱になるのである。又た

*He had* the tooth-ache yesterday. (あの人は昨日齒が痛んだ)

とあれば、主格の he は第三人稱だ故其れに對する動詞 had と同人稱になる譯である。

## (二) 數 (Number)

229. 規則——動詞の數も亦た主辭の數によって定まる。

數に就いても動詞は主辭に左右せられる。故に主辭が單數なる場合には動詞も單數、主辭が複數なれば動詞も複數である。

數による形體上の變化は *be* と *have* と除くの外(助動詞も無論之れを除く)三人稱單數の叙實用に限て語尾に *s* 及び *es* を附けるだけである。

He goes.            He walks.            She cries.  
It passes.            The bee buzzes.      The owl screeches.

名詞は複數の時に *s*, *es* を持ち、動詞は單數の時に *s*, *es* を持つ。此の一點は名詞と動詞と反對である。*S* 及び *es* の適用に關しては名詞も動詞も同一である。故に茲に省いて説かない。

尚ほ數につきては下の規則を記して忘れぬこと要する。

一、主辭が複數形を爲して居ても、或は二種又たは二種以上の物の名であつても、其の觀念が單一である場合には、單數の動詞を之れに配用すること。

*Two hundred dollars a month is not a small income.* (月二百弗は少い収入ではない)(この主辭 *dollars* は勿論複數であるけれども、夫れが一つ一つの勘定ではなく二百弗を一つに合せて一個の収入と見るのである故、其の觀念は單數である。故に之れに對する動詞も單數である)

*A great orator and scholar has come over from Europe.* (大演説家て且つ學者なる人が歐洲から渡來した)(主辭は二つだが人は一人だ故單數である)

*Your bread and butter is ready.* (お前のパンの附けたパンが出来て居る)(パンとバターではなくパン附のパンといふ一品の名だ故單數である)

*The power and value of English literature was thereby*

*impaired.*—Arnold. (英文學の勢力價值は是れが爲め損ぜられた)(この *power* と *value* 其の實は一物を指して居るのである)

主辭たる名詞代名詞が *or*, *nor* で繋がれて居る時、或は該名詞代名詞複が各 *each* や *every* を戴いて居る時は、之れに對用する動詞は單數でなくてはならぬ。これも此の規則の中に入るべきものである。

*He or I am to be sent.* (あの人が僕が遣られることになつて居る)

*Neither you nor he is to blame.* (あの人も君も別に非難すべき罪はない)

*Every officer and every private was ready to die like a hero of old.* (將校も兵卒も一人一人古武士らしく打死しやうと心構へをして居た)

*Each boy and each girl was diligence itself.* (男の兒も女の兒も各々非常の勉強をしました)

*No desk and no chair was found in place.* (机と椅子も一つとして在るべき場所にはなかつた)

二、二つ或は二つ以上の主辭が *and* に繋がれて居る時には之れに對する動詞は複數であるべき筈だが、*or* や *nor* で繋がれて居る時には動詞は數及び人稱が之れに最も近い主辭と一致する。

*You and Mr. Katō are likely to pass the examination.* (君と加藤君が試験に及第さうだ)(此處では *he* と *Mr. Katō* といふ二つの主辭が *and* で結合はされて居るのである故之れに對する動詞は複數でなくてはならぬ)

*They or I am to blame.* (あの人等か或は僕が悪かつたのだ)(此の場合には主辭が *or* で結合されて居る故動詞の人稱と數は *they* と一致せず *I* と一致して第一人稱單數の *am* を用ふるのである)

*Neither Satō nor you are answerable for it.* (佐藤も君も夫れについて責任を負ふべきものではない)(此の場合には上と同

様の譯で動詞の數及び人稱が夫れに最も近い you と一致して  
第二人稱單數の are である)

三、主辭が *infinitive* である場合には其の數の多少に拘らず  
之を單數と認めて對用する動詞を單數にすること。

*To idle away to-day and to put off to to-morrow what is  
to be done to-day is not the way for a young man to suc-  
ceed.* (今日といふ日をブラブラ暮らして今日しなくてはなら  
ぬ事を明日するといつて延ばす杯は青年成功の途ではない)  
(此の場合に主辭は *to idle* と *to put off* の二つであつて共に  
*infinitive* であるが、之に對する動詞は單數 *is* である)

### (三) 體 (Voice)

230. 動詞の體——働作を爲者即ち働作者より他の者に加へる  
様に言ひ表はす時には動詞は *active voice* 即ち加働體になり、他の  
者が爲者に加へられる様に言ひ表はす時には動詞は *pas'sive voice*  
受働體になる。

他動詞の表はす働を文に言ひ現はすには何時でも二様の法を使ふ  
ことが出来る。之れを邦語でいふならば、「甲は乙を殺した」と「乙  
が甲に殺された」とである。此の二文は體こそ違へ意味は同一であ  
る。英語でも之れと同様に

A murdered B. (A が B を殺した) (加働體)

B was murdered by A. (B が A に殺された) (受働體)

と二様に言ひ表はせる。此の變化を *voice* (體) といふ。Voice は前  
にも言つた通り他動詞に存するものであるが、自動詞には決してない。  
初學者は往々動詞が自動詞であるといふことを忘れて之れを受け身  
即受働體に使ふことがあるが、大に注意して避けなければならん事  
である。之に反して邦語では自動詞の様でありながら英語では純然  
たる他動詞になつて居る詞、例へば *reach*, *intend*, *mean* などの如

きは、既に他動詞たる以上は受働體に使用し得らるゝに拘らず、我  
が邦の初學者は之れを此の體に用ひ得ない。

He soon reached the summit. (彼は程なく絶巔に達した)

(加働體)

The summit was soon reached. (絶巔が間もなく達せられ  
た) (受働體)

I intend this for beginners. (僕は之れを初學者に讀ませる  
積りだ)

This is intended for beginners. (これは初學者に讀ませる様  
に積りが立てられて居る)

Economy sometimes means the science of wealth. (イコノ  
ミイといふ言葉は時としては財の學といふ意味だ)

By economy is meant science of wealth. (イコノミイと言  
葉で財の學といふ事が意味せられる)

此れ等の受働體動詞は日本語には先づない様である。

されば此の受働體を作るには如何なる方法を以てするかといふ  
に、普通の法は

(一) 加働體の時の目的辭の格を主格に改める事。

(二) 動詞を過去分詞に變じ其の前に動詞 *be* を置くこと。(但  
し此の *be* は動詞の時 (*tense*) 如何によつて色々に變ずる。即ち *is*  
*am*, *are*, *was*, *were*, *will be*, *shall be*, *must be*, *can be* 等となる

(三) 若し爲者の名を現はしたければ *by* といふ前置詞を之れ  
に附し、且つ之れを目的格に使ふ事。

例へば「此の火事は二名刹を焼いた」といふことを加働體に書けば

This fire destroyed two famous temples.

となる。之れを受働體に改めるには先づ其の目的たる *two famous  
temples* を主辭として第一番に置き、次ぎに動詞 *destroyed* を *were  
destroyed* 受働體に改め、次ぎに主辭 *this fire* を目的として *by* を  
添へ *by this* とする。即ち全文が



Two famous temples were destroyed by this fire. (二名刹が此の火事の爲めに焼却せられた)。

となる。又た

He will finish it to-morrow. (彼はあれを明日竣工する)

といふ未來の動詞を受働體に變へるには、先づ目的を主辭にし、第二に will finish の finish を be finished として will を其の前に加へ will be finished とする。He といふ主辭を by him として其の後に添加する事は文法上不都合はないが、「彼に」といふことを加へて爲者の誰であるかを明示する必要のあらざる限りは、修辭上之れを除く方が望ましい。

It will be finished (by him) to-morrow. (あれは明日竣工されます)

231. 他の受働體——上述の受働體の外に尙ほ三四種の法があつて各別様の意義に用ひられる。

一、動詞 get を用ふる法——上述の法に用ひた be の代りに get を用ひ、其の他は上述と同一の方法によることがある。是れは爲者の何物なるかといふ問題を眼中に置かない場合に使ふ。

He got badly hurt. (彼は大怪我をさせられた、即ち甚だしく負傷した)

I hear they got reprimanded. (彼等は夫に譴責せられたさうだ)

二、動詞 get 或は have を用ふる法——「何々して貰ふ」「何々させる」といふ邦語に當る意味は此の法を以て之れを表はす。これはツマリ自から求めてする受け身の働である。此の種の受働體には其の性質上目的がなくはならん、即ち「何々を何々して貰ふ」と言はなくてはならない。而して此の「何々を」は目的辭である。

I must get it repaired within a week. (僕は一週間以内にあれを修繕して貰はなくちゃならん)

You will have it washed. (君それを洗濯させ給へ)

三、動詞 have を用ふる法——これは上の have を用ふる法

○B.T.

と同一であるが、用ふる意義が違て居るのであつて、自己の好みも望みもせざる事を他からされるといふ意味に使ふ。

I had it soiled. (僕はあれを汚された)

He had his pocket picked. (彼は懐中物を掏られた)

この受働體に就いて初學者の注意を喚ばなくてはならんことがある。總じて受働體の動詞には加働體の時の目的辭が主格になる故、普通の場合には目的はなくなる譯であるが、*dative verb* の場合には必ずしもさうでない。例へば *dative verb* の present (贈る) を使つた文

They presented me a watch. (人々は僕に懐中時計を贈與して呉れた)

を受働體に改めると

I was presented a watch. (僕は懐中時計を贈與せられた)

となつて目的辭が一つ残る。又た之を更へて

A watch was presented me. (懐中時計が僕に贈呈せられた)

としても矢張り目的が残る。ツマリ *dative verb* には目的が二つ宛附隨して居るから其の中の一つが主辭に改められても尙ほ一つ残る筈である。此の残つた目的辭を *retained object* といふ。*Retained object* を持つものは他動詞中 *dative* に限る。*Dative* 以外の他動詞が受働體になつて *retained object* を持つ居たら、夫れは誤りである。例へば

He was stolen his clothes. (彼は着物を盗まれた)

He was wounded his right arm. (彼は左腕を傷けられた)

といふが如きは文法上容すべからざる誤りである、即ち steal (盗む) wound (傷ける) は共に *dative verb* であり得べからざる動詞である故、隨つて *retained object* たる clothes や arm を其の下に加へることが出来ない。之れを正しく書くならば

He had his clothes stolen.

He was wounded in the right arm.

とする。即ち上の文では have を用ふる受働體を使ひ、下の文には

arm を動詞の目的とせずして前置詞の目的とするのである。斯くの如き譯である故、

【注意】普通の他動詞を受働體に用ふる時には決して之れに *retained object* を添へてはならない。之れを添へることの出来るのは *dative verb* に限る。若し又た普通の他動詞を受働體にして目的を加へる必要が起たら *have*+目的+過去分詞の法によらなければならない。

四、動詞 *become* を用ふる法——これは變化を表はす受働體であつて「何々される様になる」といふ意義に用ひる。

How did you become acquainted with them? (あなたどうしてあの人だちと知り合ひになつたのですか)

但し此の場合に *did become* は動詞であるが、*acquainted* は其の補辭であつて動詞ではない。

五、動詞 *make* を用ふる法——是れは主に他人に了解せられる、聞いて貰ふ(即ち聴取られる)といふ義の場合に使はれて居る。

I could not make myself heard though I cried at the top of my voice. (私は聲を限りに呼んだけれども此方の言ふことが先方に聴こえなかった)

Did you make yourself well understood? (君は自分の旨意を先方によく解らせたか)

231. *Factitive Verb, Congnate Verb, Compound Verb* の受働體——*Factitive verb* も他動詞である故勿論受け身に使はれる筈である、而して其の場合には受働體動詞の下に補辭が附かなければならん。

He was appointed Councillor of the Foreign Office. (彼は外務省の參事官に任命せられた)

Councillor が即ち補辭である。

*Cognate verb* も屢ば受働體に用ひられる。それには加働體の時の主辭が大抵無くなって目的辭が主辭の位置に立つ。

They prayed a prayer.

といふ加働體の文が受働體に變ると、

Have you made yourself well understood?

A prayer was prayed.

*Compound verb* 即ち動詞と前置詞より成る複成動詞も自動詞が他動詞に變たのである故、是れ亦た受働體にすることが出来る。此の時には前置詞は元の儘動詞の次ぎに据えられるのである。

Never since have we heard of him. (それから以來はあの人の噂がサッパリ聞こえない)  
が受け身になって

Never since has he been heard of.

となる。

232. 受働體動詞と受働的意義の補辭——動詞 *be* の次に他動詞の過去分詞を加へると、此の二詞合一して一の受働體動詞となる場合と、分詞が單に *be* の補辭たるに止まることと二色あつて、少しく意義を異にする。例へば

I was surprised at his negligence. (私はあの人のダラシないには呆れた、即ち驚かされた)

といふ場合には *was surprised* が一動詞になつて「驚かされた」といふ一意味を表はして居る。然るにまた此の *was* のみを動詞に使ひ、*surprised* を其の受働的意義の補辭に用ひて、「私はあの人のダラシないに驚かされて居た」といふ意味をも表はすことが出来る。而して其の文の外形に於ては二者少しも異なる所がない。

此の區別は文を作るには勿論、讀書の際には善く辨へて居ないと誤解の原因となる故、特に初學者の注意を望んで置く。

He was drowned in the Sumida River. (あの人は隅田川で溺死した)

といふ文に在ては、*drown* はもと他動詞で「溺らせる」といふ義の詞である故、その受け身が *was drowned* となつて、「溺らせられた(水の爲めに)」即ち溺死したといふ義になるのが當然である。夫れを *was* は動詞、*drowned* は補辭と見て、「溺死して居た」などと讀まうものならば、大なる誤解を來すことになる。又た

She is pleased with his present. (彼はその贈物を貰て悦んで居る)

この is pleased は上の例とは異て「悦ばされる」といふ意義ではなく、「悦ばされて居る」と讀むべきものだ。之れに反して

She was pleased with his present. (彼はその贈物を貰て喜んだ)

この was pleased は「喜ばされた」即ち「喜んだ」であつて、「喜ばされて居た」即ち「喜んで居た」ではない、併しこれは斯くの如き意に用ひても決して誤りではない。

序に云て置くが、若し此くの如き場合に他動詞でなく自動詞の過去分詞が用ひられると、決して受働體ではない、(何となれば受働體は自動詞にはない筈である故)隨て分詞をば動詞 be の補辭と視なければならぬ。例へば

He is come. (あの人は來て居る)

They are arrived. (彼等は既に着して居る)

I am determined to abandon it. (私はあれを放棄することに決心して居る)

の如き文に在ては、come, arrived, determined が自動詞の過去分詞であるから、その形體が受働體とスッカリ同じあるに拘らず、受け身の意味でなく、隨て「何々して居る」と解しなければならぬ。

#### 四、様 (Mood) と時 (Tense).

233. 定義——様 (Mood) とは動詞が表はす動作情態の言ひ表はし様をいふ。

動詞といふものゝ務めは動作や情態を表はすに在るのだが、さて其の動詞を使って動作や情態を表はすにも、表はし様が色々違ふ。即ち事實上ある事或はあつた事、或は將さに有らんとする事を事實として表はす場合もあり、或は單に吾人の希望又は假想として述べる

こともあり、或は之を一の命令要求などとして告げることもある。此の區別によつて生ずる動詞の變化を様即ち mood といふのである。

234. 様の種類——様には四つある。(或る人は infinitive を様の一に數へて五つとし、或る人は又た可能様を除き之れを叙實様と假想様に分屬せしめて居る)其の名目は下の如し。

一、Indicative mood. (叙實様)

二、Subjunctive mood. (假想様)

三、Potential mood. (可能様)

四、Imperative mood. (命令様)

235. 四様の意義用途——(一) 叙實様は事實の過去たると現在たると未來たるとを問はず之れを事實として叙述する様である。

I go to school. (自分は常に學校へ行く)

I am going to school. (自分は今學校へ行く所だ)

I went to school yesterday. (私は昨日學校へ行た)

I shall go to school to-morrow. (私は明日學校へ行く)

(二) 假想様は事實に反對の事、不可能に近しと思はるゝ事、或は疑はしと思はる事を表はす様である。

If I had gone to school yesterday. (昨日學校へ行たならば)

If he be at school to-morrow. (彼が明日學校へ行て居れば)

I wish he were here. (あの人が此處に居ればよい)

(三) 可能様は事實そのものでなく事實の可能なることを表はす様である。

I can do it easily. (私はそれを造作もなく爲ることが出来る)

It may be so, but I doubt it. (それは不可能ではないが併し私は疑て居る)

(四) 命令様は命令請求を表はす様である。

Go to school. (學校へ行け)

Please do it. (どうかそうしてお呉れ)

236. 定義——時 (*Tense*) は動作情態の發生存在の時を表はす動詞の變化である。

時に就いては別に説明を要しない。唯だ一言を加へて置く。事の現在なるや、過去なるや、未來なるや、はた現在過去未來に通じて存するやを明かにする變化であつて、動詞そのものに存在する。而して動詞を以て言ひ表はすことの出来ない所は副詞或は之と同効力の語句を以て之を補ふのである。

He went to school.

といへば、「學校へ行く」といふ働きは此の動詞のみで既に過去なることが明かである、唯だ過去の中の何時といふ事は、動詞の力を以て言ひ表はす譯に行かない故、副詞を使って yesterday とか the day before yesterday (一昨日) とか言ひ添へるのである。

237. 時の種類——時には下の六種がある。

- 一、 *Pres'ent tense*. (現在)
- 二、 *Past tense*. (過去)
- 三、 *Fu'ture tense*. (未來)
- 四、 *Pres'ent per'fect tense*. (現在完了)
- 五、 *Past per'fect tense*. (過去完了)
- 六、 *Fu'ture per'fect tense*. (未來完了)

以上六つの時の説明は各 *mood* に結付けてする方が理會し易いと思はれるから、茲に之を略して *mood* の各論に入り詳説しやう。

### 1. 叙實様

#### (1) 現在 (Present Tense)

238. 叙實様現在の意義用法——叙實様の現在は (一) 現存の事實 (二) 平生の慣行及び (三) 古今中外に通じて動かすべからざる真理實情 (四) 時を示す *adverbial phrase* に於て未來の事實を表はす。

現存の事實を現はすには状態の動詞を使ふ(第九十頁参照)。

He is ill. (あの人は病氣中だ)

He is absent at Kobe. (神戸へ行って今は留主だ)

The temple stands on the hill-top. (寺は山上に立て居る)

Are you aware of it? (お前それに心づいて居るか)

He is reading in the next room. (隣室で讀書して居る)

平生の慣行を表はすのは叙實様現在の最も普通の務めである。

I go to school every day. (私は毎日學校へ行きます)

Does this knife cut well? (此の小刀は善く切れるか)

You speak English, don't you? (君は英語を使ふだらう)

That boy studies very hard. (あの男の兒は大層勉強する)

時の古今と地の東西を論せず存在して居る真理實情は矢張り此の *mood* と *tense* を以て之を表はす。

The earth revolves round the sun. (地球は太陽の周邊を回轉する)

A rolling stone has no moss. (ころがって歩く石は苔衣を着けない)

Heaven helps those who help themselves. (天は己を助くるものを助く)

Everything has a drawback of its own. (物は總べて夫れ々々の缺點がある)

時を表はす *adverbial clause* といへば、when, before, after, till などの時に關する接續語を戴く *clause* で動詞を形容するもの、例へば when I get there (彼の地に着きました上は) の如き句であるが、之には未來の事を現在でいふことになって居る。又た if, provided, unless を戴く *clause* にも未來を上例の如く現在でいふ。

I will write to you again when I get to Tōkyō. (私着京の上は重ねて一書可差上候)

We will wait until the President returns from China. (會長が支那から歸朝せられるまで待たう)

I will come if it rains cats and dogs. (どんなに大雨が降っても私は参ります)

Will you come provided it is fine weather? (天気が好ければ来る積りですか)

He will soon be ruined unless he turns over a new leaf. (行を改めなければ間もなく零落して下)

此の外に尙ほ日用の言語としては、叙實體の現在は近き將來に爲さるべき來、往、發、着等の行爲を表はすに用ゆる。

Does he come this week? (あの人は今週來ますか)

I am off to-morrow. (私は明日立ちます)

Do your parents return in a few days? (御兩親は三四日たてば御歸りになりますか)

239. 叙實様現在の形體——叙實様の現在は下の如き形體を取る。

Verb-root, be.

單數	複數	單數	複數
1. I am.	We are.	3. { He } is.	They are.
2. You are.	You are.	{ She } { It }	

Verb-root, go.

單數	複數	單數	複數
1. I go.	We go.	3. { He } goes.	They go.
2. You go.	You go.	{ She } { It }	

Verb-root, speak.

單數	複數	單數	複數
1. I speak.	We speak.	3. { He } speaks.	They speak.
2. You speak.	You speak.	{ She } { It }	

Verb-root, try.

單數	複數	單數	複數
1. I try.	We try.	3. { He } tries.	They try.
2. You try.	You try.	{ She } { It }	

Handwritten notes: speak, you speak, you try, we

この表を見て直ちに目につく事であるが、第三人稱單數に限り語尾に s, es を附けることになって居る。

否定の形體は他の否定語のない限りは、通常助動詞 do (第三人稱單數は does) に not といふ副詞を添へ、之れを verb-root の前に置くのである。他に否定語のある場合には上記の do, does は要らない。又た動詞 be には唯だ not を附ける許りである。

Verb-root, be.

單數	複數	單數	複數
1. I am not.	We are not.	3. { He } is not.	They are not.
2. You are not.	You are not.	{ She } { It }	

Verb-root, teach (教授す).

單數	複數
1. I do not teach.	We do not teach.
2. You do not teach.	You do not teach.
3. { He } does not teach.	They do not teach.
{ She } { It }	

他に否定語の伴ふ時:

否定語, never.

單數	複數
1. I never teach.	We never teach.
2. You never teach.	You never teach.
3. { He } never teaches.	They never teach.
{ She } { It }	

疑問の形體は亦た do (第三人稱單數には does) を verb-root に附加して之れを作る。但し動詞 be の場合には此の助動詞を要しない。又は疑問の文では主辭が第一助動詞の次ぎに置かれる。併し助動詞のない場合には主辭は動詞の次ぎに立つ。

Verb-root, be.

單數	複數	單數	複數
1. Am I?	Are we?	3. Is { he ? }	Are they?
2. Are you?	Are you?	{ she ? } { it ? }	

Verb-root, *speak*.

單數	複數
1. Do I speak?	Do we speak?
2. Do you speak?	Do you speak?
3. Does $\left\{ \begin{array}{l} \text{he} \\ \text{she} \\ \text{it} \end{array} \right\}$ speak?	Do they speak?

疑問の否定には not を主辭の次ぎ主動詞の前に置くか、或は do, does に not を結合せて don't, doesn't とするのである。

Verb-root, *say*.

單數	複數
1. $\left\{ \begin{array}{l} \text{Do I not say?} \\ \text{Don't I say?} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{Do we not say?} \\ \text{Don't we say?} \end{array} \right\}$
2. $\left\{ \begin{array}{l} \text{Do you not say?} \\ \text{Don't you say?} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{Do you not say?} \\ \text{Don't you say?} \end{array} \right\}$
3. $\left\{ \begin{array}{l} \text{Does he, she or it not say?} \\ \text{Doesn't he, she, it say?} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{Do they not say?} \\ \text{Don't they say?} \end{array} \right\}$

240. *Progressive form*.—現に進行中の事はそれが事實である限りは、叙實様現在の *progressive form* (進行體) を以て之れを表はす。 *progressive form* は其の名の如く進行中の事を示す動詞の一體であるが、これも言ひ様の如何によっては叙實様のみでなく、假想様や可能様にもなり得るものである。併し茲には叙實様現在の *progressive form* のみを説くことにして、其の形は現在分詞を動詞 be に添へたものである。

Verb-root, *go*.

單數	複數
1. I am going.	We are going.
2. You are going.	You are going.
3. $\left\{ \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \end{array} \right\}$ is going.	They are going.

Verb-root, *swim*.

單數	複數
1. I am swimming.	We are swimming.
2. You are swimming.	You are swimming.
3. $\left\{ \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \end{array} \right\}$ is swimming.	They are swimming.

之れを文に使用して見るならば、

What is he doing? (彼は何をして居るか)

He is speaking with a visitor. (來客と話をして居る)

となる。此の體は其の使用せられる動詞の意味如何によって「何をしかゝって居る」といふ變遷の意義になることがある。

She is dying. (あの人は死にかゝって居る) (此の dying は die の現在分詞である)

The rainbow is vanishing. (虹が消えんとして居る)

即ち生より死、存在より消滅に變遷中といふ意義である。

又た此の現在の *progressive form* は近き將來に起り來らんとする往、來、發、着等の働きに用ひて、未來の代りとする事が出来る。

He is leaving to-morrow. (あの人は明日立ちます)

Is she coming back this afternoon? (あの人は今日午後歸て來ますか)

これ等は皆な未來の働きであつて現在の事ではない。

## (2) 過去 (Past Tense).

241. *叙實様過去の意義用法*—叙實様の過去は (一) 現在の事情に何等の關涉なしとして過去にあった事實を叙するに使ひ、(二) 時を表はす *adverbial clause* に於て過去の未來にも用ひる。

一、吾々は現在より前にあつた事を人に話し文章に屬るに當て、或は夫れを現在の事情に關係あるが如く言ふし、或は現在の事情に交渉する所なき様に言ふ。例へば「何誰君はどうしたか」といふ問があつた時に、吾々は「あの人は支那へ行きました」と答へるこ

ともあれば、「あの人は先月支那へ往たが、今は何處に居るか知りません」とも答へることがあらう。而して前の答は「何時」支那へ行たといふことを明かにしない故、隨て其の意味は「支那へ行って今も同地に居る」といふことになる。して見れば其の人の支那行は確かに過去の事實であるけれども、此の言は一面には暗に現在の事情に説及して同人の現在の所在地をほのめかして居る。換言すれば「支那へ行きました」の一言は過去にあった事實を現在の實情に關繋して居る様に叙述したのである。之に反して第二の答は過去の事は過去の事、現在の事は現在の事と、別々に分けて話した言葉である故、前半の事は後半の事と相交渉しない言ひ方である。故にその人は去月支那に行て今も支那に滞在して何か仕事をして居ることが事實かも知れないけれども、この答は去月の支那行が今の實情には何等の關繋のないと認めざるを得ない。さて上述の二つの答を英語に書き表はすと、

He is(=has) gone to China. (あの人は支那へ行きましたよ)

He went over to China last month, but I don't know where he is now. (あの人は先月支那に行たが併し私はあの人が只今何地に居るか知りません)

といふ。即ち同一の過去の行爲でも現在に關繋がある様に言ふ時には現在か現在完了を用ひ、それがなく言ふには過去を使ふといふことになって居る。今一つ卑近な例を擧げる。爰に人があつて

Have you an English-French dictionary? (君は英佛字書をもちてですか)

と問ふたとして、之に對して「イヤ、私は一冊持て居ましたが夫れを人にやつて了ひました」と答へたいとすれば、英語で何と言ふべきかと云ふに、自分が字書を一冊有して居たといふは無論過去の事であつて、現在には何の關繋もない(若し此の事實が現在に關係のあることならば今も所有して居なければならん)、即ち持て居たといふ事實は人に與へたと同時に消滅して了つたのである。隨て此の部分の言葉は文法上過去を以て叙すべきことである。然るに其

の次ぎの「人にやつた」といふ言葉は之に反して其の裏面に「人にやつた故今は持て居ない」といふ意を含んで居る。即ち過去に於て爲した贈與といふ行爲が現在の事情に交渉影響して「今はない」といふ結果を生み出して居るといふのである。約言すれば過去の行爲と現在の事情と大に關係あることを明かにしたか或は少くも之れをほのめかした言ひ振りである。そこで此の答を英語で言ひ表はすには、前半の方の動詞を過去にし、後半を現在完了にして、

No; I had one (或は a copy) once, but I have given it to a friend.

といふのである。

序を以て茲に一事の讀者の注意を求めたいことがある。前に擧げた He went over to China last month. に於ては went といふ働きを爲した時が何時であつたかといふ事を last month といふ句で明示して居る。これは即ちその人が先月爲した事を叙べたのであつて、今月或は現在爲して居ることには少しも言及しない言ひ方である。ツマリ last month は先月である故、言ふまでもなく過去である。その過去たることを明示した語句が伴ふ以上は該行爲も過去でなくてはならん。此の理を推すと自然下の如き規則が生ずる。

① 規則——過去の一定時を表はす詞句が動詞に附隨して居たら、その動詞も亦た過去でなくてはならん。

こゝに過去の一定時といふのは 昨日 (yesterday), 前週 (last week), 去年 (last year), 千八百九十年に (in 1890), 十八日の朝 (on the morning of the 18th.) その歿した後に (after his death), その小供の頃に (when he was a child 或は when a child), 外國に滞在中に (while staying abroad), 今朝五時に (at 5 o'clock this morning) などいふ語句を指すのである。又た假令ひ其の sentence の中に此くの如き語句がなくても、その前文に此の類の詞なり句なりが現はれて居て、其の叙して居る事實が此方の事實と同時であるか或は之れに連續して發生したといふ風の言ひ方なれば、其の動詞は

矢張り過去でなくてはならん。下の例を看よ。

Once a man had a goose. (昔ある時一人の男が鶩鳥を持って居ました) She looked like any other goose, but she was a wonderful bird. (その鶩鳥はどの外の鶩鳥と比べても變て居る様子はありませんでした、それは不思議な鳥でありました)。Every day she laid an egg of shining gold. (それが毎日ピカピカした金の卵を一つ産みました)

これに就いて見ると、最後の sentence Every day 云々といふ處には少しも過去であるといふ事を表明する様な語がないが、夫れにも拘らず動詞を過去體にしてある。其の故を如何といふに、それは前文に once (昔ある時) といふ過去の一定時を表はした詞があつて、その次ぎの sentence もまたその次ぎのも、第一の sentence に書いてある事實と同時の事實を書き表はしてあることが明瞭に認められる故、第一が過去ならば第二も過去、第三も過去であるべき譯だといふのである。さて尚ほ上の文を續けて

One day he said to himself, "I am sure there are a great many eggs inside my goose. She must be all gold inside." (ある日彼れ獨言にいふに「おれの内の鶩鳥の體內には澤山卵があるに極まつて居る、此の鳥は身内悉く黄金なんだらう」) So he took out a knife and killed the bird. (そこで其の男は庖刀を取り出してかの鶩鳥を殺しました) But when he looked for the gold, there was none to be seen. (併し彼れがあてにして居た黄金を搜したらチツトも見えませんでした)

と讀んで來ると、この第一の sentence には one day (或る日) といふ過去の一定時を表はす句がある故、隨て其の動詞は said と過去にしてある。次ぎの sentence は如何といふに、これには過去たる事を明らかにする詞句がない、然かも是れは明かに前文に現はれた事實に連續した過去の事であることは so の一詞で明瞭である、故に動詞を亦た過去にして took, killed と使たのである。また次ぎの sentence に移て見ると、looked といふ動詞にも隨伴する過去の

語句がないけれども、これ亦た前文所述の事に續いて起た事がらである故、上の規則によつて動詞を過去にして looked としなければならん。同じ sentence の was には明かに事の過去たることを示す when he looked for the gold といふ句が伴て居るから、これは問題にもならないであらう。

二、時を表はす *adverbial clause* に於て過去の未來に過去を用ひるといふは下の文の如き場合をいふ。

He said that when he got to Osaka he would send me a telegram. (彼は大阪へ着したら私に電報を寄越すと云た)

此の文で *adverbial clause* といへば when he got to Osaka である。而して此の *clause* の中に現はれて居る事實は何時あつたことかと云へば、he と稱する人が「電報を送る」と云た時より見て未來である(現在より見れば多分過去であらうけれども)。簡言すれば he の大阪着は過去の未來である。英語では現在よりの未來には通常 shall, will といふ助動詞を用ひて之を表はし、過去よりの未來には通常 should, would を以て之を表はすが、茲には過去の未來に should も would も使はずしてたゞ過去を使てある。これは上の規則に見ゆる通り時を表はす *adverbial clause* だからである。また上の文で that から a telegram までも過去の未來を現はす一つの *clause* に相違ないけれども、是れは said といふ動詞の目的だから名詞の働きをする *clause* 即ち *noun clause* と稱すべきものである。隨て其の動詞には叙實様の過去を使はずして、would といふ通常の過去の未來が使用してある。

He promised me to come back soon after he finished his work. (仕事をしまつたら直ぐ引返して來ると僕に約束をした) の after he finished his work も矢張り時を表はし且つ to come back に對し副詞の用を爲す *clause* である故、上の規則の通り finished といふ叙實様過去の動詞が使てある。然しもし是れが *adverbial clause* でなくて過去の未來を表はすこと例へば

He told me that he should finish his work by five. (彼は



僕に五時までに自分の仕事を終ると云た)の如き場合には finished は should finish てなくてはならん、何となれば是れは上の clause とは違て、第一 noun clause であり、第二には時を示す句でないからである。

時を表はす adverbial clause は通常頭に when, after, before, till, until 等の接續語を戴く。

單に時を表はすものゝみてなく、if, provided, unless 等を戴く adverbial clause にも上の規則が行はれて居る。

I thought that he would come if it rained. (私は彼が雨が降ても來るだらうと思ひました)

He said that he would come provided it was fine weather.

(彼は天氣が好ければ來る積りだと云た)

併しこれに should を使ふのが多いといふことを附言して置く。

242. 叙實様過去の形體——叙實様の過去の形體は變則動詞を除くの外悉く verb-root の語尾に -ed をつけたものである。これは人稱、數の如何に少しも關繫なく皆同一である。

Verb-root, walk.

單數	複數	單數	複數
1. I walked.	We walked.	3. {He She It} walked.	They walked.
2. You walked.	You walked.		

變則動詞の過去も be を除く外各人稱數に於て悉く同一形である。其の形は本章第二百十六節に就いて見れば分る。Be は下の如く變化する。

單數	複數	單數	複數
1. I was.	We were.	3. {He She It} was.	They were.
2. You were.	You were.		

受働體は各動詞の過去分詞を上の I was, you were 以下に附加すれば出来る。

Verb-root, love (正則動詞).

單數	複數
1. I was loved.	We were loved.
2. You were loved.	You were loved.
3. {He She It} was loved.	They were loved.

Verb-root, speak (變則動詞).

單數	複數
1. I was spoken.	We were spoken.
2. You were spoken.	You were spoken.
3. {He She It} was spoken.	They were spoken.

否定と疑問には do を did に改める外は現在と變らない。Did の下には do の時と同様に verb-root を附加するのであって、上の受働體の如く過去分詞を添へては不可い。

否 定

Verb-root, speak.

單數	複數
1. I did not speak.	We did not speak.
2. You did not speak.	You did not speak.
3. {He She It} did not speak.	They did not speak.

疑 問

Verb-root, speak.

單數	複數
1. Did I speak?	Did we speak?
2. Did you speak?	Did you speak?
3. Did {he she it} speak?	Did they speak?

244. 過去に伴ふ現在——文の主たる clause に過去の動詞を

使ふ時には之に従属する *clause* も通常過去である。即ち主たる *clause* に He knew (彼は知て居た) とあれば之に従たる *clause* にも過去の動詞を用ひて that his son would succeed (わが子が志を遂げるといふことを) (would は will の過去である) といひ、或は that his son was diligent in his study (わが子が研究に精勵して居るといふことを) といふが如きものであるが、偶まには此の従属の *clause* に現在の動詞が用ひられて居ることがある。而して夫れは如何なる場合かと問へば、その従属の *clause* に千古不磨の眞理が述べられて居る時である。例へば Still, he believed (しかも彼は信じて居た) といふ *clause* があって其の動詞 believed が過去であるに拘らず、その後へ現在の動詞を含む *clause* を附けて、

Still, he believed that the earth moves. (しかも彼は地球が動くといふことを信じて居た)

といふ様な場合には the earth moves は如何なる時代にも如何なる人も争ふべからざる眞理なることを表白して居るのである。又た Heaven helps those who help themselves (天は自から助くる者を助く) といふが如き明白なる道理を過去の動詞に結附けて言ひ表はしても、

I had no doubt that Heaven helps those who help themselves. (自分は天が自から助くる者を助け給ふことを疑はなかつた)

と書くのが普通である。然しながら従属の *clause* が確實明白な眞理でなく單だ事實だといふ位の事を表はすのならば、斯くの如く現在を使ふことが出来ないのである。

I had no doubt that they always helped themselves. (私はあの人たちが自力を以て自己を助けて居ることを疑はなかつた)

の helped は即ちそれである。

245. 過去の *Progressive Form*.—過去にも *progressive form* 即ち進行體がある。これは過去の一定時に於て進行中であつ

た事を叙述するに用ふる。

It was already raining when I crossed the river. (河を渡る時にもう雨が降て居た)

といふ文に於て when I crossed the river は過去の一定時を表はして居る。その時に降雨といふ働或は出来事は進行中であつたといふ意を表はして居るのである。

One morning he went out shooting. It was about the middle of the winter, and a cold north wind was blowing. (或る朝彼は鳥撃に出懸けた、時は冬の半ば頃で寒い北風が吹いて居た) といふ文でも was blowing は「彼が獵に出た」といふ過去の一定時に於て進行中の事柄を言たものだ故、かくの如く過去の進行體にしてあるのである。

過去の進行體は勿論叙實様過去の一種であつて、其の形は現在の進行體の動詞 be を過去體にすればよい。

Verb-root, *go*.

單 數	複 數
1. I was going.	We were going.
2. You were going.	You were going.
3. {He } {She } was going.	They were going.
{It }	

Verb-root, *speak*.

單 數	複 數
1. I was speaking.	We were speaking.
2. You were speaking.	You were speaking.
3. {He } {She } was speaking.	They were speaking.
{It }	

246. 過去の事實と現在——英文には過去の事實を現在の動詞で表はすことがある。それは(一)過去の事實を讀者をして眼前に見しむる様に活寫しやうと思ふ時と(二)云た、聞いた、知たなど

いふ場合に限る。前者は大抵多くも二三十の *sentence* に用ひて、後はまた元の過去に返るのである。これは英國の文學者ですら滅多に用ひないのである故別に例を擧げる必要もあるまい。英語で之れを *historic present* (史的現在) 又は *graphic present* (活寫現在) と名づけてある。今一つの方は最も普通あることであつて、say, hear, learn 其の外之れに類似の動詞に用ひられる。

Father says he is going to Nikkō next week. (父は來週日光へ行くと申しました) (これを Father said といへば he was going になる譯である)

"To this," says the Times, "England has no objection." (タイムス新聞が曰たには之れに對して英吉利は何の異存もない)

I am told that a larger battle-ship is building at Kure. (是れより大きい戦艦が呉で建造中だと申す事を聞きました)

I hear government has it under consideration. (私は政府で夫れを考究中だと承りました)

We learn that H. M. the Empress will shortly pay a visit to that school. (皇后陛下が遠からず同校へ行啓遊ばされる様に承りました)

此の says, am told, hear, learn は過去或は現在完了で書きさうな詞であるが、斯くの如く現在にして置いて可い。併し勿論過去や現在完了を用ひても不可はないのである。

未來の或る時に完了する事を叙べるに日本語では過去と同様の法を用ふるが、これは英語に於ては決して許されない事だ故、この邦語の文法を英文に適用しない様に注意せねばならぬ。例へば吾々は未來の或る時に何々する後といふ意を、「上海へ着いた上」とか、「兄からの返事を受取たら」などといふ故、此の「た」を過去と同様に解して、英語にても

I will write to you when I got to Shanghai. (上海へ着いた上で君へお手紙を出すよ)

I shall settle it after I received his answer. (あの人の返事を受取たら夫れを落着させます)

などいふ言ひたくなるが、此の過去動詞 got や received は現在完了か現在に改めて have

got, receive とすべきである。未來の事を叙するに現在及び現在完了を使ふことに就いては既に叙實様現在の部に説いて置いたが、尙ほ後段現在完了の部を見て詳悉するが宜しい。

### (3) 未來 (Future Tense)

247. 叙實様未來の意義用法——叙實様の未來は將來に起る事實狀態を事實として記述するに用ふ。

此の *tense* は極めて簡單明瞭であるが、一つ注意を喚んで置きたい事は、前にも言た如く此の *tense* は未來の事實を事實として述べる場合に限りて使ふのであるから、

He will shortly leave for Chōsen. (彼は近い内に朝鮮へ立ちます)

I shall then have to act for him. (その時には私が彼の代理をしなければならぬ事になります)

Shall you come again to-morrow? (君は明日また来るか)

の如き場合には之れを使用するのであるが、併し未來の事に關し單に想像をめぐらしたり、祈願を述べたりする

He may succeed. (彼は成功するかも知れん、成功しさうだ)

May he succeed! (彼が成功してもらひたいものだ)

If he should succeed. (萬一成功するとしたら)

の如き文には此の *tense* は用を爲さない。然しながら此の *tense* の動詞に I hope (自分は希望して居る、あてにして居る), I doubt (僕は疑ふ), we don't think (私は思はない), I fear (私は懸念します) といふ如き言葉を前に付けさへすれば少しは變た意義に用ひられること言ふまでもない。

②\* 天氣、氣候その外人力を以て左右すべからざる自然現象につき未來を語るには、必ず I think, do you think? I hope, probably, I believe, surely といふ如き語句を添へて使ふべきものである。

I think it will be fine to-morrow. (明日は好晴だらう)

Do you think it will rain to-night? (君今夜雨が降るだらうか)

何故かくの如くしなければならぬかと云ふに、叙實際の未來は想像假定の意を表はすものでないから、「今夜雨が降るだらう」のだらうといふ如き意を之れて示すといふことが不可能である、隨て之れに想定の義を示す様な詞を添へなくてはならぬのである。試みに

Will it rain to-night?

と問ふ人があつたと思つたら、之れには何と答へたら可いであらうか。此の語の意は「今夜雨が降りますか」といふので、「降るでせうか」といふのではない故、吾々が神の如き全智なものでない以上は、「今夜は降らない」とも「今夜は降る」とも言へない。そこで吾々人間の間答は「降るだらうか」「降るでせう」「多分降らないでせう」といふに止めなければならぬ。

未來の事を叙するに現在及び現在の進行體を用ひる場合のあることは、現在の部に述べて置いた通りであるが、其の場合に於ては此の *tense* の動詞には shall, will といふ二つの助動詞がどちらか必ず隨伴する。即ち此の二助動詞の附いて居るので以て此の *tense* と他との區別が容易に知られる。

248. 叙實際未來の形體——此の *tense* の形は下の如くなる。

Verb-root, *be*.

單數	複數	單數	複數
1. I shall be.	We shall be.	3. $\left. \begin{matrix} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \end{matrix} \right\}$ will be.	They will be.
2. You will be.	You will be.		

Verb-root, *go*.

單數	複數	單數	複數
1. I shall go.	We shall go.	3. $\left. \begin{matrix} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \end{matrix} \right\}$ will go.	They will go.
2. You will go.	You will go.		

受働體

Verb-root, *study*.

單數	複數
1. I shall be studied.	We shall be studied.
2. You will be studied.	You will be studied.

3.  $\left. \begin{matrix} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \end{matrix} \right\}$  will be studied. They will be studied.

否定には其の意の副詞 not, never 等を shall, will の次ぎに配置するのである。

疑問に於ては主辭が shall, will の直ぐ次ぎに置かれるのと、第二人称に於て will が shall に變る外上の表と異なる所がない。

Verb-root, *read*.

單數	複數
1. Shall I read?	Shall we read?
2. Shall you read?	Shall you read?
3. Will $\left. \begin{matrix} \text{he} \\ \text{she} \\ \text{it} \end{matrix} \right\}$ read?	Will they read?

以上の表に見えてゐる外に shall, will に就いて色々の使ひの方の規則もあるが、非常に複雑である故、別に shall, will, should, would に就き一章を設けて之を講ずることとする。

(四) 現在完了

249. 叙實際の現在完了の意義用法——叙實際の現在完了は(一) 完了したる事、(二) 過去より現在に繼續したる事實、及び(三) 過去の事實の現在の結果、(四) 從來の經驗(五) 時を表はす *adverbial phrase* の中に在りて未來の一定時に完了する事を表はす。

(一) 既に完了した事といふは例へば

I have finished my luncheon. (私は辨當を済ました)

We have just arrived. (今着いた處です)

Have you applied already? (君はもう願出たのか)

He has not yet returned. (あの人は未だ歸て來ない)

の如く出來上て了た事をいふのである(尤も第四の例は歸宅といふ働きが未だ完了しないことを云ふのであるけれども、此のしないといふのは not yet の表はすことであつて has returned は明かに完了を表はして居る)。既に完了したといふ事をいふのならば過去と

は如何程違ふかといふに、過去は何時何日或は何々した時に何々したといふのである故、現在と過去との間を引離して過去の事實を現在より多少の時間前に起た事の様に言ひ表はすのであるが、現在完了は假令ひ多少の時間を距て、前に起た事でも、今済んだ許の事でも同様に、その發生時と現在との間に少しも時間の間隔のない様に叙述するのである。かゝる次第である故言ふ人の考次第で一の事實を過去にも現在にも言ひ得らるゝことが多い。一例を擧ぐれば

Yesterday he was appointed Vice-Minister of Education.

(氏は昨日文部次官に任命せられました)

といへば、前に過去の部にも述べて置いた通り yesterday といふ副詞が附いて居る故、動詞が勿論過去でなくてはならぬ。處て若し此の yesterday の一詞がなくなつたとすれば如何かといふに、其事が何時あつたとは明言せずして唯だ何々といふ事があつたと云ふのである故、今までの内に何時かあつて既に完了したといふ意になつて、

① He has been appointed Vice-Minister of Education. (氏は文部次官に任命せられました)

となる。即ち現在完了である。なほ下の四例を對照して見るがよい。

He set out only three or four minutes ago. (わづか三四分前に出懸けました)

He has left for Yokohama. (もう横濱の方へ立て行きました)

I think you used it yesterday. Where did you put it when you had done with it? (お前昨日あれを使たらう、あいた後にあれを何處に置いた) I put it on the shelf. (例の棚の上に置きました)

Where did you put my lamp? (お前私のランプを何時に置いた) Here it is. I have put it out. (こゝに在ります、私はもう消しました)

要するに英語の現在完了は邦語の「もう——した」、「まだ——しない」、「——して丁度」に當るが、併し之れに過去たることを明かにする語句、例へば yesterday (昨日), a minute ago (寸時前), just now (今し方) 其の外過去の部に示した様な詞や句を添へたら、現在完了の性質は失せて純然たる過去となるのである。現在完了に添へ得られる副詞は just (唯今、丁度) already (もう、既に), yet (まだ——しない) 等である。

尚ほ數言を加へて置くが、「今書いて丁度處です」といふ如き邦語を英語に譯すれば、

I have just written it.

といふてあらうが、若しこの just を just now 或は a minute ago と改めると忽ち tense が變て

I wrote it just now (又 a minute ago)

となる。

邦語で「今」といふ字の附く語句「今世紀」、「今週」、「今日」、「今朝」などは勿論現在完了に屬すべきものである故、

These sciences have made great progress this century. (この學問は今世紀中に大進歩をした)

There has been no fire this week. (今週は一つも火事なかった)

I have seen him this morning. (今朝あの人に逢ひました)  
といふのは當然であるが、若しその世紀の下半より上半の科學界を論して、

These sciences have made great progress during the former half of this century. (此の學問は今世紀の上半期中に大進歩をした)

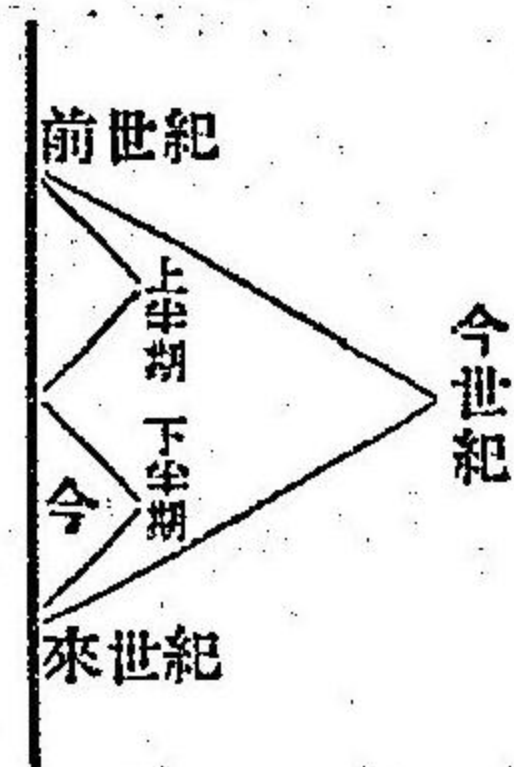
と云たら夫れは大なる誤である。即ち have made を made にしなければならぬ。之れと同様に其の日の午後に至て午前の話をして、

I have seen him this morning.

といふことも不可である。また

I have seen him *about seven this morning*.

も可けない。何故これ等が不可であるかと云ふと、前にも言た如く現在完了は現在と出来事のあった時と觸接して離れて居ない時に限り使用すべきものである。今世紀中に科學が進歩をしたと云へば、今世紀といふ語が廣い意味である故、今といふ時も科學が進歩した時も其の中に包含せられて、二者の間に少しの間隔もない意味になる。それを二分して上半下半にすると今は下半に屬し、科學の進歩は上半に屬することになるのだ故、二つの時の間に多少の間隔を生ずること下の圖の如くなる。換言すれば今といふ時は今世紀



の中へは入るけれども、今世紀の上半期の中へは入らない。之れと同じく今を午後と見れば今といふ時は午前の中へ入らぬ故今と某に出遇た時の間に間隔が出来る。又た發言の時即ち今も午前、某に出遇たのも亦た午前なる場合にも、今(が假りに午前九時とする)出逢た時即ち七時頃とは約二時間の隔て

がある譯である故、此の二の時は決して密接して居ない。是れ即ち現在完了を使ふことの不可なる所以である。そこで現在完了と過去に就いて、之に添へるべき時の語句に關し下の如き規則を守ることが肝要になる。

① 規則——現在(即ち今)が包含せられる意味の語句は現在完了の動詞に副用すべき事。

例へば *this afternoon* (此の午後、唯今の午後), *to-day* (今日), *this month* (今月), *this term* (今學期) 等は何れも現在といふ時を包含する(若し包含しないならば夫れは最早今日でも今月でもないのである)、隨てこれ等は現在完了に添へて使用して可い。

② 規則——現在(即ち今)が包含されない意味の語句は現在完了の動詞に副用せずして過去の動詞に添用すべき事。

例へば *yesterday*, *last month* (先月), *last year* (去年), *three days*

*ago* (或は *since*) (三日前) *in my boyhood*, *when a child* (小兒の時に) 等は勿論、*a few minutes ago* (或は *since*), *at 10 a. m. to-day* (今日午前十時), *at two this afternoon* (今日の午後二時), *a little after dawn to-day* (今日の夜明の少し前) *early this morning* (今朝早く) 等の如きすら今といふ時を包含しない意味の語句であるから、何れも過去の動詞に添へて使ふべく、現在完了のものには副用すべからざる譯である。又た *when* は「いつ」といふ疑問に使ふ場合には勿論、「—した時」といふ意味にも過去の事を叙べる時には必ず過去の動詞に副用しなければならぬ。While, after, before も同様である。

以上所述の外、其の *sentence* に時を表はす語句が附いて居ない場合と雖も、其の前の *sentence* か或はそれより更らに前の *sentence* で以て時が指定せられて居る場合には、決して現在完了を使用することが出来ぬ。歴史上の事實を記述し或は既死の人の事を叙するにも現在を使ふことが出来ぬ。又た働作そのものに重きを置かずして他の事に重きを置く場合にも同様である。一例を挙げれば

*Where have you put my bicycle?* (お前私の自轉車を何處に置いた)

と問ふ場合に、問者は何事に重きを置いて居る乎と問へば、勿論 *where* 即ち何處といふ事である。押込んで置いた、倒して置いた、立てかけて置いた、といふが如き事は問者の問ふ所でない、ツマリ場處が分りさへすれば可いのである。斯くの如く動詞の表はす事を重要視せずして他の問題に力を入れて問ひ語る時には上文の如く *have put* といふのは誤て居る、宜しく *did put* と過去に改むべきである。又た

*Did you buy a black or a grey cap?* (君は黒い帽子買ったか鼠色のを買った乎)

の如き問では問者の重きを置く所が *black* か *grey* かといふ色の點に在るのだから、前の例の如く過去の動詞を使はなければ誤りである。更らに一例を挙げるが、

I got eighty in algebra. (僕は代數に八十點取た)

といふ如き場合に説者は如何なる考へて此言を發したかと問ふに、「もう八十點取た」或は「既に八十點取たから之れを現に今擧て居る」などいふ六けしい意味ではなく(果して左様な意味で云たのならば got は have got であるべき譯だ)、唯だ八十點といふ點數に重きを置いての自慢話か何かである。即ち動詞の表はす動作には重きを置いて居ないのである。この故に動詞は got 即ち過去で正しい。

(二) 過去より現在に繼續した事實といふは極めて明白な事であるが、之れを叙するに現在完了を使ふべきものであると云ふことを兎角忘れ易い故、初學者は餘程留意を要する。斯の如き意義用法の時には since——(何々以來) (since のみならば爾來), for——(何年間何日間), from——forth (何々より後), always (始終) などいふ詞句が動詞を形容することが多い。

We have been great friends from our childhood. (吾々は少年の頃から親友である)

We have always been hand and glove. (吾等二人は今日まで始終水魚の交をして來た) (Hand and glove は手と手袋の如く親密な關係といふ意)

He has held that position for ten years. (あの人は十年間あの位置を占めて居る)

How long have you lived here in Japan? (あなたは今まで日本に何年お住居ですか)

Where have you been all this while? (お前今まで何處に居た)

You have been idle for the last two hours. (君は今まで二時間怠けて居た)

I have spoken with him never since. (爾來チットも彼と口をきかない)

I have not heard from him since he left for America last

year. (去年米國へ立て行てから便りがありません)

此の例を見て直に分ることであるが、此の意味の現在完了は英語では (have や has がある故) 明瞭であるけれども、日本語ではチット不明な點があつて危険である。何故といふに、邦語に於ける此の意義の動詞は大抵現在と少しも異らざる詞を使って、「——から親友である」、「——間——を占めて居る」、「口をきかない」などいふ故である。ツマリ邦語に於ては現在と現在完了とを大概他の詞句で區別して動詞の上には分ちを立てないのである。それ故に我邦の初學者は此の意味の現在完了を現在と同一視して、

I wait (或は am waiting) for him for two hours. (僕はあの人を二時間待て居る)

といふが如き英語を使ふ。大に心すべきことである。

英語には次ぎの如き一見不思議と思はれる造句がある。

He has been dead for a century.

之れを「彼は百年死んで居た」と讀まらぬなら、百年間死んで居て此度蘇生したものかとも疑はれる。併し是れは勿論そんな意味でなく、「彼は死んでからもう百年になる」といふ事である。即ち死んで居るといふ状態が今まで百年間繼續したといふ義である。之れと同じ様に、

She has been married for upward of ten years.

も「あの婦人は嫁してもう十年以上にもなる」といふ意義を表はす。此くの如き場合に has been や have been の下に來る詞は、dead の如き形容詞でも又た married の如き過去分詞でも、動詞の補辭であるといふ事を忘れてはならぬ。動詞だと思へばこそ「十年以上結婚した」「百年死んで居た」などいふ没常識な讀み方もするなれ、補辭にして且つ形容詞だ分詞だと思へば、さる誤解は起らぬ譯である。讀書の際に役に立つ事である故に言して置く。

(三) 過去の事實が生み出した現在の結果といふのが現在完了の意義用法の第三である。是れは例へば過去に於て何か物を買たとすれば、其の行爲の現在の結果は何事であらう。それは勿論其の品物を自分が有し居るといふ事であらう。此の結果を現はす爲めに英語では

I have bought a pair of new boots. (私は新しい靴を一足買て持て居ます)

といふのである。繰返して言て置くが此の have bought は決して單に買たといふ事實或は行爲そのものを表はして居るのではない。買たといふ事實の結果即ち今持て居るといふ義なのである。換言すれば過去の行爲を輕んじて現在の状態に重きを置くのである。若し過去の事實に重きを置いて言ふならば have bought を過去にして bought といふのが當然である。

He has left for Kōbe. (あの人は神戸へ立ちました、だから今は此の家或は當地に居ません)

これも今は當地に居ないといふ意味で云ふ言葉である。なほ下の問答を熟考せよ。

Have you your fountain-pen with you? (君は万年筆を此處に持て居るか) No, I have lost it. (イヤ、僕は失た、だから今は持て居ない)

You bought some goldfishes the other day, didn't you? (君はこの間金魚を買たらう) Yes, I did, but I have given them all to my brother. (ア、買たよ、だけどあれを皆な弟にやつた故今は持て居ない)

此の意味に使ふ現在完了の動詞には一切時を表はす副詞(例へば yesterday) 或は副詞風の句 (when—, since—, at—, in— の如き) を副へることが出来ない。之れを加へると意味が一變する。

此の意味で使ふ現在完了の助動詞 have, has, は往々動詞 be に換へられて居ることがある。Come, gone, arrived, returned 等の過去分詞に就ての習慣である。

He is come. (あの人は來た即ち來て居ます)

They are gone to Europe. (あの人たちは歐洲へ往た即ち往て居ます)

She is arrived at Yokohama. (あの女は横濱へ着いた即ち着いて居ます)

The ship is returned. (その船は歸りました、即ち歸て來て

居ます)

既に來たといふ故來て居るといふ事となり、歸て來たといふから歸て來て居るといふ義になる筈であるが、兎に角奇異な習慣である。因みに言て置く、he has died, they have died といふは英語に餘りない言葉である、其の代りには he is dead, they are dead などといふ。

Have you gone to England? —「君は英國へ行たことがあるのか」といふ意味即ち經驗の有無に關する質問を、邦人は上記の如き英文に譯することが屢ばあるが、是れは不可である。其の理由は此の間は經驗の有無を問ふのではなく、行爲の完了したるや否を問ふか、或は過去の行爲の現在の結果を問ふ事になる故である。即ち「君は行たことがあるか」といふ意にはあらずして、「君は英國へ行て了たか」若くは「君は英國へ行て了た故今は日本に居ないのか」と尋ねることになるのである。然らば之を何と言たら可いかといふに

Have you ever been in England?

といふのが英語の *idiom* に合て居る。若し其の土地が歐州とか英國といふ如き広い處でなければ、in の代りに at を使て、

Have you ever been at Hull?

といふのである。又た

Have you been to England (或は to Hull)?

といふは「英國(或はハル)へ行て來ましたか」といふ意、即ち最近の行爲を問ふことになる。之れと同様に

I have been to Yoshino to see cherry-blossoms. (僕は芳野へ櫻の花を見に行て來ました)

He has been (to) home. (故郷へ行て歸りました、即ち今は當地へ歸て居る) といふことも言へる。

(四) 從來の經驗を表はすといふは上に見えた例の如く

Have you ever been in England? (君は英國へ行たことがあるか)

などいふ場合のことであつて、邦語では「是れまで或は今まで何々した事があるか」といふに當る。此の意義に使ふ動詞には通常 ever, never, often, sometimes (何々したこともある), seldom (滅多に何々したことがない) of late (近頃) 等の副詞或は *phrase* が隨伴する。



I have never been there. (僕は未だ嘗て行たことがない)

Have you often heard the piano played? (君は屢ばピアノの奏せられるのを聴聞したことがあるか)

I have seen little of him of late. (私は近頃あの人に餘り逢ひません)

然し斯くの如き場合に ever や never を使へば過去にするのも差支へない。どちらかと云へば過去の方が多いかも知れない。

Did you ever have a ride in an automobile? (あなたは自動車に乗たことがありますか)

I never saw its like. (僕はあれに似た物も見ることがない)

Shakspeare was the greatest dramatist England ever produced.

(沙翁は英國が従來出した戯曲家中の最もエライ人だ)

(五) 時を表はす *adverbial clause* の中に於て未來の一定時に完了して居るべき事實を表はすといふのは、即ち未來完了の代りに現在完了が使用が出来るといふことである。未來の一定時に完了すべき事實といふは、例へば明日正午までには神戸へ着いて了て居るといふが如き行爲をいふ。之れを英語で書けば

He will have got to Kōbe by noon to-morrow.

となる併し是れは一つの *sentence* を爲して居て、*clause* ではない。之れを *adverbial clause* にするならば、

I think I shall be able to see him when I have got to Kobe.

(神戸へ着した上であの人に逢へると思ふ)

とても言はなければならん、when 以下は即ち夫れである。而して斯かる場合には上に見える文の如く未來であるに拘らず will や shall を含まない故、通常の未來完了の形體を爲さずして現在完了になる。

We shall not feel reassured before we have received his letter. (あの人の手紙を受取て了ふまでは吾々は安心といふ心地になれない)

Let us set out as soon as we have finished tea. (お茶が済

んで了たら出かけませう)

是れ等も時を表はす *adverbial clause* の中に用ひた動詞である故 will have received, shall have finished の代りに have received, have finished を使ふことが出来る。なほ是れ等は皆な when, as, as soon as, after, before 等の如き時を表はす接續語を戴き居ることにより注目して貰ひたい。又は if を戴く *adverbial clause* にも現在完了を前例と同様に使用することが出来る。

I will pay you two yen if you have finished it by to-morrow evening. (お前が明晩までに夫れを仕上げて了たら二圓拂てやる)

249. 叙實様現在完了の形體 — これは極めて簡単なもので第三人稱單數ならば has 其の他は have を取て、之れに必要な動詞の過去分詞を添加すれば可いのである。

Verb-root, spend.

單數	複數
1. I have spent.	We have spent.
2. You have spent.	You have spent.
單數	複數
3. {He } has spent.	They have spent.
{She }	
{It }	

Verb-root, watch.

單數	複數
1. I have watched.	We have watched.
2. You have watched.	You have watched.
單數	複數
3. {He } has watched.	They have watched.
{She }	
{It }	

受働體には have, has と主動詞の間に been を加へるのである。

Verb-root, *find*.

- |                                      |                       |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 單數                                   | 複數                    |
| 1. I have been found.                | We have been found.   |
| 2. You have been found.              | You have been found.  |
| 3. {He<br>She<br>It} has been found. | They have been found. |

250. 現在完了の進行體——これは I, we, you, 或は they have been doing, he has been doing など、變化する。其の用は過去の一定時より現在まで間斷なく繼續し來た事實を叙するに在る。

What have you been doing all this while? (お前今まで何をして居たのか)

I have been reading in the study. (書齋で讀書して居ました)

#### (5) 過去完了 (Past Perfect Tense).

251. 叙實様過去完了の意義用法——叙實様の過去完了(又は大過去といふ)は過去に對して現在完了の現在に於けると同一の關係を持つて居る。故に其の用は (一) 過去の一定時に完了して居た事實 (二) 過去の一定時まで繼續し來た事實 (三) 過去の一定時前に起た事實の過去の結果 (四) 過去の一定時前の經驗を表はす *adverbial clause* 中に於て過去の未來完了を表はすに在る。過去完了は此くの如きものである故、之れを使用する場合には是非とも先づ過去の一定時を明瞭に或は暗々の中に示して置かなくてはならぬ。若し過去がなかったら過去完了が成立する筈がない故である。例へば what little money I had saved (兼ねて私のためて置いた少額の金を悉皆) (此の had saved は過去完了である) といふと、「兼ねて」といふ意義が現はれる、而して「兼ねて」といふは「其の時よりも以前に」といふ意味である。又た「其の時」といふは何時かと問へば無論過去の或る時である。そこで此の「過去の或る時」を假りに昨日とする。そうすれば「兼ねて」といふは昨日より前或は昨日までの事になる。かくの如く前後の關係が明かになれば、此の句

を使って

*Yesterday I bought an English dictionary, for which I paid what little money I had saved.* (昨日僕は英語の字書を買て其の代に僕が兼ねてためて置いた少額の金をスッカリ拂たよ) といふ様な文が成立つ。詳言すれば yesterday といふ過去の一定時を表はす詞もあり、bought 及び paid といふ過去の動詞も出て居るから、had saved といふと夫れよりも前或は夫れまでにあつた事實だといふことが了解せられる。併し若し yesterday とも云はず、bought 及び paid とも云はず、

I will give for it what little money I had saved.

などい云ては、何時から何時までに其の金を貯蓄して置いたのか分らぬ故狂人の言語の様になる (但し have saved といへば現在完了である故今日までに貯蓄したといふ意味が現はれて來る)。然るに我が邦の學生は多く何時を基準としての大過去か分らぬ大過去を使って怪みもしない様だ故、茲に充分の注意を促して置く。

① 【注意】 過去完了は其の前に過去の事を話した時に限て使用し得べきものである。

なほ一言を添へて置くが、過去完了を使ふのは、必ずしも其の *sentence* の中に過去の一定時が現はれて居なくても可い、前の *sentence* にそれが表はされて居て時の關係が分れば、之れを使用してかまはない。故に。

*One morning James went to school. It had rained for two days, and the road was muddy.* (或る朝ジェームズが學校へ行た、その日より前に二日間雨が降たので道路が泥濘になって居た)

と云て rained を大過去にするのは不可ない、前文に one morning といふ過去の一定時が指定してあるし、「學校へ行た」といふ過去の行爲も表はされて居る故である。

これより過去完了の意義用法の細目に亘て説明をせやう。

(一) 過去の一定時に完了して居た事實は決して過去で表はし

てはならぬ、必ず過去完了を用ふべきものである。それは如何なる場合の事かと問へば、

On my arrival at London I found that he had left for America. (私は倫敦へ着いて見たらあの人は既に米國へ向け立てて居た)

の如く一方に過去の事實 (即ち on my arrival at London I found) を述べて置いて、他の一方にその時に或は夫れまでに完了した事實を叙する時をいふのである。

The landlord told me that he had left for America. (亭主が僕にあの方は既に米國へ立ちになりましたと云た)

此の had left も矢張り同様の理由で大過去である。

I had finished my breakfast when you came. (君の來た時には既に朝餉を済まして居た)

No sooner had he got over the wall than he was shot dead. (彼はまだ壁を登り越して了はない位の時に彼は射ち殺された)

He had not gone a mile before he was caught in a sudden shower. (彼は一哩も行かない内に急雨に降られた)

Scarcely had I opened the door when the wind blew out the lamp. (自分が戸を開け切らない内に風がもうランプを吹消した)

No sooner—than, not (或は hardly)—before, scarcely—when と書いて來た時は其の文の前の clause に必ず大過去を要する (no sooner did I get と過去に書くこともある)

(二) 過去の一定時まで繼續した事實といふは下の如き場合をいふ

The river was swollen, for it had rained continuously for two days. (その河は漲て居た其の前二日間雨が間斷なく降たから)

此の had rained は過去の一定時即ち河水の漲て居た時まで二日間繼續した事實を表はして居る。

I found a competent teacher in him. He said that he had taught in two schools for ten years. (私はあの人を伎倆のある先生と見た、あの人は自分は十年間二校で教授をし來たと語た)

此の had taught も同様の理由で大過去でなければならぬ。

I was told that he had been down with influenza for a week. (私はその時彼が流行性感冒で一週間臥て居ると聞いた)

He said that he had been unable to finish it as he had been very busy with public affairs for some time. (彼はそれより前に暫く公務で非常に忙しかった爲めにあれを仕上げる事が出来ませんでしたと云た)

の had been も二つともに過去の或る時まで繼續したといふ意味である。

(三) 過去の一定時より前に起た事實の結果がその一定時に現はれて居た場合に、該結果を表はすには必ず大過去を用ひる。例へば

I could not see him. He had left for England. (僕はあの人に逢はれなかった、既に英國へ立て最早あの地には居なかつた故)

といふ場合に、彼に逢はうと思つて居た時は過去の一定時である。その一定時より前に彼は英國へ立たといふのは即ち過去の一定時前に起た事實である。其の事實が前記の一定時に如何なる結果を生じて居たか、即ち彼が其處に居なかつたといふ事であらう。之れを he was not there と云ても意味は分る。併しこれは單に過去の状態であつて、過去の一定時前に起た事實の結果とは謂はれない。それを表はすのは即ち大過去である。

He rented a house, for his former one had been destroyed by fire. (あの人は家を一軒借受けた、元との家が大火事で焼けて家なしだ故)

此の had been destroyed も單に焼失したといふのではなく、焼失

して家がなかったといふ火災の結果を表はして居る。

I could not buy it. I had spent my last penny. (私は夫れを買へなかった、最後の一錢も使って一文なしてあったのだ)

此くの如き意味の過去完了は大抵事實の發生順序を轉倒して、前に起た事を後に起た事のあとに叙述する場合に用ひられる。上の二例に就いて看よ、「家を借受けた」といふ事實は「焼失した」といふ事實よりも後の事である、其の後の事を前にし、前の事を後にして話をする故、動詞に何か徴しをなければ讀者に前後の關係が分らなくなる。是れ即ち大過去の必要なる所以である。其の次の例の could not buy it と had spent も事實の順序と記述の順序が正反對になって居るのを看よ。

(四) 過去の一定時より前にあつた經驗を叙するにも此の tense を用ふる。

I knew him well; I had often seen him at my friend Mr. Wilson's. (僕はその人をよく知て居ました、僕は友人のキルムン君の家で度々出逢たことがあつたものだから)

此の例で過去の一定時といふのは「彼を知て居た」といふ時である。その時より前に度々した經驗のある事である故、「逢た」といふ意味は過去完了を以て之れを表はすのである。

I could not tell which was the better, for I had never seen either. (私は何ちらが良いとも言へなかった、何故となれば私は兩方ともに見たことがなかったのだから)

It was the largest ship I had ever seen. (それは僕がその時までに見た内の最大船であつたのだ)

He said that he had seldom spoken English. (彼は滅多に英語を使ったことは御座いませんと曰た)

He asked me if I had ever sung before a large audience. (彼は私に多數の聴衆の前で歌たことがあるかと尋ねた)

(五) 時を表はす *adverbial clause* の中に於て過去の未來完了の意を表はすにも過去完了を使ふ。過去の未來完了といふは少し

く理解し難い事と思ふから詳細に説明をしやう。先きに現在完了の部に於て( 頁参照)讀者の頭に入て居ること、思ふが、普通の未來完了ならば will (或は shall) have got といふべき處を、*adverbial clause* の中に使ふ時に限て、其の事の未來なるに拘らず、現在完了を使用して have (或は has) got といふ。之を對比すると

普通の場合の未來完了

*Adv. cl.* の中の未來完了 (即現在完了)

I shall have written it by Monday. (月曜までにあれを書いて了ふ) I will send it to you as soon as I have written it. (私があるを書いて了たら早速君へ送ります)

I think you will have got it through by the end of this month. (僕が思ふに君は今月末までに (君それを讀んで了たら加藤君は夫れを讀んで了て居るだらう) へ返して呉れ給へ) Please return it to Mr. Katō when you have got it through.

となる。即ち左側の will have got, shall have written は右側の have got, have written と同じ時を指しても、左側の方は通常の *clause* であるし、右側は時を表はす *adverbial clause* である故 tense を異にして、甲は未來完了乙は現在完了である。

さてこゝに所謂る未來といふは一體何時かと云ふに、無論現在より以後を指す、即ち未來といふは現在より見た未來である。然るに未來は現在ばかりでなく過去にてもある。例へば明四十五年四月一日は過去であるが、更らに同年四月三日を見れば是れ四月一日の未來即ち過去の未來である。そこで

現在

未來

I think (思ふ).....I shall go. (行くことになるだらう) の think を thought (思た) といふ過去にするとすれば、shall といふ未來の動詞が亦た過去に變るのである。即ち

過去

過去の未來

I thought (思た) I should go. (行くことになるだらう) となるのが極まりである。斯くの如く英文の *sentence* はその一部

分が過去になれば他の部分も通常之に従て變化するのである故、上の例に見えて居る I shall have written 云々を過去にして之に I said を附けると

I said I should have written it by Monday. (月曜日までに私は書いて了て居ますと云た)

となる。して見れば其の右側の文 I will send it 云々を過去にして同じく I said を加へると

I said I would send it to you as soon as I had written it (僕はあれを書いて了たら早速君へ送ると曰た)

となる道理である。而して此の I said が過去、would send が過去の未來ならば had written は過去の未來完了である。過去の未來完了は通常 should (或は would) have に過去分詞を加へて之を造るのであるが、時を表はす *adverbial clause* には大過去に造る。  
~~I said I should~~ have written it 云々といふ時に should があつて as soon as I had written の時には普通の過去完了の形をして居るのは即ち此の規則によつたのである。之れと同じく上の例 I think you will 云々を過去に變ずるならば

I thought you would have got it through by the end of this month. (私は君が今月末までに夫れを讀んで了て居るだらうと思た)

となるし、又た其の右側の文を過去の形にして I hoped you would とすれば、

I hoped you would return it to Mr. Katō when you had got it through. (君が夫れを讀んで了たら加藤君へ返して呉れることを望んで居た)  
 have got は矢張り had got と變る。

I said I would return it when I had done with it. (僕はあれがあいたら返却しやうと云た)

Did you not say that you would let me know as soon as you had finished it? (お前は夫れが終て了たら早速私にお知らせ

申すと云たぢやないか)  
 も過去完了を過去の未來完了に使つた例である。

前にも申した如く過去完了の過去に於けるは猶ほ現在完了の現在に於けるが如きものである。故に現在を過去に改めると現在完了も亦た過去完了に改めなければならん。是れあらゆる過去完了に通じて當てはまる規則である。今之れを比較して讀者に示さう。

(一) 現在までに完了した事

I think you have done with it. (君はそれがもうお明きになったと僕は思ふ)

(二) 現在まで繼續した事

I have known him for thirty years. (私はあの人をもう三十年も知て居ます)

(三) 過去に起つた事實の現在の結果

I am sorry to say that he has left for China. (お氣の毒ながらあれは支那へ立て行て今は此處に居りません)

(四) 現在までの経験

I know him, for I have seen him at school very often. (僕はあの人を知て居る、度々學校で逢て居るから)

過去の一定時までに完了した事

I thought you had done with it. (君はそれがもうお明きになったと僕は思た)

過去の一定時まで繼續した事

He was a great friend of mine. I had known him from my childhood (又は for thirty years) (あれは私の親友であつた、私は幼少の頃から知て居ました)

過去の一定時前に起つた事實の過去の結果

The visitor wanted to see him, and I told him that he had left for China. (その客は彼に面會したいと云た故支那へ立て行て今は居ないと答へ置いた)

過去の一定前の経験

I knew him, for I had seen him at school very often. (僕は其の頃彼を知て居た、其れまでに度々學校で逢て居た故)

(五) 未來完了の代りに使ふもの	過去の未來完了の代りに使ふもの
I will return it to Mr. K. when	I said that I would return
I have done with it. (あれが明	it when I had done with it.
いたら K. 君に返却します)	(あれが明いたら K. 君に返却
	しませうと曰た)

252. 過去と過去完了——過去の過去は通常過去完了を以て之れを表はす。故に單に過去ならば

It rained heavily (yesterday). (昨日は大雨が降た) であるべき筈だが、

Yesterday the road was very muddy. と昨日の事を記して、其の後に「その前日(即ち一昨日)一日大雨が降た故」といふ様な語句を添へる時には、是れ過去の過去を叙する事になる故、

Yesterday the road was very muddy as it had rained all through the day before. と大過去を用ひねばならぬ。然しながら事の發生の最後が明かに分る場合殊に after, before, till, until を以て二つの clause を結合して居る文に於ては、此の規則は必ずしも守らなくてよい。唯だ一方の事實が起つた時々に一方の事實が完了したといふ意を表はすには、是非とも過去完了を用ひねばならぬ。

I gave him a curious tea-pot, which I bought while living at Kyōto. (彼に急須を贈た、これは僕が京都に住んで居る頃に買ったのだ) といふが如き場合に gave と bought とは發生の前後が文意で明白に分るのである故、bought を大過去にしなくても可いのである。

I waited for him until I heard the bell of Ueno ring ten. (私は上野の鐘が十時を打つまであの人を待ちました) これも上述の理由で heard を大過去にしなくて可い。然るに前の文の如きも while living at Kyōto など、いふハッキリした時を示

す語句のない場合には、矢張り事の先後が不明瞭になる故 bought を過去完了にして、

I showed him a curious tea-pot which I had bought at Kyōto. (私は兼ねて京都で買て置いた急須を彼に見せた) と言ふべきである。

He arrived much earlier than I expected. (あの人は私の豫期して居たよりも餘程早く着きました)

これの如きは expected といふ動詞に時を表はす詞句が伴て居ないけれども、本來此の動詞の意味が「豫め期す」即ち他の事實の發生前に思ふと云ふに在るの故、arrived といふ事實の前にあつた事實を指して居ることが明かなるより、これを過去完了の形にする必要がないのである。然るに此の「豫め」といふ意義の含まれて居ない動詞、例へば dream (夢想す)、imagine (想像す) の如きものを之れと同様に使用する時には、事の先後を明かにする詞句の伴はざる限りは、之れを過去完了にする必要がある。即ち

This was what I had never dreamed of. (これは自分は未だ嘗て夢にも想はなかつた事であつた)

I found it far more beautiful than I had imagined. (自分はそれが兼ねて想像して居たよりも遙かに美しものと見た) となるのである。

大過去は時によっては過去の was, were に過去分詞を添へたのと同効力になる故、前者の意味を後者を用ひて表はしてあることが少からぬ。例へば

I was determined to run the risk. (僕はその危険を冒して見やうと決心して居た) の如きをいふ。何故に was determined が had determined と同じであるかといふに、was determined は決心して居たといふ過去の状態であつて、働きとか行爲とか稱すべきものでない。而して此の状態になる前に I は必ず決意といふ行爲をしたに違ひない。換言すれば前に決意をした故後に決心して居たのである。故に大過去の

had determined は原因で was determined は結果である。併し過去完了は前に見えて居た如く過去の一定時より前に起た事實の過去の結果をも表はし得るのである故、had determined はつまり was determined と同一点に歸着する筈である。

He was convinced (=had convinced himself 或は had been convinced) that further delay would bring upon him more troubles. (彼は此の上グズグズして居ると更らに厄介を招くことになると思つて居た)

の was convinced の如きも、自から信ぜしめ或は他より信ぜしめられた故、自然の結果として信じて居たといふ譯になるのである。而してこれは現在完了の部に於て説いて置いた has come と is come, have returned と are returned, has arrived と are arrived と同じ意味になるといふ理と同一の譯合である。つまり has come の is come に於けるは had come の was (或は were) come に於けるが如しである。なほ下の對比に注目考究するが宜しい。

He is (=has) resolved to face the danger. (彼は今その危険に立向はうと決意して居る)

I am (=have) determined that I will carry it out. (自分はそれを實行しやうと今決心して居る)

The doctor is (=has) come. (お醫者が来て居らっしゃる)

He was (=had) resolved to face the danger. (彼は其の時その危険に立向はうと決意して居た)

I was (=had) determined that I would carry it out. (自分は之れを實行しやうと當時決心して居た)

I knew that the doctor was (=had) come. (お醫者が来て居らっしゃること知て居た)

253. 叙實様過去完了の形體——叙實様 過去完了の動詞は助動詞 had を過去分詞に添へて之れを作る。又た單複數に區別なし。  
Verb-root, take.

單數及び複數		單數及び複數
1. I (we) had taken.	He	} had taken.
2. You had taken.	She	
	It	
	They	

受働體は之れに been を加へるのである。

單數及び複數		單數及び複數
1. I (we) had been taken.	He	} had been taken.
2. You had been taken.	She	
	It	
	They	

否定には總べて否定語 not, never その他を had の次に入れるのである。

254. 叙實様過去完了の Progressive Form.——過去完了の進行體は過去の一定時まで間斷なく繼續した事實を表はす。之れには各人稱單複數とも had been に現在分詞を加へて之れを作るのである。

He said that he had been fishing in a boat. (彼は今まで舟に乗て釣をして居ましたと曰た)

I knew that she had been weeping. (私は彼女が夫れまで泣いて居たのだと知た)

#### (6) 未來完了 (Future Perfect Tense).

255. 叙實様未來完了の意義用法——此の tense は未來の一定時まで繼續すべき事實を表はす。例へば未來の一定時即ち明日午前七時を定めて、其の時刻までに或る事實が完了するといふことをいふに此の tense を使ふのである。

I think I shall have completed it by 7 o'clock to-morrow morning. (明朝七時までに其れを完成して居ると思ひます)

You will have got there before he leaves. (かの人が立つまでに君は彼處へ着いて居るだらう)

Do you think these trees will have blossomed by the time I come back? (僕の歸て来るまでに此の樹が花が咲いて居る)

と思ひますか)

256. 叙實様來完了の形體——未來完了の形體は第一人稱で *shall have* に過去分詞を加へ、第二第三人稱には *will have* に過去分詞を加へるのである。

Verb-root, *finish*.

- |                                |      |                       |
|--------------------------------|------|-----------------------|
| 單數及び複數                         |      | 單數及び複數單               |
| 1. I (we) shall have finished. | 3. { | He                    |
| 2. You will have finished.     |      | She                   |
|                                |      | It                    |
|                                |      | They                  |
|                                |      | } will have finished. |

受働體には之れに *been* を加へるのである。

Verb-root, *inform*.

- |                                     |      |                            |
|-------------------------------------|------|----------------------------|
| 單數及び複數                              |      | 單數及び複數                     |
| 1. I (we) shall have been informed. | 3. { | He                         |
| 2. You will have been informed.     |      | She                        |
|                                     |      | It                         |
|                                     |      | They                       |
|                                     |      | } will have been informed. |

否定には總べて *not*, *never* その他の否定語を *shall* の次ぎに入れよ。

257. 未來完了の *prolessive form*.——未來完了にも進行體があるが其の使用の機會は極めて少い。其の用は過去現在或は未來に始まって未來の一定時まで繼續する事實を表はすに在る。

I think I shall be able to finish it at midnight. Then I shall have been working at it for fourteen hours. (僕は今夜夜中にあれを完成することが出来ると思ふ。さすれば僕は十四時間あれにかゝって居たことになる)

之れを進行體にしなければ、普通の未來完了にして、

Then I shall have spent fourteen hours in it. (さすればあれに十四時間費したことになる)

#### 四、假想様 (Subjunctive Mood).

258. 定義——假想様 (*subjunctive mood*) は (一) 假想を表はし、(二) 疑はしき行爲、出來事、狀態を表はし、又は (三) 祈念願望を表はすに用ひる。

前にも述べた通り事實を事實として表はすには叙實様を用ひるが、その事實が疑はしいか、或は單にその事實ならんことを祈願するには、叙實様では其の用を爲さない。それには假想様を使用するのである。例へば

He will not come as his father is ill. (あの人は父上が病氣だから來ない) (此の病氣といふは叙實様である) と云へば動詞 *is* は事實を事實とした語である故叙實様である。之れを疑はしい話とすれば

He will not come if his father be ill. (あの人は父上が病氣ならば來ない) (此の病氣は事實なるや否や疑はしいのである) と假想様の *be* を以て叙實様の *is* に易へなければならん。又た

He is a very promising lad, and I think every success will attend him. (あれは將來餘程見込のある少年だ、私が思ふに有りである成功があの人身に伴ふだらう、即ち何事にも十分に成功するだらうと思ふ) (將來の事實)

は未來の事實を事實として叙述した言である。この成功云々を祈願を表はす様に述べると、

Every success attend him! (有りである成功が彼の身に伴はんことを祈る、即ち彼が十二分に成功することを祈る)

となる。此の *attend* は事實ではなく祈願までに止まる、故に假想様を使はなくはならん。事實上ない事、事實と違て居る事を假定する場合にも勿論假想様である。

If there were no sun, there would be no animals and plants. (太陽がないと假定したら動物も植物はないだらう)



此の were は純然たる假定即ち事實に正反對の假想である。其の下にある would be に就ては文法家が或は假想様だといふが、此の書て便宜上可能の一種に入れて置く。

假想様は大略かくの如きものである。詳細の話は少しく複雑になる故各 *tense* の部に分ちて之れを説くこととする。

259. 假想様と *tense*.—假想様にも下の如き六つの *tense* がある。

- (一) 現在、(*Present tense*)
- (二) 過去、(*Past tense*)
- (三) 未来、(*Future tense*)
- (四) 現在完了、(*Present perfect tense*)
- (五) 過去完了、(*Past perfect tense*)
- (六) 未来完了、(*Future perfect tense*)

以下各 *tense* の假想様を順を追て述べやう。

#### (I) 現在 (*Present Tense*)

260. 假想様現在の意義用法—假想様の現在 (*subjunctive present*) は (一) 疑はしき現在の状態 (二) 疑はしき未来の行爲情態 (三) 祈念願望を表はすに用ひる。

(一) 疑はしき現在の状態を表はすといふは例へば、

If he be so rich, he ought to help you. (かの人があるに富裕であるのなら君を助くべきである、然し左まで富裕であるか否やは疑はしい)

の如く現状に就き疑惑のあることを示すのである。若し此の假想様の be を叙實様の is に改めるとすれば、説者が其の人の富裕であることを信じないまでも事實に近いと見て言ふことになる。

If they have so many, he will not hesitate to comply with my request. (あの人だちがそんなに持て居るのなら早速僕の願を叶へて呉れるが、然しそんなに有るか知ら)

Let no one pass, whether he be a soldier or not. (誰も此處を通すな、軍人であってもなくても)

Let no one pass, be he a soldier or not. (同上) (これは whether を略した形である)

Though the report be true, it has nothing to do with your business. (その報知が實であつても夫れは君の業に何の関係もない)

He may see my brother if he be still staying there. (あの人があるに彼の地に滞在して居るならば兄に遇ふかも知れない、然し居るか居ないか夫れが怪しい)

He will do it if it lie in his power. (それがあの人の方で出来ることならば、爲るだらうが、出来るかどうか分らない) の have, be, lie 皆な疑を含んだ言ひ方である。然し勿論全然之れを否定する様な意味はないのである。

此くの如く疑を表はす以上は此の *tense* には自から if, though, unless (—てなければ), whether (—でも—なくても) 等の接續詞が大抵随伴する譯になる。上の例は皆な夫れてある。

(二) 未来の行爲と状態に就いて疑を挿む言ひ方も此の *tense* の務めである。一例を挙げれば

Nothing can be done unless he consent. (あの人がある承諾をして呉れなければ何もすることは出来ない、然るにあの人の諾否は頗る疑はしい)

She will not receive them though she be at home, for this is Sunday. (あの人がある在宅して居ても面會しない今日は日曜日だから)

If you go, I will accompany you. (君が行くならば僕は同行する)

If he stay at home, he will be glad to see you. (あの人があるに其の時に家に居れば喜んで君にお目にかゝるだらう) 何れも事は未来であつて且つ其の實否に疑を挿んだ言ひ方である。而して此の疑が一層強くなると、假想様の未来になつて、此の動詞に should を加へることを要する。

(三) 祈念を示し願望を表はすには矢張此の *terase* を使ふ。但し此の意味に用ひる時には文尾に ! を附けることになって居る。

Every success attend you! (あらゆる成功を収め給はんことを祈ります)

Luck go with you! (好運の君に伴はんことを祈る、君に幸あれ)

God bless you! (神の君に幸を下し給はんことを禱る、御機嫌よう)

Long live the Emperor!\* (皇帝陛下の長壽あらせんことを祈る、皇帝陛下萬歳)

261. 假想様現在の形體——假想様の現在は *be* に至るまで悉く *verb-root* をその儘に使へば可いのである。その故に第三人稱單數にも *s* を附けるなどといふ面倒がない。

Verb-root, *be*

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) be.	3. $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \\ \text{They} \end{array} \right\} \text{be.}$
2. You be.	

Verb-root, *speak*.

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) speak.	3. $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \\ \text{They} \end{array} \right\} \text{speak.}$
2. You speak.	

否定には *be* の次ぎ *not* を置く。他の詞には *do not* を加へる。

\*Long live the Emperor! は佛語の *Vive l'empereur!* (皇帝萬歳) の譯語である故、隨て *live* が皇帝の前へ来て居るのである。英語の普通の排列法では *The Emperor live long!* であるべきである。

Verb-root, *be*.

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) be not.	3. $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \\ \text{They} \end{array} \right\} \text{be not.}$
2. You be not.	

Verb-root, *speak*.

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) do not speak.	3. $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \\ \text{They} \end{array} \right\} \text{do not speak.}$
2. You do not speak.	

受働體には助動詞 *be* と過去分詞を並べるのである。

Verb-root, *call*.

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) be called.	3. $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \\ \text{They} \end{array} \right\} \text{be called.}$
2. You be called.	

262. 假想様現在の *Progressive Form*.——假想様現在にも進行體がある。是れは現在及び未來の或る一定時に進行中とも思はれ又た疑はれる事を表はすに用ひる。

If he be studying hard, he will not care to join us. (あの人 が今勉強して居るのならば吾々の仲間に加はることない、併し勉強して居るかどうだか)

I will not go if it be raining just at eight. (丁度八時に雨が降て居たらば私は行きません、然し其の頃は降て居るか否かは分らない)

此の體は *be* に現在分詞を添へて之れを作る。

Verb-root, *read*

單數及び複數

1. I (we) be reading.
2. You be reading.

單數及び複數

3. 

}	He
	She
	It
	They

 be reading.

茲に一言添へて置くが、今日の英語では假想様の現在といふものは追々使用せられなくなつて行く、何れ遠からず無くなるのであらう。其の代りに今日の人々は多く普通の叙實様現在を使ふ。然しながら讀者は此の *tense* の形體と意義とを知て置かないと英文を読む時に差支へを生ずる筈である故、全く之を等閑に附する譯には行かない。

## (2) 過去 (Past Tense)

263. 假想様過去の意義用法 — 假想様の過去 (*subjunctive past*) は現存の若くは平素の事實に正反對の假定を表はす。

假想様過去はかくの如き意義を有して居るから、隨て實際あるものをないと假定し、或は事實上ない事があると假定し、或は又た事實上絶無の事をあればよいと望み、又た現にある事を無ければよいと願ふなどの用を爲すのである。尚ほ此の *tense* は名は過去であるけれども、其の實は現存の事物に關する話に用ひられる。決して其の名に欺かれて過去だと思ひ違へてはならぬ。

If I were you, I *would* not *act* so. (僕が君なら僕はそんな事をしない)

僕が君だといふのは現存の事實に反對した假想である。自己が他人になれるなら自他の區別は無くなつて了ふ。

If there were no sun, we *should* soon *die*. (日が無かったら吾々は程なく死んで了ふ)。

太陽といふ物は現にある。それを無いと假想するが假想様の過去になるのである。

If I had a million yen, I *would* give you half the sum. (僕が百萬圓の金があるなら君に半分やる積りだけれども)

He *would* gladly *serve* you if he spoke French. (あの人が佛語を話すならばあなたの御用を喜んで相勤めるのですけれども)

此の *had*, *spoke* いづれも純然たる假定を表はす假想様過去である。If といふ接續詞を使って其の後に此の *tense* を用ひる時は、此の *clause* を *condition* といひ、其の次に來る *clause* は其の結果或は結論を表はす譯になる故、之れを *consequent* といふ。Condition に假想様を使ふと其の *consequent* には *would*, *should*, *could*, *might* を使ふのが普通である。上の例の何れを見るもさうである。而してこれ詞動等のは假定を基礎として立てた結論を表はすのである故これ亦た空想假定たるに止まる。此の故に斯かる場合の *would*—, *should*—, *could*—, *might*— は矢張り假想様の過去とするも可なりである。然し本書には便宜上可能様の中へ加へて置く。

As if には勿論假想様過去の動詞が隨ふことがあるが、是れも前述のものと同じ意義になる。

The medicine relieved me from the pain as if (it were done) by magic. (その藥は宛かも魔法でやったかの様に其の痛みを除きました)

He asked him his forgiveness as if it were his own fault.

(彼れは自分の過ちでもある様に彼の宥恕を願ふた)

因みに言て置くが、as it were (so to speak と同く「言はゞ」といふ義に用ひる) といふ句は元來 as if it were といふ義であつて、「實際はさうでないけれども假りに譬へるならば——の様なものだ」といふ假想の意が含まれて居る故、were といふ假想過去の動詞を使ふのである。

It was, as (if) it were, a thunderbolt from the blue. (それは比喩を取るならば青天から落ちて來た霹靂の様なものであつた)

次ぎに事實上なき事をあればよいと云ひ或は事實上ある事をなればよいと語る場合は

I wish I were a bird. (自分は鳥であればよいと思ふ)(鳥でないものを鳥であればと願ふの意)

How I wish that he were here! (あの人が此處に居て呉れたらどんなに嬉しいだらう)(彼は此處に居ない事は事實であるけれども居て呉れることを如何ばかり自分は切望するであらうとの義)

の如きをいふ。此の意義の望みは hope を以てせずして wish を以てするを規則とする (hope は望んで得らるゝ見込あることを望むに用ひ、wish は願ても得られない願を表はすに使ふ)。I-wish の代りに subject (主辭の)ない would を使用することもある、併し是れは今は多く韻文や詩文的散文に使ふ。

Would I were a bird and could fly up to thee! (自分は鳥になって君の許へ飛び行くことが出来たらナア)  
此の would や前に述べた wish が省略せられることも随分ある。

O that I were dead! (ア—ア—自分が死んで居るならナア)  
ア—ア—死んで了へば善かった)

假定の were を infinitive に結合せて if にクツケると、現在の事ではなく未來の事に關する純假定を表はし、將來有り得べからざる事の發生を假想する義となる。

If he were to come, we should not have to bother ourselves about it. (あの人が來ればあの事に就いて心配をするには及ばないのだけれども)

He would not agree with us if the sun were to rise in the west. (日が西から出ることになっても、彼は屹度吾々に賛同しないだらう)

此の假想様の were に infinitive を加へたものは他の組立の文と下の如き相違が生ずる。

If the sun were to rise in the west. (他日日が西から出ることとなっても)(然し將來とて左様なことはないとの意)

If the sun rose in the west. (太陽が不斷西から出るならば)

(然し常不斷西天から出るといふ事實はない)

If you rise at five o'clock (to-morrow morning). (明朝五時に君が起きるなら)(五時に起きるに決して居るが果して然らば、或は五時に起るといふは疑はしいけれど併し兎に角起るとする)

If you should rise at five o'clock to-morrow morning. (君が萬一明朝五時に起きるなら)(五時に起るといふは頗る怪しい事であつて大分六けしいが萬一にも左ることになれば)  
然し should——と were to——とを同様に未來に於ける不可能の事に使用する人もあるといふことを一言添へて置く。

264. 假想様過去の形體——假想様の過去の形體は be を除く外總べて叙實様の過去と同じである。

Verb-root, go.

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) went.	3. { He She It They } went.
2. You went.	

Verb-root, be.

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) were.	3. { He She It They } were.
2. You were.	

受働體は各人稱單複數とも were に過去分詞を添へて之れを作る。

Verb-root, like.

單數及び複數	單數及び複數
1. I (we) were liked.	3. { He She It They } were liked.
2. You were liked.	

念の爲めに言て置くが、此の受働詞の were 及び be の假想様過

去なる were は其に was を以て代用されることがある、然かも是れは學ぶべき事ではない。

265. 假想様過去の *Progressive Form*。——此の *tense* にも進行體があつて現在の事實に反對の事の進行なることを假定するに使ふ。

Just think what your father would say to that if he were living. (お前のお父様が假りに御存命であるとしたら夫れを何と有仰るだらうかマア考へて御覽)

O, how I wish my father were living. (ア—父上が御存命だったら如何ばかりよからう)

Were going に *infinitive* を加へると would 或は should に *verb-root* を添へたものと同じ意味になる。

He wept as if her breast would (or were going to) burst. (彼は胸の張り裂ける様に啼泣した)

### (3) 未來 (Future Tense)

266. 假想様未來の意義用法——假想様の未來 (*subjunctive future*) は人によっては可能様に入れる。これは未來に於て起るや否や頗る疑はしいと云ふ意を表はし、接續詞 *if* に添へて僞定の言に用ひる。併し勿論是れは純假定でない、この點に於て假想様の were to——と意義を異にする。是れは既に前に論じて置いた通りである (第二百六十三節参照)。

If you should see him, please tell him so. (萬一あの人にお逢ひになったらどうかさう言て下さい)

Should he come, he would help us. (萬一にも來れば吾々の助をして呉れるのだが)

If anything material should happen in my absence, let it be known to Satō. (萬一留守中に何か重大な事が起たら佐藤に知らせよ)

267. 假想様未來の形體——此の *tense* は總べて should に *verb-root* を添へて之れを作る。

Verb-root, *come*.

單數及び複數

單數及び複數

1. I (we) should come.

2. You should come.

3.  $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \\ \text{They} \end{array} \right\}$  should come.

受働體は上記の形に be を加へるのである。

Verb-root, *see*.

單數及び複數

單數及び複數

1. I (we) should be seen.

2. You should be seen.

3.  $\left. \begin{array}{l} \text{He} \\ \text{She} \\ \text{It} \\ \text{They} \end{array} \right\}$  should be seen.

因みに云て置くが、此の *tense* を含む *clause* は前にも述べた通り大抵 *if* を戴いて居るが、*if* の代りに之れと同意義の現在分詞 *supposing* を用ひてあることがある。

*Supposing* (that) he *should refuse*, what would you do?

(先方が萬一にも拒絶するとしたら君はどうする積りか)

然るに *supposing* を *suppose* (——と假定せよ、さうしたら) に代へると、その次の *clause* には假想様の過去が用ひられるのが普通である。

*Suppose* (that) you *were* president of that company, how would you deal with those strikers? (君があつた会社の社長であるとしたら君はあのストライキをやつた雇員をどう處置する)

これは無論純假定であるし、又た其の假定は現在の事實に關はるものである。

### (4) 現在完了 (Present Perfect Tense)

268. 假想様現在完了の意義用法——假想様の現在完了 (*subjunctive present perfect*) は事實が現在に完了し或は現在まで繼續したやを疑ふ意を表はす。併し是れは大概叙實様を以て表はす故、此の *tense* は餘り實際に用ひられて居ない。

If they have finished it, they will send it to you by this evening. (あの人が今までに夫れを完成したのならば今夕までに夫れを送てよござだらうが、併し出来たかどうか半ば疑はしい)

If he have been so ill, he can't be expected to-day. (今までそんなに病氣が悪ければ今日は來ることがアテにならない、併し今日まで悪かったといふ事は疑はしい)

上の第一の例の have been は之れを叙實様の現在完了に改めると has been となる。而して吾々は通常この方を用ひるのである。

269. 假想様現在完了の形體——假想様の現在完了には皆な助動詞 have に過去分詞を加へて之れを作る。

Verb-root, keep.

- |                      |   |
|----------------------|---|
| 單數及び複數               | 單數及び複數                                    |
| 1. I (we) have kept. | 3. { He<br>She<br>It<br>They } have kept. |
| 2. You have kept.    |   |

(5) 過去完了 (Past Perfect Tense)

270. 假想様過去完了の意義用法——假想様の過去完了 (subjunctive past perfect) は過去の事實に正反對の事を假想し或は過去に於て無かつた事を有たものと假定し、或は現在までの事實に相違した事を假想するに用ひる。

此の tense は名は過去完了といふけれども、其の實叙實様の過去完了とは大に違て、唯だ過去の事實に反對し或は相違した事を想定するの用をなす。故に此の名に誤られて過去の一定時に完了した事を表はすなどと誤解してはならぬ。是れ特に初學者の留意すべき所である。

(I am very glad to learn that he passed the examination.)

If he had failed in it, he would have had to discontinue his study in Tōkyō. (あの人が試験を通たと聞いて實に嬉しい、若

しあの試験に落第したら東京で勉強することは止めにしなければならぬ事になつたらう)

此の文は先づ he と云ふ人が試験に及第したことを事實と認めて居る、之れに落第したと云ふのは純然たる假想たるに過ぎない、即ちこれは前に述べた過去の事實に正反對の假想である。

(I was prevented from joining them by my illness.) How I wish I had joined them! (私はあの方々と御同行することが病氣に妨げられて出来ませんでした、御同行すればよかったです。すが残念至極です)。

これも同行しなかつたことを事實と認め、一方に於て同行したことを今望むこと極めて切だとの意であつて、即ち過去の事實に正反對の事を想定して之れを望むといふのである。望んだ處で最早返らぬ事である故、かゝる言葉は言はに愚痴である。

If he had not succeeded in it, he would have been ruined.

(あの人は彼の事業に成功した故よかつたが、若し成功しなかつたら破産して子たらう)

これも成功が事實であつて不成功が事實の正反對である。

If it had rained a few more hours, I should have been obliged to stay at Nagoya for a week. (あの時に雨が止んだ故仕合せてあつた、若しもう三四時降たら僕は名古屋に一週間も滞在しなければならぬことになつたらう)

此の had rained は無を有に假想したのである。

(I am glad that you have come.) If you had not come, we should have to hire some one to assist us. (君が來て呉れて誠に嬉しい、君が來て呉れなかつたら手傳ひに誰か傭はなくてはならぬのであつたが)

この had not come は現在までの事實に反對の假想を表はす。

I wish that you had brought me five instead of three. (君

は三つでなく五つ持て來て呉れよかつた)

これは今三つ持て來たとは事實が完了したが、此の事實に相違した

事(即ち五つ持て来て呉れる事)を望むといふ意である。即ち現在までにあった事実と違ふ事を假定して之れを希望するのである。これ亦た愚痴の言である。

總じて假想様の過去完了は邦語の所謂「死んだ兒の年を算へる」といふ様な愚痴めいた意を表はすに用ひられる。

If my dear Tarō had not died (或は *were living*), he would be twenty now. (可愛い太郎が死ななかったら今は二十歳だが)

I think you wish you had not let Tarō go alone. (私が思ふにあなたはあの時に太郎を一人で行かせなければ善かったと思ひてせう)

の如きは即ち其の明白な例である。

271. 假想様過去完了の形體——假想様の過去完了は叙實様の過去完了と同一の形體であつて、had といふ助動詞に過去分詞を添へて之れを作る。

Verb-root, *bring*.

單數及び複數

1. I (we) had brought.
2. You had brought.

單數及び複數

3. 

He
She
It
They

 had brought.

受働體も叙實様の場合と同様 *been* を加ふれば足る。

Verb-root, *send*.

單數及び複數

1. I (we) had been sent.
2. You had been sent.

單數及び複數

3. 

He
She
It
They

 had been sent.

此の *tense* は上述の如き意味に用ふるものである故、自然之れに *if* とか *suppose* といふ假定の意の接續詞若くは *wish* が伴ふ。又た之に伴ふ *clause* がある場合には、其の *clause* は勿論また事実と相違した結論を表はすことになる故(何となれば假想様過去の場合に述べて置いた通り、假定の事を基礎として立てた議論や斷案はま

た空想であつて實に背いて居る筈である故)、自然 *would, should, might, could* といふ助動詞を含む譯である。

272. 假想様過去完了の *Progressive Form*.——假想様の過去完了にも進行體がある。其れは過去の或る一定時に進行中の事實に反對し或は相違した事を假想するに用ひる。

If it had been raining then, we could not have got to the summit. (あの時に雨が降つて居なかつたら吾々は絶巔へ行きつゝくことが出来なかつたのだらう)

Had he been swimming when the tidal wave came, he would of course have been swallowed up by it. (海嘯が來た時にあの人が泳いで居たら無論波に呑まれて了たのだらう)。此の *had been raining* は事實に反對、*had been swimming* は事實に相違の事を想定した言葉である。

#### (6) 未來完了 (Future Perfect Tense)

273. 假想様未來完了の意義用法——假想様の未來完了 (*subjunctive future perfect*) は未來の一定時まで完了するや否やに就き疑を表はす。

If you should have finished it by Monday, you shall have an extra pay. (お前方月曜日までにあれを仕上げて呉れて居たら並の給金の外に手當をやる) (*you shall have* は *I will give* と同義である)

これは暗に月曜までに竣功するといふ事が甚だ疑はしいが、併し夫れが行はれば賞をやるといふのでてる。此の *tense* は斯くの如き使ひ方をするのである故、必ず未來の一定時を直接又は間接に示して置かなければならん。上の例で云へば *by Monday* (月曜日まで) が即ち夫れである。

If he should have returned this evening, I would tell him so. (今晚家に歸つて居れば僕はあれにさう言て置きます) 此の *should have returned* は今夕若くは今夕までに歸宅といふ事

が完了するといふ事を怪み疑ひながらも假想したのである。序てに  
言て置くが、此の should have returned の意味を普通の假想様の  
未來で表はすことが必要ならば下の如く言ふのである。

If he should be back this evening, —

その上の例の文も普通の假想様の未來に書き改められる。

If you should have it finished before or on Monday, —

その理由は下の如き對比を考へると自ら氷解する。

He will have returned on Monday=he will be back on  
Monday.

I shall have finished it by Monday=I shall have it finished  
before or on Monday.

I have taken cold (僕は感冒を引いた)=I have a cold (僕  
は感冒を引いて居る)

He has come or gone=he is come or gone.

He has bought it=he has it.

274. 假想様未來完了の形體——假想様の未來完了の形體は悉  
く should have といふ助動詞に過去分詞を添へたものである。

Verb-root, mend.

單數及び複數

單數及び複數

- 1. I (we) should have mended.
- 2. You should have mended.
- 3. 

}	He
	She
	It
	They

 should have mended.

受働體は之れに been を添へるのみである。

Verb-root, offer.

單數及び複數

- 1. I (we) should have been offered.
- 2. You should have been offered.
- 3. 

}	He
	She
	It
	They

 should have been offered.

假想様未來及び未來完了を condition 即ち條件の clause に使ふ時  
は、其の consequent 即ち結論の clause に於て命令様の動詞を用ひ  
ても、或は可能様の動詞を使つても、又は shall, will 等の叙實様を  
使用して、其の意義次第で隨意である。又た此の shall, will の代り  
に should, would を使ふことも差支へない。

If you should happen to see him, please ask him his address.  
(萬一あの人にも逢ひになる様な事があつたら宿所を聞いて置  
いて下さい)

Should you find him at home, you may bring him with you.  
(萬一あの人在家に居たら君一緒に引張て來ても宜しいよ)

I 

}	will
	would

 not go should it rain or snow. (萬一雨か雪が降  
たら僕は行かない)

Should they have completed it by noon, they 

}	shall
	should

 be  
dismissed two hours earlier than usual. (萬一正午までにあれ  
を爲て了たら何時もより二時間早く暇をやつて歸宅させる)

假想様に関する附説

275. 假想様と叙實様——假想様には多く接續詞 if が伴て居  
る、是れ if の意義が自然假想様の精神と一致して居るからである。  
然かも if といふ詞は決して假想様動詞に伴ふ特徴だとは視做され  
ない。換言すれば叙實様にも意義によっては if が随伴する。殊に兩  
方ともに過去の場合で同じく if を伴て居ることがある。斯かる場  
合に二つの様子が判別し兼ね、隨て其の意味を誤解する様なことが出  
來る。然かも其の文及び前後に目を配て熟考すると大抵疑が氷釋す  
る。下に擧ぐる例の如きは我邦の初學者の往々誤解する所であつ  
て、讀書人の注意すべき點である。

叙實様

假想様

If he was to come at all, he would arrive in an hour or so. If he were to come, he would arrive in the afternoon. (彼は來



(彼が兎に角来るのならば一時間 ないに定まって居るが假りに來  
位で來着するのであった) るとすれば午後に着くのだらう)  
此の二文の中の前者は叙實際である故其の人の來るべきことを豫期  
して居る過去の話であるが、後者は假想様の過去だ故來ることを全  
然否定しながら之をありと假定したる現在の假想である。

叙 實 様	假 想 様
If he had such a rare turn for art, he had not yet shown it.	If he had such a rare turn for arts, he would have shown it by this time.
(彼はそんな美術上の奇才を有て居たにしろこの時までにはまだその奇才を示さなかつた)	(彼がそんな美術の奇才を有しては居ない、假りに有るとすれば今までに夫れを示したてあらう)

此の二例を比較すると、前者は其の人に奇才のあることを少しも疑はずして唯だ當時まで未だ其の才の實現しなかつたといふ事實を言明したのに止まり、後者其の人にさる天才のないことを断定して然かも一方にあるならばと假想するのである。又た前者の述べるのは事全く過去に屬し、後者のは事現在に關はるといふ相異がある。

叙 實 様	假 想 様
If he left Kyōto this morning, he will arrive at Shimbashi in the evening. (今朝京都を立たのだが、さすれば新橋へは晩に着くことになる)	If he had left Kyōto this morning, he would have arrived at Shimbashi by this time. (假りに京都を今朝立たとすれば、今時分までに新橋に着いたのだが、今朝は立たなかつた故、隨て未だ着かない)

左は今朝の京都出發を事實と見て今夕の新橋着を断定し其の間に少しも疑や假想を挿まない言ひ方であるが、右は全然京都出發を事實でないと斷じた上で純然たる空想を廻らしたのである。たゞ此の二文はともに過去(即ち今朝)の事を説くの一事に於て似寄て居る。

叙 實 様	假 想 様
If he had finished it before he received our letter, we must be contented with it. (彼が我々の手紙を受取らない前にあれを仕上げて居たとすれば吾々は夫れで満足して置かなければならん)	If he had finished it before he received our letter, I fear, it would not satisfy you. (彼が吾々の手紙を受取らない前にあれを仕上げては居ないが、今假りにさうでないとしたらその品は君のお氣に入らないだらう)

左は手紙を受取る前に夫れを仕上げて了た事を事實として、右は之れを假想として其の出來榮へを説いたものである。

以上の四對の例文に就いて叙實と假想の鑑別をするには如何なる點に着目したら可いかといふと、第一の二例に就ては was (これは叙實際の過去體である) と were (これは假想様の過去體である) の相違だけで足るが、尙ほ前後の文意によって右の方は現在の事、左の方は過去の事を語るものなることが分る筈だから、左までに識別に困難がない。第二の二例は如何といふに、是れは左右とも if の附いて居る clause の動詞が had であるから一寸見分け難いが、consequent の方に於て一方は had not shown といふ叙實際の動詞が使てあり、一方には would have shown といふ可能様又は假想様の動詞が使てある點から見て、前者は事實後者は假想だけを表はし居ることが判明する故、是れも丸て分らぬことはない。此の判別法は第三の二例にも又た第四の二例にも當てはまる。何となれば左の方の例の動詞が would arrive 及び should be contented となつて居ない故である。

之れを要するに if に附隨て居る動詞が假想様過去である場合には、その後隨ふ動詞が結論或は結果を表はす限りは should, would, might, could が之に附加されて居るのである故、これの無い場合は大概前の動詞が假想様でないといふ可い位である。

276. 過去の叙事に挿用せられた假想様——過去の記事の sentence の一部たる clause に假想様の過去を使ふか假想様の過去完了

を使ふべきかは一疑問である。單に之を理屈一片で推すと、過去の事に關する假想は過去完了を以て之を表はす規則である故、之れを用ひて、

He caught and pitched two of them into the river as if they had been two pebbles. (彼は其の中の二人を二つの礫でもある様に無造作に擲んで河中へ投込んだ)

といふのが當然である。然るに實際は斯かる場合に唯だの過去を用ひても可いのであって其の實例が少くない。

She sat huddled up in a corner as if she were turned into stone. (彼は化石でもした様に片隅に小さくなって腰をかけた)

He lay as stiff and calm as if they were cut out from wood. (彼は木で彫刻した様に固く且つ穩かに臥して居た)

勿論此の過去を過去完了にしても可いのである。Ifの後の should (假想様未來)をかくの如く用ふる時にも、此の動詞と consequent の方の動詞に變異がない。

I knew that he would not hesitate to do it if he should find it necessary. (もし必要と見れば夫れを斷行するだらうといふ事を知て居ました)

He said he would come help me if anything material should happen. (何か重大な事が持上たら来て手傳ふと云た)

**277. 假想様動詞の省略**——假想様の動詞は屢ば省略せられる。時には接續詞の if も其の他の附屬語句も悉く省略せられることがある。

You can get rid of it by this means as if (it were done) by magic. (此の方法ですると宛かも魔法でする様に夫を除くことが出来ます)。

He is working at it as if (he were doing it) for life. (彼は自分の命にもかゝる様に一生懸命にそれをして居る)

I should be happy to go with you. (君と一緒に居るならば嬉しい)(行けるならばと云ふ意は to go のみで現はれて居る。

ツマリ if——が to go の二字に約略せられたのである)

He is honest and trustworthy, or (=if he were not honest and trustworthy) I would not have engaged him. (あの男は正直で信用が出来る、左もなければ私は彼を雇ひはしなかったのだ)(こゝでは if から trustworthy まで略されて其の代りに or が使つてある)

One glance would have been enough for you to see it. (夫れを知るには君が一目チラと見れば足りただらう)(これは if you had taken one glance, it would have been と同じ意味である)

此の如く condition たる clause が簡約せられ或は省略せられ居る時には如何にして之れを見分けることが出来るかといふに、夫れは consequent なる clause の動詞の様と時で分る、即ち此の clause の中に彼の should, would, could, might が含まれて居る場合には大抵假想の動詞が何處かに省かれて居るのである。上の例の三四五に就いて看よ、should, would が含まれて居るではないか。

**278. 假想様の過去、過去完了、及び未來には之れに伴ふべき if のみを省くことが出来る、而して此の場合には主辭は文の頭にあらずして助動詞の次ぎに置かれる。**

He who worships God for fear will worship the devil should he appear. (神が怖ろしくて禮拜をする人は若し惡魔が出て來やうものならば惡魔を禮拜します)(Should の前に if を略して主辭 he が助動詞 should の下に置かれて居る)

Had I known that, I would not have helped him. (僕が夫れを知て居たら僕は彼れを助けなかったのだ)(此の had I も if I had known that と同じ意味である)

Were it not for your help, I should not succeed in it. (君の助のお蔭を蒙らなければ僕はあれに成功しないだらう)

## 五、可能様 (Potential Mood).

279. 定義.—可能様 (*potential mood*) は可能、能力、必要、義務、推定を表はす動詞の様である。

この故に可能様は叙實様の如く事實その物を表はさない。はた假想様の如く假定を表はすものでない。例へば昨日何處へ行たといふのは叙實様、昨日何處其處へ行けばよかつたといふのは假想様、[事實は兎も角も] 昨日行くことが出来た、行かうと思へば行けるのであつた、只今行くことが出来る、某は行きさうである、行かなくてはならん、行くのが至當だ、行たかも知れない、行ても宜しいなどいふのは可能様の領分である。

前にも述べた如く或文法家は可能様を以て一の特別の様と見ないて、之れを二分し、假想の結果結論を表はすものを假想様に、その他を叙實様に屬して置くが、是れも一理のある分類法である。

280. 可能様の特徵.—可能様に下の諸助動詞を使用する。是れが此の様の特徵である。

can	might	ought (to)	dare
may	should	must	
could	would	need	

281. 可能様と時.—可能様には下の如き四の *tense* がある。

- 一、 *Present tense*. (現在)
- 二、 *Present perfect tense*. (現在完了)
- 三、 *Past tense*. (過去)
- 四、 *Past perfect tense*. (過去完了)

この各 *tense* の意義用法を序を追て講じやう。

### (I) 現在 (Present Tense)

282. 可能様現在.—可能様の現在 (*potential present*) は助動詞 *can, may, must, ought (to), need, dare* 合せて六詞の中の一を具へて各特殊の意義を表はす。

### A. May.

283. May の意義用法.—May は下述の意義に使ふ。

#### (一) 可能。

A very learned man may be wanting in experience of the world. (大學者でも浮世の經驗に闕けて居ることもある)

It is possible that he may have that object in view. (あの人がそれを目的として居るといふことは無いとは謂へない)

That report may be true. (その評判は本統かも知れぬ)

What may be your name? (君は名を何といひますか)

可能の意味の *may* は餘程 *can* に近寄て居るのみならず、時には全然同じになつて孰れを使つても可いことがある。例へば

The tomb-stone may be seen in Kodaiji churchyard. (その墓標は今も高臺寺の墓地へ行くと見られる)

○ *may* の如きは邦人が往々 *can* と誤る位に近寄て居る。更らに

Fight as they may (can), final victory will decidedly be ours. (どんな戦だつて最後の勝は此方のものに定まつて居る)

○ *may* の如きは實際 *can* とかへることが出来る。

A man may be known by the company he keeps. (人といふものは其の交はる友によつて人物が分る)

此の *may* は *can* よりも適して居るが、*can* と書いても誤りとは決して謂へない。

*May not* は何々でないかも知れぬといふ義であつて *can not* とは違ふ (*can* の部参照)。

He may not be at home. (彼は宅に居ないかも知れない)

She may not be so old. (あの女はそんな齡ではないかも知れぬ)

#### (二) 不明確 (現在及び未來の事につき)。

I will be true to the great cause though the others may abandon it. (自分は大義を守る決心だ他の者が夫れを抛棄することがあつても)

Let him come whenever it may be convenient to him. (何時でも本人に都合のよい時に寄越して下さい)

We will not hold responsible for the consequences, be what they may. (其の報ひがどんな困難損失になるか不明確だが、何れにしても私どもは夫れに對して責を負ひません)

It shall be done, come what may. (どんな事が起て來るかも知れぬが、それには頓着なく夫れをやっつける)

It can't be done in so short a time, no matter how hard you may work. (如何に精を出しても其様な短時日に夫れが出来ることはない)

Study as he may, he will find it a hard nut to crack. (如何に勉強してあれは難問題だと感ずるだらう)

この意味の may は上の例に就いても分る通り、whatever, whichever, whenever 等の如き ever の附いた接續語、no matter (—は拘らず、—と雖も) といふ意義の as 及び what を伴ふ clause は必ず隨伴して所謂 concessive clause を形成する。

### (三) 許諾、認可。

You may go. (もう行て宜しい)  
Tell them that they may use this whenever they want it. (要る時には之れを使ってよいとあの人達にさう云て置け)

May I ask you if there is a man of this name living in this neighbourhood? (此の邊にそんな名の人住んで居ますまいか伺ひます)

He may be said to approach the summit of his being. (あの人には生涯の最上頂に近づいたと謂ふも可いのである)

This rule of architecture may safely be applied to poetry. (此の建築術上の規則は詩歌にあてはめても心配はない、安心して適用してよい)

These may be shortly considered (これ等の事は少しく考究しても無用の業でない)

He may well be proud of his late success. (彼は近頃の成功に就き心に誇ても不當ではない、當然誇てよい)

He is not a little elated, and will be may (be elated). (彼は少からぬ得意で居るが又た得意で居るのも尤もな事だ)

(四) 目的 (that, so that, in order that の下に使ふ)。

Go upstairs that you may have a better view of it. (もっとよく見えるから二階へお上りなさい)

I will read Kant so that I may understand this perfectly. (これを充分に悟る爲めにカントの哲學書を讀みませう)

You must leave to-morrow so that you may overtake him at Bakan. (馬關であの人に追付く爲めには明日立たなくてはならん)

All this he must do in order that he may (=in order to) keep the field, and win battles. (こんな種々雑多な仕事をしなければならん、對戦し且つその軍に勝たうといふには) 積極的の目的を表はすには接續詞 that の代りに lest, may の代りに should を使ふのである。

Write it down lest you should forget it. (あれを忘れない様に書きつけて置け) (—しない様に、—しない爲めといふのは否定の目的即ち消極的の目的である。—する様、—する爲めといふのは積極的の目的である)

### (五) 祈願、願望、呪咀。

I sincerely hope that he may attain his object. (僕は切にあの人が目的を達することを望んで居る)

His prayer is that his sons may all act their respective parts like a samurai. (氏の祈る所はその數人の子が皆な各自の職分を武士らしく盡して呉れよといふに在る)

My wish is that you may show yourself as the son of a samurai. (お前が士の子らしくして見して呉れる様にといふのが吾が身の願ひだよ)

May curses of all Gods be on thee! (八百萬の神の呪ひが爾の頭上に落ちよ)

May every success attend you! (あらゆる成功が君に伴はんことを祈る、十分の成功を収め給へ)

May the blessings of Hachiman be on him all through this war! (此の軍の間彼の身の上に弓矢八幡の加護あれかし)

此の意味の may は上の例でも分る如く、hope, pray といふ動詞 prayer, wish といふ名詞に伴ふか、左もなければ其の clause の頭に置かれるのが規則である、又た may が clause の頭に在る時には其の終りに至て! を打つことになつて居る。尙又た此の頭の may は之を取り去ることも出来る。取り去れば動詞が一變して假想様の現在になるが(第二七四頁参照)その意味には少しの變異もない。概して言へば比較的短い祈願の言には may を使はない。即ち God be with you! (神が君の身に添ひ給はんことを祈る、君の身に幸あれ) Luck go with you! (幸福の君に伴はんことを祈る) God bless you! (御機嫌よう、左様なら、あさらばさらば) の如き簡短な祈り言に may のあるのは先づない。

### B. Can.

284. Can の意義用法——Can は下述の意義に使ふ。

#### (一) 能力、力量。

I think I can do it. (それは出来るだらうと思ひます)

Can you row? (君はボートが漕げるか)

That I can't say for certain. (それは私シカと申し兼ねます)

You must do it as best you can. (出来る丈旨くやらなくちゃ可けない)

All present cannot help shedding tears of sympathy at this word. (其の席に居合せた人々は皆なも此の一言に貫ひ泣きをせざるを得なかつた)

此の can の意味は大分 may の其れに近づいて居るが、然かも決

して混同してはならぬ。但し目下の者或は極めて懇意な人には談話に may の意を can で表はすことがある。

"That will do; you can go," said the Emperor, abruptly.—Doyle. (それでよい、もう行て宜しいと皇帝は出し抜けに仰せられた)

依頼の意を表はす will you please (或は kindly) の代りに can you please (或は kindly) を使ふことがある。

Can you kindly let me have a look at it? (それを一寸拜見することは叶ひますまいか)

#### (二) 可能 (但し否定及び疑問に限る)

It can not be he. (それをする人は彼である筈がない)(否定)

They can be neither English nor French. (あれは英文でも佛文でもある譯がない)(否定)

Can it be a fire? (あれは火事だらうか)(疑問)

此の疑問の can には必ず怪み疑ふ意が含まれて居る。故に can it be a fire? は

Is it a fire? (あれは火事ですか)

といふ單純な問とは違て、「あれは火事でない様に思はれるが果してさうか知ら」といふ意が仄かに現はれて居る。尙ほ

What can you mean? (あなたは妙な事を有仰るが夫れはどういふな積りなのですか)

What can it be? (あれは何てせう不思議ですね)

等が矢張り怪訝の意を含んで居る。

此の意義の can はまた附屬の clause (主の文に對する従の文即ち subordinate clause 又た dependent clause) に用ひられるが、此の場合には打消してなくても可いのである。

This is one of the greatest curses that can befall any country. (これはどんな國でも被りさうな災禍の最大なるもの一である)

He is no doubt as good a servant as heart can wish. (あ

れは人の心を以て望み得べき限りの即ち無上最良の召使たること疑ひない)

This is the best servant we can possibly have. (これは吾々の雇ひ得る限りの最上の女中だ)

疑問の *clause* にも可能の意を *may* でなく *can* で表はす。

Just consider how easily a girl so pretty as you can be the cause of a man's death. (お前の様な美しい娘は如何に男が命を失ふ種になり易いかといふことをチョット考へて呉れ)

此の *how easily* 以下は疑問の *clause* である(全文は勿論命令の *sentence* であるけれども)。故に *may* を用ひずして *can* を使たのである。

I want to know what can be the cause of all this. (これは一體何の原因から起たものか知りたいものだ)

### C. Must.

285. *Must* の意義用法——*Must* は下述の如き意義を表はす。

#### (一) 必要。

It must be done at once. (それは早速しなくてはならぬ)

You must begin as soon as possible. (君は可成早く着手しなくてはならぬ)

One that will have the kernel must crack the shell. (果の中實を得ようと思ふ者は其の殻皮を破らなければならぬ)

#### (二) 命令及び禁制。

You must leave here—the sooner the better. (お前は此處を立退いて呉れなくてはならぬ、早ければ早い程よい)

You must be tidy hereafter. (お前は今後きまりを附けなくては可けない)

You must not touch it. (あれに觸ることは相成らん)(禁制)

Tell them that they must not look in at the window. (彼等に窓から覗いては可けないと云へ)(禁制)

#### (三) 避くべからざる運命。

Such a hollow show must sooner or later come to an end.

(そんな表面ばかりの見えは早晚ダメになるに定まって居る)

She cannot realize the change we must undergo.—Irving. (彼は吾々人間は必ず受くべき轉變を實覺することが出来ないのだ)

#### (四) 推定。

They must have a hard time of it. (あの人は難義をして居ることだらう)

He must be on his way to this country now. (今頃は最早我國へ來る途中に居るのだらう)

#### 一. *Must* は過去の記事にも必要の義に用ひることが出来る。

At last the time came when we must leave. (愈よ出發しなければならぬ時節が來た)

He was now an orphan with none to care about him. He must earn his bread somehow or other. But what could he do? (彼は自己を顧る者が一人もない孤兒となった。今はどうかして自分のパンを稼がねばならなかつた。然し彼は何を爲し得たか)

然しながらこの意義に使ふのは従の文 (*dependent clause*) の中か或は過去の未來の事を叙する場合に限るのである。

#### 二. *Must needs* の *needs* は副詞であつて *must* の意味を強める位の効力しかない。

Such a man must needs be on the brink of moral bankruptcy. (その様な人物は必然道德的破産の際に立て居るのである)

To have character one must needs be disciplined and devoted to duty. (人格を具へて居るといふには其の人は必ず人物鍛錬があつて且つ義務に忠實でなくてはならぬ)

#### 三. 必要を表はす *must* の反對の詞は *need not* である。推定の

must の反對の詞は can not である、禁制の must not の反對の詞は may である、

"Must I go?" "No, you need not." (「私は行く必要がありますか」、「いや行くに及ばない」)

He must be ill, but he cannot be so ill as you fancy. (あの人は病気で居るに違ひないが君の想て居る様に甚だしく悪い筈がない)

You may enter the study, but you must not touch the books and papers. (書齋に入つても宜しいが本や書類原稿に觸ては可けない)

四. Must は必要、命令、禁制を表はし、should は義理と義務を表はす。

You must not cry. (泣くぢゃない) (禁制)

A boy should not cry. (男の子は泣くのぢゃない) (義務)

You must go. (お前行かなくてはならん)

It is proper that you should go. (お前の行くのは當然の務めだ)

然しながら義務は必要を生み、また命令禁制を作り出すものである故、此の二助動詞は相互に相通ずる場合も生ずる。然かも概して言へば此の二詞は前述の區別の外に尙ほ下の區別がある。Must は格段な一人或は數人に向て其の爲すべきことを語るに用ひ、should は漠然或る社會或る種類の人若しくは世人一般に對して規則を示すに使ふ。例へば

You must learn these rules by heart. (お前達は此の規則を諳記しなくてはならん) (或る一人或は數人に向ての命令)

Young men should have it by heart. (青年はそれを諳じて居なければならん) (青年といふ社會の人全體に對する訓戒)

You must take better care of your little brother. (お前小い弟をモット氣をつけてやらなくてはならん)

One should take care of one's own health. (人は各自己の

健康に氣をつけなければならん)

#### D. Ought (to).

286. Ought の意義用法——Ought (to) は (一) 當然爲すべき所を表はし、また (二) 推定の must と同義を表はす。

You ought to know it. (お前は夫れを知て居るべきが當然だ)

He ought to help his brother. (あの人は兄を助くべきだ)

It ought to be ready. (夫れは最早出來て居る譯だ) (推定)

#### E. Need.

287. Need の意義用法——Need は (助動詞としては) 必ず否定に用ひられ、隨て否定語を伴ふ。其の意義は「——するに及ばない」といふのである。

You need not bother yourself about it. (君はその事で心配をするに及ばない)

It need hardly be added that he flatly refused to surrender. (彼がキツバリと降參を拒んだといふ事は茲に附け加へて言ふまでもない)

Need は上の例に見ゆる如く他の助動詞同様に to を伴はず、また人稱や數の如何によつて其の形を改めない。然し夫れは助動詞として用ひる時の事であつて、主動詞としては第三人稱單數の時に needs となり、過去に使ふ時は -ed もつき、必要に應じて助動詞をも伴ふ

I don't need it for the present. (私は當分要りません)

He told me that he needed the book. (彼はその本が要ると僕に云た)

Then I shall need the book. (その時には僕が本を要することになる)

#### F. Dare.

288. Dare の意義用法——Dare は「敢てする」といふ義に用ひる。

I dare say you are hungry after such hard work. (あなたは其様に大勉強をなすってお腹が空て居らっしゃいませう)

Dare you do it? (貴様夫れが出来るか、敢てやり得るか)

Touch it if you dare. (觸れるなら觸れて見ろ)

Dare も need の如く主動詞に使ふことが出来る。その時は普通の他動詞である。又た斯くの如く使用する時は *infinitive* を附加することが出来る。

He will not dare to see you. (彼は君に面會することを恐れて爲し得ない)

Did they dare you to fight? (彼等は君に戦を挑んで来たか)

289. 未來の能力必要——可能様現在の諸助動詞の中當然未來の事に使ふことの出来るのは may ばかりである。その外に need と dare は主動詞としては適當の助動詞を添へさへすれば未來の事を言ふにも使へる。若し未來の能力或は必要を叙することが必要ならば、能力の方には shall (或は will) be able to を使ひ、必要の方には shall (或は will) have to を使ふ (need not の未來は shall 或は will not have to である)。

I shall be able to go to Yokohama to-morrow. (明日は横浜へ行かれる)

I think you will be able to complete it to-morrow. (君は明日夫れを仕上げる事が出来るだらう)

We shall then have to accede to his request. (その時には吾々は彼の望に應じてやらなければならぬ)

They will not have to do it then. (その時には彼等は夫れをするに及ばなくなる)

但し此れ等の例に於ける shall will, の用法は叙實様未來の規則によるのである。ツマリ shall (或は will) be able to も shall (或は will) have to も可能様ではなく、叙實様である。

## (2) 過去 (Past Tense)

290. 可能様過去——可能様の過去 (*potential past* subjunctive past) は過去の能力、可能、許可、及び假想より生ずる假定的結論を表はす。

此の *tense* に使ふ助動詞は might, could, would, should, dared の五つである。今其の意義用法を各詞につき述べやう。

### A. Might.

291. Might の意義用法——Might はもと may の過去である是れには下の如き種々雑多な用法がある。

(一) 過去の可能 (可能の may の過去)。

The clock struck ten. The messenger had not arrived yet; still, he might come by midnight. (時計が十時を打た、使者は未だ來ない、然かも夜中までは來さうであった)

He said that the messenger might arrive before midnight. (彼は夜中までには着かないに限らないと云た)

I thought it possible that he might recover in a month. (自分は彼が一月経てば病氣が治るといふことが望があると思た)

この might はツマリ過去の一定時より見て可能だといふ意味に用ひてある、故に上の例の中第二の said 第三の thought が現在の says 及び thinks に變ると、其の下の might も之に伴て may に變らなければならぬ。

(二) 過去の不明確 (不明確の may の過去)

He said that I should fail, however hard I might try. (どんなに努力しても僕が志を達しないと彼が云た)

He would do it, come what might. (彼はどんな事が起らうとも夫れを是非しやうと思て居た)

I was free to take any step that circumstances might require. (事情の必要に應じてどんな方針でも勝手に取る自由を有て居た)

(三) 過去の許可是認 (許可の may の過去)。



He said that I might go. (彼は私にもう行って宜しと云た)  
(許可)

He was proud of his success, and well he might (be proud of his success). (彼は自己の成功を中心に得意として居た而して得意としても可かったのである) (是認)

I said that I would go if I might. (自分が行っても宜しければ行く積りだと答へました)

(四) 過去の祈願希望 (祈念願望の may の過去)。

His prayer (或は wish) was that his son might carry himself like a man at the front. (彼の祈念する所は其の子が戦場に於て男らしき武者振りをして呉れといふのであった)

There was every hope that he might recover (彼が病氣が回復するだらうといふ望が充分あった)

(五) 過去の目的 (目的の may の過去。但し that, so that in order that の後に用ひる)。

Every day he began his work at five  $\left\{ \begin{array}{l} \text{that} \\ \text{so that} \end{array} \right\}$  he might finish it by two. (彼は毎日二時までに仕事を終ることの出来る様に五時に仕事を始めた)

It was necessary that Japan should have a larger navy in order that she might take up the gauntlet at any time. (日本がいつ何時でも其の挑に應じて開戦するにはもっと強大な海軍を有て居るといふことが必要であった)

(六) (假想若くは假想より生ずる假定的結論に於て) 可能、不  
明確、許可、是認。 (但し是れは現在若くは未來の事に關はる)

I should go if I might. (行くことを許される、即ち行っても可いのならば僕は行きます) (此の might は純然たる假定であつて實は許されないのである)

If he had recovered, he might come. (あの人は病氣がもう治たのならば或は来るかも知れないけれども、病氣がまだ治らないのが事實だ)

He might go if he should get a man to act for him. (誰か代理をする者が得られるなら行っても宜しいが) (許可)

He might as well engage an ex-convict. (あんな者を備ふ位ならば懲役を済まして監獄から出て來た奴を雇てもよいのだけれども) (是認)

You might as well be a slave (as be taken into his employ. (あの人に雇用されるなら奴隸になつてもよい筈だが) (是認)

邦語で「—しても可さうなものだ」といふ處に英語で might を使つて同意義を表はすのも畢竟此の might の一種に外ならぬのである。即ち「—する心があるならば—することは不可能でないだらう」といふ意味からさうなるのであつて、ツマリ假想を基礎とした結論に相違ない。

He might come to see me once in a while when he comes up to Tōkyō so often. (さう屢ば上京する以上はたまには僕の家に来てよさうなものだ)

One would think he might write to you at least once in a year. (少くも年に一回は君の處へ手紙を寄越しても可さうなものと誰れしも思ふだらう)

これ等の might は何れも假想を基礎として立てた議論である故、隨て皆な事實ではなく、假定或は空想である。第二例の might も來ないことを知りつゝ起した考であり、第三例の might も六づかしげな條件つきの許可を表はし、第四第五のものも暗に或る一事を想像して之れを取るとすればと假定を置いての意見である。之を要するに此の might は何か條件をつけて下した論斷であつて、決して單純な意見ではない。若し單純な意見ならば may で可い譯である。

(七) 現在の可能認許 (may の意を鄭重に或は遠慮勝ちに表はす)。

Might I ask you to give me his address? (あの方の宿所を有仰て頂けますまいか) (May を使つても可いことは現在の許可を表はす may の部に於て例示して置いた通りである、唯だ might はあれよりも一層鄭重に下手に出る言ひ方である)

It might seem strange to you. (あれはあなた方に或は變なことに思はれるかも知れません) (かゝる場合に may を使つてさ)

へ「だらう」とか「かも知れぬ」とか明確ならざる言明であるが、might を使ふと更らに曖昧模稜になるのである)

### B. Could.

292. Could の意義用法——Could は can の過去であるが、是れも單に過去といふ許りでなく下述の如き種々雑多な用法がある。

(一) 過去の能力 (能力を表はす can の過去)。

I could do it in my twenties. (僕も二十代にはそれが出来た)

He said he could not go on account of the pressure of business affairs. (彼は用務が多端な爲め行かれないと云た)

Work as he could, he found it impossible to keep the wolf from the door. (どんなに稼いでも家族の飢餓を防ぐことが出来なくなったである)。

この第二例の如きは said を says とすれば could も同じく現在になって can と變る譯である。第三例も found を finds とすると could が can に變らなければならん。

(二) 過去の可能 (但し否定と疑問と従の文に限る、是れは可能の can の過去)

They said it could not be he. (人々はそれを爲たのは彼である筈がない、それは不可能だと云た)

Could it be he—a man of sixty? (そんな事をしたのはあの人でせうか、あの六十歳の老人でせうか) (驚異疑訝の意)

I thought him as competent a teacher as heart could wish. (彼は望める限りの最上の力量ある立派な先生だと私は思ひました)

(三) 假想の能力 (現在の事に關はる)。

I would do it if I could. (若し自分の力で出来ることならばやる積りなんだけれども、出来ない故何とも致し方がない)

I wish I could comply with his wishes. (あの方の御希望に添ふことが出来ることを願ふのですけれども、出来ればよいの

ですけれども、奈何せん夫れが出来かねます)

第一の例は自力に就き純然たる假定を下したのであって、事實上では左る能力の無い事を示して居る。第二例のも假りになし得るものと想定して夫れを希望するといふのである。此の could は假想様の過去と全然同じである、之れを假想様に變へやうとならば were able to とするのである。

(四) 假想の空想的結論 (即ち假想を基礎として下した論斷であつて隨て又た空想たるに過ぎないのである) に現れた能力 (但し現在の事に關はる)。

He could do it if he would. (やる氣さへ有れば出来るのだけれども、やる氣がない故駄目だ)

How could I control them otherwise? (あゝしなくて何うして彼等を統御することが出来ますか)

I could be happy with her. (彼と一緒に居るならば面白く暮らせるが、彼と別れては何で幸福に暮らせやう)

第一例に就ては if I would が假想であつて he could do it は之れに據て下した論斷である、故に主の文も従の文も共に空想たるに過ぎない。第二では otherwise が假想を表はして居る、既に假想が附隨して居る以上は can を使ふことは出来ない、是非 could でなくてはならん。第三例でも with her が假定を表はして居る、換言すれば if I could live with her の約略せられたものである。隨て could be happy は空想たるに過ぎない。總じて「出来ぬ」といふ否定の意を疑問で表はすには此の could を以て可能の義を示すを正しとする。

How could such slavish troops be a match for our well-trained men full of patriotic spirit? (あんな奴隸的の兵隊が何うして我が愛國心の充ちた訓練のよい兵の相手になれやうや)

Do you think I could ever accede to his unreasonable request? (君は僕が彼の不當な要求に應ずることが何うして出来ると思ふか、出来る筈がないではないか)

の could は共に不可能の意を示して居る。

Would と should の意義用法は便宜上特に別章を設けて講述することとする。

(3) 現在完了 (Present Perfect Tense)

293. 可能様現在完了——可能様の現在完了は過去の事或は完了した事實に就いて可能と推測の意を表はす。

此の tense に使ふ助動詞は現在の助動詞 may, can, must, ought (to) に have を加へたもので、何れも過去分詞に之れを附加するのである。

A. May have.

294. May have の意義用法——May have は過去或は完了の事に關して現在の推測を表はす、故に邦語の「——したかも知れない」「——したらう」といふに當る。言はゞ過去と現在とを混合した様なものである。

He may have come home last night. (あの人は昨夜帰宅したかも知れない)

They may have left for their homes. (彼等はもう郷里へ立ちたらう)

B. Can have.

295. Can have の意義用法——Can have は過去或は完了の事につき其の不可能を説き、或は可能なるや否やを問ふに使ふ。随て是れは否定か左もなくば疑問に用ひられる。

They cannot have left for their homes. (彼等はまだ故郷へ立ちた筈がない) (否定)

Can he have written it? (あの人が夫れを書いたのでせうか) (疑問)

C. Must have.

296. Must have の意義用法——Must have は過去或は完了

の事につき現在の推定を下すに使ふ。これは上の can have と正反對に然定に用ひる。

She must have got well. (あれは最早全快したらう)

I must have dropped it on my way here. (此處へ来る途中で落したのに違ひない)

D. Ought to have.

297. Ought to have の意義用法——Ought to have は (一) 過去或は完了の行爲につき義務の有無を斷じ又た (二) must have の如く現在の推定をなすに用ひる。第一の意味に使ふと

The servant ought to have rung the bell five minutes ago.

(小使が今から五分前に鐘を鳴らすべき筈であつたのだ)

You ought to have gone through it by this time. (今までに君は夫れを一通りやって置くべきであつた)

となる。又た第二の意味に使ふと、

The new book ought to have been printed yesterday. (あの新版の本は昨日印刷が出来上つた筈だ)

He ought to have repaired it. (彼はあれを修復した譯だ)

此の ought to have は推定の must have と先づ同義だが、僅かに相違する所は、must have は直接に斷定し、ought to have は推理測算を経て斷定するに在る。又た ought to have は should have と同意義で、假想様の大過去の後に來る consequent clause に使はれることがあるが、併しこれは取るべきことではない。

(4) 過去完了 (Past Perfect Tense)

298. 可能様過去完了の意義用法——可能様の過去完了は (一) 過去の事に就いての假想 (二) 過去の事に關する假想より生ずる空想的結論及び (三) 過去の一定時に於て完了した事の推測を表はす。

此の tense には might have, could have, should have, would have 等の助動詞を用ひる。下に其の意義用法を説かう。

## A. Might have.

299. Might have の意義用法——Might have は下の如き意義に使用。

(一) 過去の事に関する假想によって下した結論の中に可能の意を表はす。

You might have been proud of me if you had then seen and heard me. (君があつた時に僕の姿を見僕の説く所を聞いて呉れたら君は屹度僕を君自身の誇りとして愉快に思て呉れたかも知れない)

これは「あの時」(then) といふ故既に過去の一定時である。その過去の一定時の出来事を見聞したらといふは暗に其の實見しなかつたことを表明して居るから、つまり假想たるに過ぎない。その假想によって下した結論は you might have been proud of me である。而して此の結論の中に於て「したかも知れない」即ち might have been は可能の意を表はして居る。之を要するに此の might have は大體の意味が may have に似通て居るけれども、後者は別に假想を設けずして言ふ言葉であるし、前者は假想を條件として使用文句である。

We might have failed if it had not been for his warnings. (あの人の警戒を受けなかつたら吾々は失敗したかも知れん)

If they had relied upon his promise, they might have been disappointed. (彼等が彼の約束を頼みにして居たならばアテが外れたかも知れない)

邦語の「——しさうなものであつた」といふ動詞は此の might have に相當する。

She said she might have been consulted about it. (彼は自身にも其の事に就いて御相談がありさうなものであつたと云た)

One would think he might have come and said to us good-bye before he left. (彼は立て行く前に来て暇乞をして行きさうなものであつたと誰しも思ふだらう)

邦語の「果せるかな」も might have を以て譯することが出来る。

He marched his men out of his castle, but, as might have been expected, was defeated with a severe loss. (彼は兵を進めて城外へ撃て出たが果して大損害を被て敗軍した)

此の as might have been expected が何故「果せるかな」といふ意義になるかと云ふに、敗北するといふ事は世人の豫期する所であつたか否や不明としても、若し假りに此の時の戦闘につき何人が其の結果を豫想したとすれば、多分彼が敗れると豫期して居ただらうが、果して其の通り敗北したといふことになる故、如上の義を生ずるのである。併しながら實際誰か或る人が此の敗軍を豫期して居たといふ事を表はす場合には「果して」や「果せるかな」を as had been expected といふべきは勿論である。

(二) 過去の一定時に完了した事に関する推測に使用。(may have の過去) 例へば

He said they might have failed. (彼は彼等が失敗したかも知れぬと云た)

といふが如き場合に he said は既に過去の一定時を示して居る。その過去の一定時に失敗といふ事が完了したといふ意ならば had failed であるが、そこまで明確な事は言はずして失敗したらうとのみいふのである故、might have である。此の might have も may have と意義に於て大差ないが、may have は現在を標準として完了したかも知れぬといふのであるに反し、might have は過去の一定時を標準として完了したことを表はすのである故、時の上に差異がある。尚ほ序に言て置くが若し上の文の he said が he says であつたら might have は may have にならなければならぬ。

His answer was that the train might have been obliged to stay at Y. (彼は汽車が Y. で停留しなければならぬ様になつたのかも知れないと答へた)

## B. Could have.

300. Could have の意義用法——Could have は下述の意義

に使ふ。

(一) 過去の事に關する假想の中に能力を表はす。

You might have been proud of me if you could then have seen and heard me. (あの時に諸君が僕の演説をする所を見聞することが出来たら僕を以て誇りとして呉れたらう) といふが如き場合に could have seen and heard といふは事實あつた事てなく、純然たる假想に屬する、その假想の中に能力の意味を表はすには can を以てすることが出来ない事になって居る、必ず could have を用ひねばならん。Could have は要するに can を過去の假想にしたのである。之れを純然たる假想様にするならば had been able to となる。その意義は could have と少しも違はない。

(二) 過去の事に關する假想によって下した結論の中に能力を表はす。

If it had not been for your help, he could not have succeeded. (彼が君の助力を被らなかつたら彼は成功し得なかつたらう) 此の if it had not been for your help といふは純然たる假想(即ち假想様過去完了)である。而して其の下の文は此の假想を基礎として下した結論である。その結論の中に能力の意を表はして居るのが即ち could have である。此の如き could have は can have (可能様現在完了)と意義に於て差異がないが、甲は假想を基礎とした條件つきの意見であるけれども、乙には何も条件などが伴て居ない。それが相違の點である。然しながら此の條件は必しも何時も現はれて居るものではない、往々にして省略せられる。例へば

The boy did it better than a man could have done. (その小兒は夫れを大人が爲し得たらんよりも旨くやつてのけた) 此の could have done には條件が表面には伴て居ない、然かも夫れは全然ないのではなく、略せられて居るまでである。その條件は if he (a man) had done it である。即ち全文の意味が「大人はしなかつたけれども、若し大人がしたとなれば随分旨くなし得たらうが、それよりも此の小兒は旨くやつた」といふ意義に當るのである。

要するに此の could have は實際はなし得なかつた事を叙をするに使ふのである。

(三) 過去の一定時に完了した事につき可能の義を表はす(但し疑問か否定に限る)。

I thought that he could not have done it in so short a time. (自分は彼がそんな短時日に夫れをした筈がないと考へた) 此の could not have は can not have の過去である。元來 can not have は現在までに完了したと稱する事につき否定或は疑問を挿ひ語であるが、上の例は過去の一定時(即ち I thought といふ時)までに完了したと稱する事に就いて否定を表はすのである故、can not have を過去にして could not have にしてあるのである。故に若し I thought が I think となつて居たら could have は can have に改めなければならん。

He said she could not have returned the day before. (彼は其の前日に歸つた筈がないと云つた)

Our teacher said that a boy of ten could not have composed it. (先生は十の小兒があれを書いたといふ譯がないと有仰つた) この二例に於ける could have も前と同じ性質である。疑問の方の例を擧げるならば、

How could he have done it without a tool? (道具一つなくして如何して夫れを爲し得たか、そんな事は不可能だ) の如きものである。先きに could の部に於て述べた通り、現在に於て不可能と見る事を疑問で言ひ表はすには could を使ふのである。然るに是れは過去の事に就いて不可能と見る意を表はすのである、故に一段進んで have を伴ふことになるのである。

Who should think that a girl could have done it? (女の子が夫れを爲したらうなどは誰が思はうか) これもなしたといふ事が不可能だと誰も思ふといふのである故、上の例と同精神で could have が使用してある。

I wonder how he could have completed the work in so short

a time. (そんな短時日にあの仕事を竣成したといふことがどうしてあり得べきかと訝り疑ふ)

これは全體が疑問ではないが、how 以下が疑問の clause になって居る故、是れも矢張り前の例同様 could have を使用すべきである。

之れを要するに此の could have は事實上あった筈がないといふ意か、或はあったとしても怪訝に堪へないといふ義を表はすに必要である。

Should have, would have も should, would の部に之れを述べる。

## 六、命令様 (Imperative Mood)

301. 定義——命令様は命令請求を表はす動詞の様である。

302. 命令様の形體——命令様は動詞の根基をその儘に使用して語形には何等の變化を生じない。例へば

Go. (行け) Stand! halt! (停まれ)

Come along with me. (私と一緒に入らっしゃい)

Try again. (今一度やってみよう)

否定の命令には do not 又は don't を頭に付けるか、\* 或は never を動詞の前に配置する。

Don't speak between yourselves. (お前達互ひに話をするな)

Never speak between yourselves while in class. (授業中に決して互ひに話をするな)

303. Let を含む命令體——第一人及び第三人の行爲に關する命令請求には let を附して、其の次に第三人の名或は其の代名詞を配置し、主動詞を其の下に附けるのである。

古い英語では don't や do not を使はず、not を動詞の次に置いて否定體を作たものである。其の遺風が今でも詩歌に見えて居る。

Neglect not the gift that is in thee. (汝の身に着いて居る天稟の賜を等閑にするな、天與の才徳を利用せよ)

Tell me not in mournful numbers. (悲しい歌を以て言ふな)

Let us go at once. (吾々は今直ぐに行かうではないか)

Let him come at any time to-morrow. (明日何時でもその人を寄越して下さい)

此の形は上の例の如く普通の命令體で言ひ表はすことの出来ない場合に用ひられる。下に擧ぐる例の如きは皆な夫れてある。

Let us follow the examples they set. (彼等の示した範に從はうではないか)

Let me see. (一寸待て下さい、考へて見ませう)

Let me know by telegraph when it comes to an end. (それが済んだら電話で報知して下さい)

Let bygones be bygones. (済んだ事は済んだ事にして置かう、今になって既往の事を彼れこれ言ふことは止さう)

Let there be no more of this. (もう此んな喧嘩などは止さう)

時によっては此の體を普通の命令體と同一義に使用することが出来る。

Let the earth bring forth the living creature (地よ生物を生み出せ)=earth, bring forth the living creature.

Let your lessons be well prepared (君方課業の下調をよくして出で)=prepare your lessons well.

Let the reader suppose himself on London bridge. (讀者よ身倫敦橋上に在りと想像せよ)=readers, suppose yourself on London bridge.

Let the youth take heart and push forward. (青年よ勇を鼓して邁往直進せよ)=youth, take heart and push forward.

要するに此の形は第二人に向て直接の命令要求を爲さずして、之れを第三者に扱て間接に命令請求を言ひ表はす體である。是れは概して普通の命令體よりも優美でよいが、日々の實用には比較的遠いと謂はざるを得ない。

304. 命令様動詞の條件用——命令様の動詞を假想様現在或は叙實様現在に if の附いたのに代用することがある。其の時に否定の

意味ならば *or* を其の *clause* の下に置き、然定ならば *and* を使ふ。

**Make haste, or you will miss the last train** (=if you don't make haste 或は unless you make haste, you will miss the last train) (急いで出で左もないと終列車に乗りそこなふよ)

**Make haste, and you will be able to catch the first train.** (急いで行き給へ、さうすれば第一列車に乗ることが出来ます)

**Talk of the devil, and he will appear.** (悪魔の噂をして見給へ悪魔が出て来る)

**Let him alone, and he will soon awake to his own interest** (彼を打棄て、置き給へ程なく自分で己の利害を悟ることになりますよ)

此の體は不定條件の *clause* (*concessive clause*) にも用ひられる。其の意義は「如何に——しても」「何が——しても」などいふ事になる。但し此の場合には上の例と違て *and* や *or* を要しない

**Be that what it will** (=whatever that may be), we must exert ourselves to the utmost. (それは兎もあれ角もあれ吾々は全力を擧げて力めねばならん)

**Be that as it may** (=whatever that may be), his order shall be obeyed. (それは如何であらうとも其の命は遵奉致します)

**Work as he can** (或は *may*) (however hard he may work), he will be unable to complete it in a day. (どんなに働いてもあの人が一日に仕上げることは出来ない)

**I consent, be the consequences what they may** (=no matter what the consequences may be). (その結果がどんな迷惑或は困難な事にならうとも私は承知しました)

**Come what may** (=whatever may happen), I will never lose heart. (如何様の事が起らうとも決して失望落膽はしない)

一、**Say と Suppose**——命令様の *say* といふ詞は *presumably* 即ち「例へば——の様なもの」「一例をいふならば」といふ義に使ふ。

I have a great mind to go and study in a good foreign university, **say**, Cam-

bridge. (僕は是非外國の良い大學例へば キャンブリッジ大學へでも行って學問をして来る積りです)

Let us go together to see cherry-blossoms one of these days, **say**, next Saturday (近い内に——今度の土曜日にでも一緒に櫻の花を觀に行かうぢやないか)

命令様の *Suppose* は *if* と同じ効力があって假想様の動詞に隨伴することがある。

**Suppose** (that)(=if) you were a Chinese imperial prince, what step would you take under these circumstances? (君自身が假りに支那の皇族だとしたら君は此の形勢の下に立てどうする積りか)

二、**Let** を略した命令の *clause*.——*Clause* の頭に命令様の動詞が見えて其の下に代名詞 *it* が来て居ること *be it remembered* の如くなる時には、*let* が略せられて主動詞が *it* の前へ移されたことになるのである。

This, **be it remembered** (=let it be remembered), he did from pure love of the country. (讀者須らく記すべし、これ氏が純美なる愛國の心よりせし事なるを)

A ten-yen piece, **be it observed** (=let it be observed), is not of pure gold.

(こゝに注目し給へ十圓金貨といふものは純金で出来て居るのではない)

**Suffice it to say** (=let it suffice to say), I could not say no to him. (かく言て置けば足ること、其の上にも何も言ふ必要はないのであるが、私はあの人に對して否といふ事が出来ませんでした)

## 七、Shall と Will.

305. **Shall, will** の本義——*Shall* は本來「運命あり」といふ義で、*will* は元と「意思を有す」といふ意である。今日の英語の *shall, will* にも大分此の原意が残て居る。以下説く所に就いて考へて見るが宜しい。

306. 未來と他の意義の *shall, will*.——*Shall* と *will* は叙實様の未來に於て未來といふことの符號として使用してある。これは既に叙實様未來の部(第百十節)に於て述べて置いた。併し此の二助動詞は單に單純な未來の符號のみに用ひるのではなく、種々雑多の意を以て現在にも用ひられるのである。而して其の意義は人稱の如何によつて變化して行く。今より各人稱に就き其の意義用法を講述しやう。

## (1) 第一人稱の Shall.

307. 第一人稱の shall. — これには下述の意義用法がある。

(一) 第一人 (即ち I 或は we と稱する人) の意思より出るのではなく義務、義理、先約、命令より起て来る (第一人) の未來の行爲を表はす語に伴ふ。

I shall leave to-morrow morning so that I may get to Kōbe in the evening and have an interview with Mr. Kent. (私は明晩神戸へ着いてケント氏と會見する爲めに明朝たちます)

此の shall leave は意思の有無は兎も角も、明晩ケント氏と會見の目的を達するには明朝たゝなくては間に合はなくなる故否應なしに立つといふ義である。若し此の I と稱する人の意想一片にて斷行せられんとする行爲ならば shall は will に變じなければならぬ。

We shall stay here until Monday. (義務上月曜日まで當地に滞在します)

I think I shall accompany my father. (私は父と同行することになると存じます)

(二) 未來の必要、義務、義理、能力、感情を表はす時

I shall need it to-morrow. (明日はあれが要ります)

此の shall need は未來の必要を表はす、而して此の如き場合に必要を表はす詞即ち necessary, need の如きを第一人稱に使へば其の前に shall はを要する。

We shall then be bound to give him pecuniary help. (その時には吾々は金錢上の助力を彼に與へなくてはならぬ義理になります)

be bound は義理を表はす詞である、故に shall を要する。

I fear I shall be unable to satisfy him. (あの方の御満足を買ふことが出来なからうかと氣遣て居ます)

I shall be fit for duty in a week. (一週後には任務に服せる様になる)

I shall be delighted to accompany you. (御同行が叶へば私は満悦致します)

We shall be very happy if you will kindly lend it to us for a week. (一週間御恩貸を得たら吾々一同大喜びを致します)

此の第一二例は未來の能力を表はし、第三四例は未來の感情を表はす故、何れも shall を用ふるのである。

(三) 第一人 (I, we と稱する人) の意思を表はす。

これは第一人稱では通常 will を使用するのであるが、演説、講話、著述、論説等總て聽衆と讀者を相手にする場合には I will, we will といふを以て無禮としてある故、之れを避ける爲め shall を使ふのである。其の外の場合と雖も先方に不利不快な事を述べる必要のある時には will と言ひたい所を shall といふ。

I shall not dwell long on the question of sugar monopoly. (砂糖專賣の問題に長談義は致しません)

We shall now enter into the details of our subject. (これから吾々の論題の細目に進みます)

I must say that we shall then resort to the last means.

(私はお話し致して置かなくてはならぬが其の時には吾々は最後の手段に訴へますよ)

此の最後の一例は最後の手段に訴へるなどいふ不快な事 (第二人の爲めに) を語るのだから、徳義上 shall といふのである。

## (2) 第一人稱の will.

308. 第一人稱の will. — 是れには下述の如き意義用法がある。

(一) 第一人の意思決心を表はす、故に又た第一人のする約束同意、拒絶、撰擇、承諾等をも之れて表はす。

I will pay it on the last day of this month. (私は本月の末日に拂ふ積りです) (意思)

I have made up my mind that I will obey his order at any



cost. (自分はどんな不利があるとも其の命に従はうと決意しました) (決心)

I faithfully promise that I will return it within a month. (自分は一月以内にあれを御返却することをこゝに誠意を以て御約束致します) (約束)

We will return it to you at a moment's notice. (返却せよといふ貴下の御通知あり次第あれを早速返上致します) (同意)

No, we'll never do that. (イヤ、それはなりません) (拒絶)

I will part with it. (あれを賣りませう) (撰擇承諾)

これは別に説明を要しないであらう。

(二) 脅迫及び強い要求をも表はす。

I will make you feel the weight of my hand. (貴様に此の手の痛さを覚えさしてやるぞ、あとで見て居ろ)

We will have it paid by the 15th. (十五日までに君に夫れを拂て貰はう、是非君に渡して貰はねばならん)

(三) 建議、提案の意を表はす (但し複数に限る)。

We will run a race. (一番競走をやらう)

此の we will は提案とは云ふものゝ、實は他に異議なしと見て言ふのである故殆ど專斷的な言ひ方である。Let us run a race. (一番競走をしやうぢやないか) Shall we run a race? (一番競争をやらうか) などこそ眞の提案、相談であらう。

### (3) 第二人称の Shall.

309. 第二人称の shall. — 是れには下述の如き意義用法がある。

(一) 第一人 (即ち I, we と稱する人) の意思を表はす。

Thou shalt be obeyed (= we will obey thee). (あなたの仰には服従致します)

You shall be pardoned (= I will pardon you). (其方の罪は宥して遣はす)

此等の文の主辭は第二人称であるが、動詞の表はす働きを爲すものは第二人てなく第一人である。此の一事は決して忘れてはならん。第一人の意思を言明する語である故、隨て I (we) will と同じ意義である。故に又た I (we) will と同じく脅迫や約束を表はす譯になる。

(二) 脅迫を表はす。

You shall be expelled if you continue so idle. (お前今後引續きそんなに怠けて居ると放逐するぞ)

Utter one word against it, and you shall be put to the sword. (それに一言でも逆て見よ斬て棄てるよぞ)

(三) 約束を表はす。

Bring ~~we~~<sup>us</sup> your father, and thou shalt be pardoned. (その方の父親を連れて來い、其方を助けて遣はすから)

You shall have one when you are out of your teens. (廿歳になったら一つやる)

(四) 命令、訓戒。

You shall go to your own business. (人の世話を焼かないで自分の仕事に行け)

Thou shalt not steal. (盗むこと勿れ)

此の命令訓戒は第一人が自己の權威に恃む所あつて下すものである故、普通の命令様で表はす命令よりも大に威嚴がある。殊に訓戒の意味でいふ you shall, thou shalt は凡人の言葉でなく聖人豫言者の語である故、何處か神々しい響がする。併し此の命令は吾人常用の語ではない。

(五) 豫言に用ひる。

Thou shalt save and rule Egypt. (その方は必ず埃及を救ひ埃及に君臨する運命がある)

In a year you shall see a great prophet. (今より一歳にして汝等一大豫言者を見るべし)

此の shall はツマリ運命の義に使はれて居る。但し爰に豫言といふは神の御託宣とか、豫言者聖人の告げてあって、政府から出た天氣豫報や凡夫の推測を指すのではない。

#### (4) 第二人称の will.

310. 第二人称の will. — これは下述の意義用法がある。

(一) 第一及び第三人の意思に關係なき自然の成り行き。

You will be sorry in after years. (君は他日に至て後悔するに至る)

When you come to read something of my heart, you will not think so ill of me. (他日僕の心が多少解る様になれば僕の事を左まで悪く思はない様になる)

You will stay here until you finish your official business, I trust. (君は君の公務を了るまで當地に逗留するのだらう)

この will は言ふまでもなく純然たる未來であつて、未來といふ事の外に何等の意味もない。此の will は自然第二人が必要、義理、義務よりする事に用ひ、其の能力を表はす言に用ひ、又た其の感情を表はす言に用ひる。

You will then be obliged to consent. (その時になると君は承諾しなければならんことになる)(義理、必要)

You will have to go to Tōkyō to-morrow, I suppose. (君は明日東京へ行かなくてはならんだらう)(必要)

You will be unfit for duty for some ten more days. (まだ十日許りは務に服することだ出来ない)(能力)

I think you will be surprised to see him. (あの人に逢たら君は驚くだらう)(感情)

(二) 第二人の意思を表はす。

I shall go if you will. (君が行く意思があるなら僕も行きます)

We shall be very much obliged if you will let me know his

address. (あの人の宿所が知らせ下さる思召があるならば難有存じます)

If you will have it so, I have nothing more to say. (君が是非さうしやうといふ氣なら私は此の上申す事はありません) この will は必ずしも未來の意思ではなく現在の意思をも表はすことは上の例を考へて見ると直ちに分ることである。また上の例は皆な従の文の you will であるが、此の意味の you will は多く上例の如く従の文に現はれる。然し主の文の方に之れが全くないのではない、その時には夫れを読み又は發音する時に此の詞だけを強めて發音し、それで以て普通の will でないといふ事を示すのである。

You will, and so I think you will succeed. (君はやる意思決心がある、だから僕は君が成功すると思ふ)

(三) 禮儀を失はざる命令を表はす (邦語の「—し給へ」に當る)

You will stay a little longer and dine with us. (もう少し遊んで吾々と一緒に飯を喫べて行き給へ)

You will take it to your father. (お父上の處へ夫れを持って行て呉れ給へ)

普通の命令では餘り失禮だと思ふ時に使ふ語である。之れに please kindly を加へ又は be good (kind) enough (to), be so good as (to) を添へると頼みを表はす。

You will please post it in your way home. (お宅へお歸りにどうか夫れを郵便に出して下さい)

You will kindly tell him so. (どうぞあの人にさう言して下さい)

You will be good enough to lend me some. (少々御貸しを願ひます)

#### (5) 第三人稱の shall.

311. 第三人稱の shall. — これは下述の如き意義用法がある。

(一) 第三人の行爲に關する第一の意思を表はす。

They shall have their deserts. (彼等にはあれが相當の待遇  
或は賞罰を得させてやる)

It shall be disposed of. (あれは處分します、或は賣却しま  
す)

The house shall be repaired this year. (あの家は今年修繕  
を加へます)

かくの如く第三人稱の shall は I, we と稱する人の意思を表はすの  
であつて、決して第三人の意思や望に關係がない。然かも其の事は  
第三人に關するのである。此の點は初學者の深い注意を要する所で  
ある。既に第一人の意思を表はす故、隨て其の意思より出る約束、  
脅迫も此の語を以て表はすことが出来る。

(二) 約束脅迫(之れをするものは第一人、その關する所は第三  
人なること勿論である)

Your father shall be pardoned. (其方の父は宥して遣はす)  
此の場合に主辭の father は第三人稱であるが、これは宥される人  
であつて約束をする人は I か we である (I, we は文章の上には現  
はれ居ないけれども)。

He shall be taken with me next time. (此の次ぎには彼を  
連れて行てやる) (約束)

He shall not leave the spot on his feet. (彼を歩いて其の場  
を立去らせやしない、其の場で彼を斬り仆して了ふぞ) (脅迫)

He shall be dismissed if he disobey me again. (此の次ぎ吾  
が命を用ひなければ暇をやるぞ) (脅迫)

此の脅迫は勿論直接に第二人(即ち you といはるべき)に關するの  
ではなく、其の關係者に係るのである。若し第二人に直接の脅迫な  
らば you shall を用ひるのである。

(三) 義務を表はす但しこれは法律、規則、條約、契約などの  
文に限て使ふのである。

Any one who will establish a private school shall send in

a previous notice to the Town Office. (何人にてても私立學校を  
設立せんと欲する者は豫め市役所に其の趣を届出づべし)

When a student shall be absent for three days or more, shall  
present a written notice to the Manager. (學生三日若くは三  
日以上欠席せんとする時は届書を幹事に差出すべし)

The Imperial Government of Japan shall in such a case  
observe strict neutrality. (日本帝國政府は斯の場合に當り嚴正  
中立を守るべし)

In the case the said Mr. K. should fail to pay rent by the  
28th of the month, the said Mr. S. shall pay it in his place.  
(K. に於て毎月二十八日迄に地代不納の節は S. に於て之れを  
代納する事)

(四) 單純なる未來を表はす(これは法律、規則、契約、條約、詩歌  
等に限る)。

If a student shall be absent for more than three days, —  
(學生三日以上欠席せんとする時は—)

If the insured property shall be exposed to loss or damage  
by fire, the insured shall make — (被保險財産火災の爲め  
に燒失若くは損害の危險に陥る時は被保險人は—)

此くの如き場合には叙實様未來の部に述べた如く、叙實様現在を用  
ひるのが普通の事であるが、前記の如く法文や契約文などに限て之  
れに三人稱の shall を用ひることになって居る。決して之れを普通  
の文に適用してはならん。次ぎに詩歌には屢ば未來即ち will とい  
ふ助動詞の代りに shall が使てある。是れは will よりも shall の方  
が詩的な音を爲すからである。

The cock's shrill clarion and the echoing horn

No more shall rouse them from their lowly bed.—Gray.

(鶏の鋭い啼音も木魂に響く角笛も今は再び賤しき臥床の彼等  
の眠を覺ます如きことなし)

The sea will ebb and flow as long as earth shall last. (世

界のつく運命のあらん限り海水はさし引きする)

(五) 豫言を表はす。

Rome shall perish.—Cowper. (羅馬も行く行くは屹度滅びる)

He that sings on Friday shall weep on Sunday. (金曜日にノッキに歌などを唱て居るものは日曜日に至り泣く運命がある、樂あれば苦あり)

Then one of his sons shall be ruler of India. (その時には彼の子孫の一人が印度の君となる運命がある)

これも普通の吾々の豫言とは違て聖人、豫言者の言或は神の御託宣、神諭などに用ひられる。

(6) 第三人稱の will.

312. 第三人稱の will.—これには下述の意義用法がある。

(一) 第三人の意思より起らない(第三人の)未來の行爲を表はす言に使ふ(故に必要、義務、義理からする第三人の未來の行爲に用ひ、又た其の能力、感情、心的動作を表はす言に用ひる)。

They will be obliged to give in sooner or later. (彼等は早晚屈服せざるべからざることになる)(必要)

He will then be bound to help them. (その時には彼は彼等を助けてやるべき義理になる)(義務、義理)

The Directors will then be able to give you their answer. (その時には重役が君に御返事をする事が出来る様になる)(能力)

How much delighted his father will be to hear the news! (その報を聞いてあの人のお父さんはどんなに打喜ばれるだらう)(感情)

He will be disappointed to receive this telegram. (此の電報を受取たらあの方はガッカリするだらう)(感情)

The time will soon come when you will be sorry of it. (お

前があれを悔る時が程なく來ます)(感情)

Your father will remember Mr. K. of Toyama, who is my uncle. (富山の K. 氏とお話しになれば御父上が夫れを屹度お憶ひ出しになるでせうが、其の K. は私の叔父であります)

(心的動作)

I fear he will forget to bring it with him. (彼はあれを携帶して來るこれを忘れやしまいかと氣遣ふのです)(心的動作)

(四) 第三人の意思を表はす。

He may go if he will. (行く意があるならば行てよい)

He that will have the kernel must crack the shell. (核を得んと欲するものは其殻皮を破らねばならん)

I shall be delighted to accompany you if your father will permit me. (君の御父様が許しになる御積りならば僕は悦んで御同行します)

My father will have the best green tea. (父は是非無類上等の緑茶を欲しいと申して居ます)

Let any one join us who will. (誰でも來たい者には仲間に入れてやらう)

此くの如き will は大抵從の文に現はれて來ること上例によりて分る通りであるが、併し主の文にも決して無いことはない。殊に下の例の如く強い意思決心を表はすものは屢ば見當る。

The horse will not go on. (馬がどうしても進まうとしない)

The Police will not allow us to enter the capital. (警察が斷乎として吾々の入都を容して呉れない)

これの過去は would である。又た此の will は人や動物の如き意思のある物のみでなく、無生物にも用ひられる。その時にはその物が恰も意思のあるものゝ如く、人間の思ふまゝにならない事を強く表はすに用ひる。

The door will not open. Perhaps something is wrong with

the hinges. (戸がどうしても開かない、蝶番がどうかなって居るのだらう)

This coal is wet and will not take fire. (此の石炭はどうしても火が燃えつかない)

(五) 第三人の常習及び傾向を表はす。

They will spend hours together in talking about nonsense. (あの人たちは常に下らない事を噂して数時間をブツ通しに消費します)(習慣)

The camel will often travel for days without taking a drop of water. (駱駝といふものは一滴の水を飲まずして数日旅をすることが屢ばある)(習慣)

A burnt child will fear the fire. (一度火傷をした小兒はて火を怖がるものだ)(傾向)

He that regards not a Penny will lavish a pound. (一錢を重んじない人は兎角一圓を浪費し易いものだ)(傾向)

The noble people will be nobly ruled. (國民の高尚なるものは高尚な政治を受けるものだ)(傾向)

(六) May と同義に使ふ、現在の不明確を表はすのである。

He will be back now. (もう歸宅して居るだらう)

That will be seen from the above examples. (それは上の例から見ても解るだらう)

但しこれは may を以て表はすことが多い。

### (7) 間接引用の shall と will.

313. 間接引用の中に用ひる shall と will.—人の話た言葉を一言一句をかへず其の儘に引用するのを英語で direct quotation (直接引用)といひ、その主意だけを取り之れを吾々の言葉に書きかへて述べるのを indirect narration と云ふ。

He says, "I will go." (氏云く「僕は行かうと思ふ」と)

He says that he will go. (氏は行かうと云ひます)

此の二文の中上のは直接引用で、下のは間接引用である。直接の方は上の例に見ゆる通り其の言葉前後に“ ”を付け、間接の方は之れを要しない。其の代りに says の下に that を附ける(此の that は略しても可い場合が幾らもある。又た疑問であると if とか、whether とか、又は他の疑問語を使ふ必要がある)此の that, if などから上は引用する方の語句である故 *reporting speech* (引用語)といひ、that や if より下の部分は引用せられる語句である故 *reported speech* (被引用語)といふ。此の *direct quotation* 及び *indirect narration* の事は随分複雑である故後章に改めて詳論することにして、茲には shall と will に關連する所のみを述べる。さて前に數頁に亘て説いた shall, will の事は、引用に關係のない文或は直接引用に適用の出来るもののみである故、間接引用に關する shall や will の用法慣習等は別に論述する必要がある。以下その説明に移らう。

諸間接引用に shall, will を使用しなければならん場合には引用語 (*reporting clause*) の方の動詞(これを *reporting verb* といふ)が現在か現在完了か或は未來である。上の例に he says となって居ることを見よ。若し此の says が過去の said になったら其の次の shall や will も亦た之れに伴て過去の形即ち should, would となるのである。

次に shall, will の意義は勿論人稱の如何によって色々變化し行くものであるが、また其の前の *clause* 即ち *reporting clause* の方の主辭も shall, will の意義用法に關聯を有して居る。故に間接引用の shall, will を論ぜんとするには、前の即ち主の *clause* (換言すれば *reporting clause*) と後の即ち従の *clause* (即ち *reported speech*) と兩方の主辭を調べねばならん。而して此の點に就いて最も大切なるは下の規則である、(但し此の規則は I think I will go. といふ如き引用にあらざる文にも適用が出来る)。

規則 (一)——*Reporting clause* と *reported speech* の主辭が同一人同一物を指す時は、*shall* は單純なる未來を表はし、*will* は其の人 (主辭たる人或は物) の意思決心を表はす。故に

第一人稱 *I say I shall go.* (自分は行くことになると思ふ)

第二人稱 *You say you shall go.* (君は行くことになると思ふ)

第三人稱 *He says he shall go.* (彼は行くことになると思ふ)

の *shall* は前後の *clause* の主辭が皆な同じ人を指して居るといふ理由で何れも單純な未來を表はす。又た

第一人稱 *We say we will try.* (吾々はやってみると云ふ)

第二人稱 *You say you will try.* (君はやってみると云ふ)

第三人稱 *They say they will try.* (彼等はやってみると云ふ)

も前後兩 *clause* の主辭が何れも同一人を指して居るのだから、*will* は皆な主辭たる人の意思決心を表はして居る。

これは比較的簡単な規則であって記憶するに困難はないが、此の外の規則は少しく面倒になる (以下述べる所も *I think he will go* の如き主従兩文から成立て居て後文に *shall, will* の含まれた *sentence* に適用することゝ出来ることと知れ)。

(a) 單純なる未來、

(此の表に 1, 2, 3 とあるは第一人稱、第二人稱、第三人稱の主辭の事である)

前文	後文
(1)	(2) will
(1)	(3) will
(2)	(1) shall
(2)	(3) will
(3)	(1) shall
(3)	(2) will

此の規則によると下の文は正しい。

*I think you will recover.* (僕は君の病が治ると思ふ)

*I think they will recover.* (僕は彼等が治ると思ふ)

*You think I shall recover.* (君は僕が治ると思ふ)

*You think they will recover.* (君は彼等が治ると思ふ)

*He thinks I shall recover.* (彼は僕が治ると思ふ)

*He thinks you will recover.* (彼は君が治ると思ふ)

*Reporting verb* の主辭たる人の意思、

前文	後文
(1)	(2) shall
(1)	(3) shall
(2)	(1) shall
(2)	(3) shall
(3)	(1) shall
(3)	(2) shall

前にも述べた如く兩方の *clause* の主辭が第一人稱でも第二第三人稱でも同一人を指す時には、主辭たる人の意思を表すには一切 *will* を以てするが、其の他の場合には上の表の如くなる。今其の文例を示すならば、

*I say you shall try.* (僕は君にやってみると云ふ)

*I say he shall try.* (僕は彼にやってみせると云ふ)

*You say I shall try.* (君は僕にやってみると云ふ)

*You say he shall try.* (君は彼にやってみせると云ふ)

*He says I shall try.* (彼は僕にやってみせると云ふ)

*He says you shall try.* (彼は君にやってみせると云ふ)

*Reported speech* の主辭たる人の意思、

前文	後文
(1)	(2) will
(1)	(3) will
(2)	(1) will

(2) (3) will

(3) (1) will

(3) (2) will

皆な will を用ひるのである。今其の文例を擧げる。

I ask if you will do it. (僕は君に夫れをする意があるかと聞く)

I ask if they will do it. (僕はあの人達が——)

You ask if I will do it. (君は僕が——)

You ask if they will do it. (君はあの人達が——)

They ask if I will do it. (あの人達は僕が——)

They ask if you will do it. (あの人達は君が——)

## (8) 疑問の shall と will.

## A. 第一人稱の shall.

314. Shall I (又は we)? の意義——これは第二人の意思を問ひ命令を求める意に使ふ。

Shall I tell your rikishaman to wait? (お伴の車夫に待てる様に申しませうか)

When shall we have your answer? (何時お返事を賜はりますか、下さる御思召ですか)

Shall we? は之れと同一の精神から相談の意に使ふ。

When and where shall we meet next? (此の次ぎは何時何處へ寄合はうか)

Shall we take an excursion next month? (來月は遠足をやらうか)

## B. 第一人稱の will.

315. Will I (又は we)? の意義——これは餘り見當らない語であるが全くないとは謂へない。勿論自分の意思を問ふといふ義には用ひないに相違ないが(何となれば人は自己の意中を他人に問ふが如き馬鹿げた事は爲ないから)、他人から第二人稱未來の you

will を使て、

I fear you will be sorry in after years. (僕は君が他年後悔するに至るかと思つたか)

と云ふのを受けて、

Will I? Why? (僕が、何故)

と問返す時などには有り得べき語である。此の will は自己の意向を問ふ積りではなく、唯だ彼方が you will と云たから此方からも其の儘鸚鵡返しに will を使ふのである。又た反語 (rhetorical question) に will I? を用ひることも不可ではない。

What in my power will I not do for you? (僕の力て出来る事を君の爲めにしないことが何があるか、何でもする積りて居るのだ)

## C. 第二人稱の shall.

316. Shall you? の意義——Shall you? は單純の未來の外に、will you? の意味に使ふことが日常語にある。これは答へる人(即ち第二人)が I shall, we shall といふ語を使ふだらうと豫期して用ひるのである。

"Shall you come to see me to-morrow?" "Yes, I hope I shall." (君明日遊びに来ないか、行きたいと思て居るがね)

## D. 第二人稱の will.

317. Will you? の意義——これは第二人の意思を問ふのが根本の意味である。

Will you go and make inquiries about it? (君行て夫れを調べて來てはどうだ)

Will you take either? (どちらか引受ける積りか)

Which course will you take? (どちらの方針を取る積りですか) 故に誘引推差の意を表はすに用ひる。

Will you come to see me this evening and talk about our school-days over a bottle of whisky? (君今夜遊びに来ないか而して一瓶のウキスキをやり乍ら學校時代の昔語りをやらな

いか) (誘ふ意)

Will you have some refreshment before you go? (君行く前に何か喫へて行き給はぬか、何かやってから行くことにしないか) (すゐめる意)

又た依頼懇囑の意を表はす。但し此の意味の時には you will の場合の如く多く please, kindly, be good (或は kind) enough to, be so good as to を加へて使ふ。

Will you kindly (又 please) give him this if you should happen to see him? (君萬一あの人にお逢ひになったら之れをお渡し下さいませんか)

Will you be so good as (又 kind enough) to go and ask the shoe-maker if my boots are ready? (君失禮ながら靴屋へ行って僕の長靴が出来て居るか聞いて呉れ給はらんか)

E. 第三人稱の shall.

318. Shall he (she, it, they)? の意義——これは第三人の事に就いて第二人の意思を問ひ且つ其の命令を求めるに用ひる。

Shall the door be repaired? (戸を直させませうか)

Shall they start at six sharp? (あの人たちを六時キョカリに出發させませうか)

Which shall he bring next time? (次回には何ちらを持参させませうか)

F. 疑問語と shall, will.

319. 疑問語を主辭とする shall.——疑問 what, who, which を主辭にした shall は反語になる。

What shall then remain with you but heavy liabilities? (その時になって苦しい債務の外に君の身に何が残るものか)

Who shall overtake Opportunity when she is once gone? (好機といふ女が一旦飛過ぎて行たら誰が夫れに追着けやう)

When you are ruined, which of your old comrades shall feel for you? (君が落魄した時に君の舊友の中誰が君を氣の毒と思

て呉れるか)

つまり此の shall は悉く「—しない」といふ義で、「—せんや」といふのと同じである。

320. 疑問語を主辭とする will.——これは shall の場合と違て普通の間である、即ち「何が—するに至るか」「誰が—します」といふに止まる。

What will come of evil? (悪から何が生じ来るか)

Which do you think will suit him? (どちらが彼の氣に入ると思ふか)

## 七、Should と Would.

(1) 叙實様の should, would.

321. Shall, will と should, would.——前にも既に述べた如く should, would は shall, will の過去である。故に shall, will の意義用法は多く should, would に其のまゝ適用が出来る。然しながら初學の人には斯う言たのみではハッキリしないであらう故、稍や詳密に之れを論じやう。

322. 單純なる過去の未來——現在の未來は shall, will を以て之を示すのであるが、過去の未來は should, would を以て之を表はす。過去の未來といふは前にも略言した事であるが、過去の一定時より見て未來といふことであつて、例へば一昨日より昨日を見るの類である。今一昨日を過去と定めて

The day before yesterday I saw Mr. H. at the club and I asked him when he would leave for China. (一昨日 H. 君に俱樂部で逢た故君は何時支那へ立つのかと尋ねた)

といふと、此の H. といふ人は當時(即ち一昨日)はまだ日本に留て俱樂部に優遊して居たのだ故、早くも其の翌日か或は其れ以後に日本を立たか或は立たんとするのである、即ち其の出發は過去の一定時即ち一昨日より未來である。此の時の先後の關係を示さんが爲



めに would といふ助動詞を使ふのである。

さて should, would も shall will の如く他に種々雑多な意義を持つて居るが、單に過去の未來といふ事の符牒として使ふ時には第一人稱には should、第二第三人稱には would を用ひる。是れ現在の未來に於て第一人稱に shall、第二第三人稱に will を使ふと同じ理である。

It was half past seven, and all was now pitch-dark. We should have to wait until ten o'clock, when the moon would rise. (その時は七時半であった、天地は今や墨の様に闇々たるものだ、吾々は是非十時まで待たなくてはならん、その頃になれば月が出るのであった)

斯くの如く言へば should have to wait も would rise も共に七時半といふ過去の一定時の未來である、故に we の方に (第一稱人) should, the moon の方に (第三人稱) would を配用したのである。

It seemed to me that it would be a very long time before I should join my comrades.—Doyle. (自分が戦友の仲間に加はれるまでにはまだ餘程時日があることの様に自分は思はれた)

I thought that you would be fit for duty in a week. (僕は君が一週間経ては服務に堪へる様になると思た)

此の二文に於て過去の一定時といふは it seemed to me の時及び I thought の時である、此の時から見れば it would be や I should join や you would be は未來である (今日から見れば過去の事に相違ないけれども)。故に should (I には) 及び would (it と you には) が用ひたのである。

第一人稱に should 第二第三人稱に would を使ふといふ規則は、前文と後文の主辭が違ふ限りは間接引用 (indirect narration) にも當てはまる。下の例を見よ。

He } said I should fail. (彼或は君は僕が失敗するだらうと  
You }  
云た) "you shall fail" = "I should fail"  
"you will fail" = "I would fail" ?

I } said you would fail. (僕或は彼は君が失敗するだらう  
He } と云た)

I } said he would fail. (僕或は君は彼が失敗するだらう  
You } と云た)

序に述べて置くが間接引用に於て前文と後文と同一人同一物を指す時には、亦た shall, will の場合と同じく、should は單純の未來 would は主辭たる人の意思を表はす。故に

I said I should fail.

You said you should fail.

He said he should fail.

となる。又た此の said を feared, thought など、變へても should に變化は來ないのである。

以上は叙實様の should, would に關する話のみであったが、これより姑く可能様の should, would の説明に移らう。

## (2) 假想様と should, would.

323. 従文の假想様と should, would.—假想様の過去を従文 (dependent clause) に使ふ時には、主の文 (principal clause) に可能様の should, would (或は could, might) を使ふを常とする。而して此の場合にも單に假定空想の符牒として使ふのならば、第一人稱には矢張り should 第二第三人稱には would を用ひる (但し此の假定空想の符牒としてではなく、他に意思とか決心とかの意義が加味せられると、此の規則通りには行かなくなる)。

If I were to take a few drops of this liquid, I should soon die. (僕が若し此の液を三四滴飲まうものなら間もなく死んで了ふ) (併し是れは空想であつて決して飲みはしない)

If you were I, you would soon get angry with them. (君が僕なら君は彼等に對して直ぐ怒てしまふだらう) (併し事實上君は僕でない、だから怒りも何もしない)

If it *were* not for your help, he would be unable to succeed.  
 (君の助力のお蔭がなけりやあの人には成功をする譯に行かない)  
 (併し事實上君は彼を手傳て居る、だから屹度成功が出来る)

かくの如く *should*, *would* は假想を基礎として立てた假定空想の符號たるに過ぎないものである。隨て此の主文の言ふ所は全く事實に反對か或は甚だしく相違して居る。

従の文の動詞が假想様の未來 *if—should* となつて居る場合にも主の文には *should*, *would* を上の例と同義に使ふ、而して是れも第一人稱には *should* 第二第三人稱には *would* である。

If I *should* meet him in the street, I *should* (又は *shall*) be unable to recognise him. (街上であの人に逢つてもあの人たることを認識することは出来ないでせう)

*Should* you go to Europe, you *would* pass for an American Indian. (君が歐羅巴へ行くことになったら君は彼の地で北米土人といつても通用するぜ)

If he *should* fail this time, I am sure, he *would* not despair.  
 (あの方は今度やり損ても失望して了ふ様なことはないかと僕は確信する)

又従の文が假想様の過去完了である場合にも、上述の *should*, *would* が主の文に必要な事がある。例へば

If he *had* then *been* saved, he *would* be a man now. (あの時に助けられたら今は大人になつて居るのだけれども) (併しあの時死んだから此様な事は空想たるに過ぎない)

此の場合の従の文の動詞は假想様の過去完了で過去の事につき空想假定を表はして居るのだが、主の文の方は過去にあらざして現在の事に就き空想を表はして居る。かういふ風の取り合せになると可能様の *should*, *would* が主の文の方に必要になる。

If I *had* not sold that land, I *should* now be a rich man.  
 (あの土地を賣らなかつたら僕は今は金持なんだが、惜しい事をした)

If you had gone it, you would be a beggar. (君が當時無鐵砲な事をしたら君は今乞食になつてゐるのだよ) (併し夫れはしなくて仕合せてある)

假想様の動詞は其の他の附屬語と與に約略せられて、全部或は一部姿を隠し或は變形することがあるが、其の場合と雖も前記の *should* や *would* は矢張り必要である。この事は假想様の部に於て既に説明して置いたが(第二百八十九頁参照)、尚ほ念の爲め下に之れを例示して置く。

I leave town early to-morrow morning, *or* I *should* be able to attend the meeting. (私は明朝早く立ちます、左もなければ會に出られるのですけれども)

此の場合には前文が全部省略せられて其の代りに *or* の一詞が使はれる。

*But for* your help, he *would* hardly be able to put that plan into execution. (君が助けてやらなければ彼はあの計畫を實行しかねるだらう)

これは *if it were not for your help* を約略して *but for your help* としたのである。

324. 斷言を避け或は禮を重んじた *should* と *would*.—斷言し兼ねる場合或は禮義を重んじて丁寧な言葉使ひをする時には、叙實様は餘りにハッキリして輒もすれば無禮になるから、前述の如き可能様の *should*, *would* を用ひる。

I *should* think this is more than enough. (私はマアこれで十二分かと思ひますが)

I *would* as soon go into prison—better, I *should* say. (私は其様な處に居る位なら牢へ入ても同じに思ふ、イヤ其の方が善いと言はゞ言ひたい位のものだ)

*I should* think は *I think* よりも婉曲であるし、*I should* say は *I say* よりも控へ目な音なしの言ひ方である。

*It would* seem strange to you. (あなた方には變に思はれま

しやう) (It seems よりも穏和な言ひ振りである)

I should (又は would) like to know. (私は夫れを知りたいのすけれども) (I want よりも柔しい言ひ方)

Would you like to see them? (御覧になる御思召は御座ませんか) (これも do you want より丁寧な言葉である)

I wish you would register this letter. (恐入りますが此の手紙を書留めに願ひたう存じます) (I want you to register よりも鄭重である)

One would think he might have helped his uncle. (誰だつてあの人は伯父を助けさうなものであったと思ふだらう) (I think よりも遠慮した言葉である)

325. 意思を表はす should と would. — 前に述べた should, would は唯だ可能様の符號として附けられて居るのであるが、若し可能様にして意思を表はすのならば其の意義用法は下の如くなる。

- (一) 第一人稱の would は第一人の意思を表はす。
- (二) 第二人稱の should は第一人の意思を表はす。
- (三) 第三人稱の should は第一人の意思を表はす。

I would go if I might. (僕は行ても可いのならば行く積りであるが) (併し許されない故行かない)

If you should dare to do it again, you should feel the weight of my hand. (萬一お前が二度と夫れを敢てするならばお前に思ひ知らせるぞ) (第一人即ち I, we の意思)

前文の主辭と後文の主辭が同じく第三人稱であっても、人が違へば should を前述と同様の意義に使ふ。

At last they came to a decision that he should be transferred. (遂に彼を轉任させることに決議した)

此の場合の二主辭 they と he は均しく第三人稱ではあるが別人を指して居る。之れと同じ譯で

He heard the merchant propose that it should be the boy's

camel that should be killed. (殺すのはあの小兒の駱駝にしやうと商人が建議するのを彼は聽いた) (建議)

He told me that the house should be spared. (彼はその家を助けて置けと私に命じた) (命令)

He told them that the house should not be destroyed. (彼はその家を焼くなと命じた) (禁制)

They said that I should be shot if I moved an inch. (一寸でも動いたら僕を射殺すと彼等は云た)

He swore that not a soul should enter his room. (彼は唯だの一人たりとも彼の室へ入れないと罵た) (誓言)

It should be done at once if it were necessary. (それが必要ならば早速さうしませう) (第一人の意思)

Would の附いた動詞を if の下に使ふと、人稱の如何に拘らず可能様と意思 (但し此の意思は would の主辭たる人の意思であつて必ずしも第一人のみではない) を表はす。但し此の場合には if が略せられて其の代りに who が使てあることもある。

I am going to Kōbe this evening, or I would be present at the meeting. (私は今夕神戸へ行きます、左もなければその會に出席する氣なのでけれども)

I would go if I could. (行く力があるなら僕も行く積りだ)

If you would succeed in life, you must always be punctual. (人事に成功しやうと思て居るならば時間の約を始終よく守らねばならん)

One who would succeed in life must always be punctual. (同上)

I should be very happy if you would kindly give me a letter of introduction to Mr. K. (K. 君に紹介状を下さいます御思召が有りになるならば難有い仕合せに存じます)

Let any one laugh at you who would. (誰でも笑ひたいものに笑はして置き給へ)

Would fain (或は fainer), would as soon (或は sooner), would rather, would as lief (或は liefer) 等も之れと同義である。

We would fain stay with them. (可ければ彼等の處に逗留して居たいのだが)

I would fainer (sooner 又 rather) be a bonze. (そんな事ならば僕は寧ろ坊様になりた)

I would as soon live at the galleys as live with Madame Gombourge.—Thackeray. (ガムブルジュ夫人と同棲する位ならば監獄へ行って住んでも同じことだ)

I would as lief go as not. (行かなくても行っても可い、同じことだ)

### (3) 叙實様の would.

326. 叙實様過去の would.—叙實様過去の would に三つの意義用法がある。(一)は過去の習慣を表はす。例へば

They would spend hours together in talking about nothings. (その人たちは下らない事を噂して數時間づゝけ様に消費するを常とした)

If she (his mother) moved away, his eyes would follow.—Irving. (母親が出て行くと彼の目が親を慕て跡を見送るのが常であった)

Sometimes he would start from a feverish dream.—Irving. (時々彼は熱に浮された悪夢を見て飛立つことがあった)  
これ過去に於て常に度々した行爲をいふのであるから、事實を事實として記すものものであって隨て叙實様である。此の意味を現在に表はすには will を以てする (第三百二十八頁参照)。

(二) 固執して動かない事即ち頑強な意思を表はすには would を用ひる。これも叙實様の過去である。

As for Duroc, he would take nothing..... Doyle. (デュロックに至ては少しも物を喫べやうとはしなかった)

His horse stopped and would not move an inch. (彼の馬は立止て一寸も動く意思がなかった)。

是れは上の例でも分る通り何時も大概否定に用いてある。又た此の would の現在は will である (三百二十七頁参照)

(三) I wish と同義で假想様の動詞の前に使はれる。これも叙實様ではあるが上の二種とは違て現在である。又た此の動詞には主辭 I を省く。

Would (或は I wish) I were a bird and could fly up to thee. (私は鳥になって君の處へ飛て行けることを願ふ)

Would that you had burnt me alive.....—Kingsley. (あなたが私を焼殺して呉れたらよかつたと思ひます)  
此の would は時々省略されて見えないことがある。

O (would) that I were dead! (噫自分は死て了へばよかつた)

327. 間接引用の would.—間接引用の中の would は前文と後文の主辭が同一人に關する限りは必ず過去の意思、決心、約束を表はす。これも事實を事實として記すのである故、叙實様に相違ない。

I said that I would accompany him. (私はあの人と同行する積りだと云た)

You told me that you would join us. (君は僕等の仲間へは入ると僕に云た)

He answered that he would never change his mind. (彼は決して志を改めない決心だと云た)

He gave me a promise that he would exert himself for them to the utmost. (彼は僕に極力彼等の爲めに骨折ると答へた)  
嘗だに間接引用のみに限らず、總べて that の前に thought, was resolved, (決心して居た) made up one's mind (意を決した), determined 等の如き心的動作を表はす過去の動詞を用ひた時には、前後兩文の主辭が同一人を指す場合に限り would を使ふ。

I thought that I would buy the larger one. (私は大きい方

のを買はうと思た)

They were resolved that they would fight and fall to the last man. (人々は一人も残らず戦死するまで戦はうと決心して居た)

Did you make up your mind that you would carry it through to the end? (君は終極まで夫れを行て行くことに決心したのか) I thought that は my intention was that と同じである。故に my intention (或は his, 或は your intention) was that などにも矢張り would を以て意思を表はす。

My intention was that I would let him alone until he became conscious of his own situation. (自分の了簡は彼が自己の位置の容易ならざることを自覚するまで彼を打やめて置く積りであった)

His intention was that he would do his best to save the company from bankruptcy. (彼の了簡は該会社の破産を救ふ爲めに全力を盡さうといふのであった)

#### (4) 間接引用の Should と意思、

328. 意思を表はす should.—間接引用の should が前後兩文の主辭の同一人を指す時に限り過去の未來を表はすことは前に述べた通りであるが、兩文の主辭が別人に關する時には如何といふと、

(一) 主文の主辭が第一人稱、從文の主辭が第二第三人稱なる時は、should は第一人の意思、決心、約束、命令等を表はす。

(二) 主文の主辭が第三人稱、從文の主辭が第一第三人稱なる時は、should は第二人の意思、決心、命令等を表はす。

(三) 主文の主辭が第三人稱、從文の主辭が第一第三人稱なる時は、should は第二人の意思、決心、命令を表はす。

といふことになる。之れを例によって示すと、

I said (to you) that he should go. (私は君に彼を行かせると思た) (意思、約束)

I said that you should go. (私はお前に行けと云た) (命令)

You said that I should go. (あなたは私に行かせると思はれました) (約束)

They said that you should go. (人々は君を行かせる決心だと思た) (決心)

勿論これは *reporting verb* (即ち said) が過去になって居る場合をいふのであるが、それが現在であっても兩主辭が別人を指す場合には同じく should を使て意思、希望、約束、命令を表はすのである。

He is most anxious that you should take a few hours' rest. (主人はあなたが五六時御安眠を爲さることを切に望んで居ります) (希望)

I am willing that he should run this risk. (私は彼に此の危険を犯して貰ひたいのです) (希望意思)

Is it your wish that I should help them? (君は僕に彼等を助けて貰ひたいのか)

Is it settled that Mr. Katō should be one of the Directors? (加藤君が理事の一人になるといふことに決して居るのか)

Have you made up your mind that Ito should be sent to Shanghai? (伊藤を上海へ遣ふことに心を決したのか) (決意)

Laws of morality demands that we should not hesitate to correct our error. (道は吾々に其の過を正すに吝ること勿れと要求する) (要求)

I have received order that they should be made in a week. (私は一週間で夫れを造れといふ御命令を受取りました)

Order that they (should) be made in a week. (それを一週間で造れと命じろ)

此の should は何れも略することが出来る。

#### (5) 義務の should.

329. 義務の意を表はす should.—Should は過去、未來、現在の時を離れて、義務或は當然の道として爲すべく又た爲さるべ

からざる事を述ぶるに用ひる。

Every man should depend upon his own power only. (人は皆な自力のみに倚るべきものだ)

The philosopher should not see with the eyes of the so-called man of the world. (哲學者たるものは彼の所謂 通人といふものの如き眼で物を見てはならぬ)

He raised his hand in salute as a soldier should. (彼は武人の爲すべき道を守て擧手の敬禮をした)

It should be borne in mind that in one sense man was created to fight. (或る意味で申せば人といふものは奮闘する爲めに造られたといふことを心に記して忘れてはならぬ)

330. It is に伴ふ should. — 上述の should は轉じて it is fair, it is right, it is wrong, it is good, it is well, it is just, it is natural, it is necessary, it is important, その他之れに類似の意味の clause の下に使用せられることが實に廣い。

It is proper that you should decline the offer. (君はその申出を拒絶するが至當だ)

It is right that both parties should be punished. (双方に罰を加へるのが正當である)

Is it not better that you should not interfere with them? (君が夫れに關涉しない方が得策ではないか)

I think it necessary (或は of absolute necessity) that they should keep strict neutrality. (彼等は嚴に中立を守るといふことが必要、或は是非必要だと私は思て居ます)

此の it is や I think が過去であっても後の clause の動詞に變化はない。故に

It was well that he should refuse to sign the papers. (その書類に調印を拒むのは得策であつた)

I thought it natural that he should take side with his old friends. (彼が舊友の味方に立つといふのは當り前な事て怪む

に足りないと思はは思た)

併し是れまでの六七の例は何れも既成の事實に就いて彼れ此れの評を下したのではない、唯だ「——するものはしかと」といふ絶對論である。既に爲し遂げられた行爲に就いて論評を下すのならば should に have を添へる必要が起る、隨て其の次ぎには過去分詞が來る。

It is well that he should have refused to sign the papers. (その契約書類に調印をすることを拒んだのは策の得たるものである)

It was necessary that you should have ascertained his intention. (彼の意中を確かめて置いたといふは必要なことであつた)

此の二つの例の中、上は現在より前に成た事に就いて現在の批評をしたもの、又下は it was necessary (必要であつた) といふ時 (これは was だから過去である) より前に成た事實を當時の立場より批判したのである。

以上述べ來た should 及び should have は往々前文の it is right, it is necessary 等なくして用ひらるゝことがある。其の時には should は勿論 ought to と同意、should have は ought to have と同義である。

Give me your advice as to what I should do next. (その次ぎに如何したら宜しいか其の邊について高教を承りたいものです)

Something should be done to arrest its progress. (その進行を妨止する様に何とかせんければならぬ)

Your letter did not come to hand until five hours after it should have been delivered. (渡さるべき筈の時刻より後れること五時間に及ぶまで君のお手紙が届かなかつたのです)

I must say that you should have done it with much more care. (君はもっとズット多く注意をしてあれを爲すべきであつた)

と言はざるを得ない)

此の should は又た疑問語 why, how, who 等に伴ふ。此の時には文は反語の性質を帯んで否定と同効力になる。

No; *why* should I? (イヤ、どうして其様な事があるものですか)

*Why* should I fear death when my mind is always prepared for it? (始終死に對しては覺悟が出来て居るのに何故あって死を恐れませう、即ち死は少しも恐ろしくない)

*How* should I know? (あれが何うして夫れを知て居るか)

*Who* should care for it? (誰がそんなものを欲しがるものか)  
Why not? と云ふ文は矢張り同性質の文の略體である。例へば *why* should I not like it? と云ふべき所を、問ふ方の人 *do you like it?* と云た故、同一語を繰返すのも拙いといふ譯で略して「何故しない」即ち「好まない譯はない」といふのである、隨て「勿論」といふ義になる。

*Why* not go at once? (何故直ぐ行かないのか、行ては可けないといふ理由がないではないか)  
の如きも should と主辭を略したのである。此の類の組立は屢ば見當る。

#### (7) 豫言の should.

331. 豫言に使ふ should.—豫言者の豫言や神佛の御託宜を過去體の間接引用で表はすには should を要する(現在體ならば勿論 shall である)。

A prophecy had been given at the Temple of Delphi that Sparta should be saved by the death of one.....—Yonge. (これより先きデルファイの宮で神諭が出たが其託宜は.....の一人が死ねば夫れてスパルタ國は助かるといふのであった)

She foretold that her son should be pharaoh. (彼は己れの子が埃及王になると豫言した)

#### (8) Lest と Should.

332. 接續詞 *lest* と *should*.—接續詞 *lest*, 名詞 *fear*, 形容詞 *fearful* の後に使ふ助動詞は假想様の *should* である。但し此の *should* も略せられることがある、其の時には動詞の形は假想様の現在と同形になる。

I fastened the door *lest* we should be interrupted. (吾々が他人に邪魔されると可けないと思つて戸の締りをした)

Jot it down *lest* you (should) forget. (君忘れると可けない故夫とを書留めて置け)

I say this *for fear* you should be deceiving yourself. (君が自から欺いて居るかと氣遣ふから之れを一言して置くのだ)

He was only *fearful* *lest* her mind should change. (彼はその女の氣が變りはしないかと夫れのみ氣遣て居た)

#### (9) Would better.

333. *Would* と *better* 或は *best*.—*Would better* は「何々する方がよい」といふ得策の意味に使ふ。此 *would* は英語の *idiom* として *had* に更めても同じことである。

You would (又た *had*) *better* say nothing about it again, for it would only expose your folly. (君はあの事をもう何とも言はない方が宜しい、言ふと唯だ自分の馬鹿を曝露するのみだから)

*Better* と同じく *best* も使へる。

You would *best* let them alone. (君はあれを打やらかして置くが一番よろしい)

#### (10) 意外といふ義の should.

334. 意外といふ義の *should*.—*Should* に意外の義がある、隨て又不思議、驚愕、悔恨等の意を表はし、*it is strange, it is curious, it is remarkable (變だ), it is singular, it is wonderful, I wonder, no wonder, I am surprised, it is surprising, it surprises me, I regret, I am sorry, it is regrettable, it is a pity, to think, 其*

他之れに類似の語の下に来る *clause* に用ひられる。これは何れも問題となった事に就いて感情を述べる文句である。事が既成の事實である時は *should have* を使ふことになって居る。

*It is strange that he should have such a big sum of money.* (あの男がそんな大金を持つて居るのはをかしい)

*It is remarkable that she should have gone to Kyōto.* (あの人が京都へ行たといふのは注目すべき變な事だ) (これは既成事實である故 *should have gone* といったのである)

*I myself also wonder that I should have overlooked it.* (自分ながらあれを見落したのを不思議に思ふ) (既成の事實)

*No wonder that they should venerate the vicar.* (彼等が村寺の和尚様を尊むのは何の不審議もない事だ)

*I regret that any such feeling should have arisen.* (そんな感情が聊かたりとも起たのは遺憾の事に思はれる) (既成の事實)

*It is a pity that he should be in such poor health.* (彼がそんなに體が悪いと痛はしい事だ)

*To think that they should be silly!* (あの人がたちがそう淺はかな事をするを考へると遺憾千萬に思はれる)

此の *it is a pity, I regret, to think* などを略して *that* 以下だけを存ずる文も屢ばある。

*O, that he should use her daughter-in-law so!* (あゝ、あの人が義理ある娘を彼様な扱ひをするとは)

*O holy saints, that I should be born to suffer this!*—Thackeray. (あゝ、諸ろの聖此の身が斯かる苦患を受けん爲め此の世に生れ出てんとは)

#### (II) *Should have* と *would have*.

335. 可能様過去完了の *should have* と *would have*.—單に可能様過去完了の符號として *should have* と *would have* を使ふ時には、第一人稱は *should have* 第二第三人稱は *would have*

である。これには勿論意思、決心、義務等の觀念は少しも加らないのである。これには大抵假想様の動詞を含む *clause* を伴ふが、夫れが無い時には略せられたのである。

*If we had not read that book, we should have failed in the examination.* (あり本を讀んで置かなかつたら吾々は試験に失敗したらう)

*Had it not been for his help, you would have failed.* (あの人の助力がなかつたら君は失敗たらう)

*If he had done so, no one would have blamed him.* (彼がさうしたら何人も彼を咎めなかつたらう)

*If I had had a hand in it, I should have been ruined.* (あの仕事に仲間入りをしたら僕は零落したらう)

*He was out of town, or he would have attended the gathering.* (彼が市外へ出て居ました、左もなければ會に出席したのでせう)

336. 第一人稱の *would have*.—*I* (又 *we*) *would have* は前記の *would have* に意思の意味を加へたと同じ効力がある。

*Had it not been for my sudden illness, I would have joined you.* (若し急病でなかつたら私はあなた方の仲間に加はつたのですけれども)

*Not a sen would we have advanced him had we known it.* (それを知て居たら唯だの一錢も彼に融通はしてやらなかつたものを)

337. 第二人稱、第三人稱の *should have*.—第二第三人稱の *should have* は大概 *ought to have* と同義で「—すべき筈であつたのだ」といふ意味に使はれる。第一人稱の *should have* も此の意義に用ひられることがある(第二百九十七頁 第二百九十八節 参照)。

*He should have sent me a telegram when he returned.* (歸て來た時に電報を寄越すべき筈であつたのに呉れないとは不行



届千萬だ)

I should have written you sooner. (夙くに御手紙を差上げるべき筈で御座いましたが)

## 十、動詞の解剖

338. 動詞の解剖は其の種類性質(即ち *transitive* 或は *intransitive*, *complete* 或は *incomplete*) 體 (*intransitive* ならば不要)、人称、數、様、時を擧げるのである。下の例に就いて見よ。

1. He is poor, but he is honest. (あれは貧乏だが併し正直だ)

“Is.”—Incomplete intransitive verb, (一) third person, (二) singular, (三) indicative mood, (四) present tense.

“Is.”—同上

2. I got his letter yesterday saying that he would come to see me in a few days. (私は昨日あの人から三四日経てば僕に會ひに来るといふ手紙を受取りました)

“Got.”—Complete transitive verb, (一) active voice, (二) first person, (三) singular number (四) indicative mood (五) past tense.

“(Would) come.”—Complete intransitive verb, (一) third person (二) singular number, (三) indicative mood, (四) future to the past.

3. If there were no sun, all animals would die. (太陽がなければ動物は皆な死ぬだらう)

“Were”——Complete intransitive v., (一) third person, (二) singular number, (三) subjunctive mood (四) past tense.

“(Would) die.”——Complete intransitive v., (一) third person, (二) plural number, (三) potential mood (四) past tense.

4. Should you happen to see him at school, please give him this package. (萬一學校であの人にも會ひになったら此の包をあの人にも渡し下さい)

“Should happen.”——Incomplete intransitive v., (一) second person, (二) singular number, (三) subjunctive mood, (四) future tense.

“Give.”——Incomplete transitive v., (一) active voice, (二) second person, (三) singular number, (四) imperative mood, (五) present tense.

5. If they had taken that course, they might have been ruined. (彼がそんな方針を取らなれば彼は破産したらう)

“Had taken.”——Complete transitive v., (一) active voice, (二) third person, (三) plural number, (四) subjunctive mood, (五) past perfect tense.

“Might have been ruined.”——Complete transitive v., (一) passive voice, (二) third person, (三) plural number, (四) potential mood, (五) past perfect tense.

## 第九章

## VERBALS.

## (准動詞)

## 一、准動詞及び其の種類

339. 准動詞の用——准動詞 *verbal* は前に動詞の部に説明した通り(第二百〇三頁参照)正動詞 (*finite verb*) にあらずるものをいふのである。換言すれば正動詞は動詞本来の用を爲して他の用を爲さないが、准動詞は動詞の用と他詞の用を兼ねるものである。こゝに他詞といふは先づ名詞と形容詞とをいふ。

340. 准動詞の種類——准動詞には *infinitive* と分詞 (*participle*) と *gerund* の三種類ある。*Infinitive* は動詞の語根に *to* を冠せしめたもの即ち *to go, to speak, to ask* の如きものをいふ。是れは主として動詞と名詞の用を兼ねるものである。第二に分詞は二種あって、動詞の語根の末尾に *ing* の附いたのは *present participle* (現在分詞) といひ、同じく語尾に *ed* の附いたのを *past participle* といふ(但し不規則動詞は他の變化を生ずこと第百九十七頁以下の表の示す通りである)。これは動詞と形容詞の用を兼ねたるものである。第三の *gerund* は其の形體が全然現在分詞と同く、其の用は *infinitive* と同様に動詞にして名詞の用を兼ねて居る。此の外三種に各 *perfect* (完了) の一體がある、何れも *have* や *having* の附屬したものをいふ。*perfect infinitive* は *to have spoken, to have asked* の如き語(之に對して普通のを *simple infinitive* といふ) *perfect participle* は *having spoken, having asked* の如きもの、又た *perfect gerund* も之れと全然同形である。

## 二、Infinitive.

341. Infinitive の用途——*Infinitive* は主にも動詞と名詞とに兼用せられる。故に下述の如き種々の用を爲す。

## (一) 主辭。

*To know grammar is one thing; to write well is another.* (文法を知て居るといふは書くとは別の事である、文法を知て居るからといって必ずしも文が旨く出来るものでない)

*To err is human; to forgive is divine.* (過るは人の事なり、之を容すは神の事なり)

こゝに *infinitive* は四つとも *is* といふ動詞の主辭に使はれて居る。この主辭になる *infinitive* が少し長くなると是れが文の後へ送られて、主辭に *it* を使ふことになる。この時にはその *infinitive* は主辭が何を指すかを説明することになる故説明辭の一種である。

*It is wrong to tell a lie.* (虚言を吐くのは悪い)

## (二) 目的。

*We have only to stretch out our arms to catch it.* (吾々は其を取るに腕を伸せばよいのである、僅かに一舉手一投足の勞だ)

此の *to stretch* といふ *infinitive* は動詞 *have* の目的である。

*I should like to know the reason for all this.* (以上の事の理由を承知したいのですが)

此の *to know* は動詞 *should like* の目的である。*Factitive verb* 即ち補辭を要する他動詞の目的として *infinitive* を使ふ必要が起たら、*it* を目的として動詞の次に置き、其の下に補辭を配り、然る後 *infinitive* を置くを法とする。

*I found it difficult to translate them.* (これを譯して見ると六かしいことが分た)

*Don't you think it necessary to adopt his advice?* (君はあの人の勸告を納れることを必要と思はないか)

この場合に *infinitive* の *to translate* と *to adopt* は前の *it* に對して説明辭になつて居ることを考へよ。又た特に注意をして置くが斯かる場合に *it* は決して抜かしてはならぬ。

(三) 補辭。

The best way would be *to wait*. (最上の策は待つに在るだらう)

To teach is *to learn*. (教ふるは即ち學ぶなり、人は教ふる間に學問をする)

こゝでは *to wait* は *is* の補辭、*to know* は *seems* の補辭である。而して是れは二つともに主辭に關する語である故所謂主格補辭である。

I found him *to be* a great knave. (彼を扱て見ると大變な獵物であることが分りました)

I take this *to be* the result of constitutional government. (私は之れを以て憲法政治の結果と存じます)

He wants me *to mend* this. (あの人は僕に之れを直して貰ひたいのだ)

此の *infinitive* は矢張り補辭であるが、併し上にある例の補辭とは違つて動詞の目的たる *him* や *this* や *me* の事に關する補辭である故、所謂目的補辭である。

(四) 説明辭 (これには *it* といふ代名詞に對するものと抽象名詞に對するものと二種ある。 *it* に對するものの事は本節の(一)及び(二)に説明した。下に擧ぐるのは他の一種の方である)

Have the *goodness* (又は *kindness*) *to show* it to me. (どうか夫れをお見せ下さい)

此の *goodness* といふ抽象名詞は何を指して居るのか之れだけでは不明だから、其の下に *infinitive* を附けて之れを説明するのである。

A *right* *to make* domiciliary search. (家宅搜索を行ふ權利)

His *resolution* *to confront* it. (これに對抗せんと決心)

*Permission* *to speak*. (發言の許可)

これ等も同様の組立てである。

342. 形容詞の用を兼ねた *infinitive*.—名詞や代名詞の後に附隨し之れを形容するのは *infinitive* の一任務である。

I was the first (*man*) *to get* here. (此處へ着したのは私が一番でありました)

He is not the *man* *to command* these roughs and rowdies. (あの人は此の荒くれ者を指揮する柄の人ぢやない)

It will remain as it is, for many years *to come*. (あれは將來に來らんとする數年の間あの儘で變らない)

There is *nothing* for you *to be* alarmed at. (君が驚き遯てる程の大した事はない)

これ等の *infinitive* は皆な其の前の名詞代名詞を形容して居る。此の形容詞としての *infinitive* は又た不完全動詞の補辭にもなる。

He is *to come* to-morrow. (明日は來る筈だ)

He seems *to know* all about it. (彼はそれをスッカリ知て居るらしい)

此の *to come* と *to know* は *is* と *seems* の補辭である。

茲に一言注意をして置くが、此の形容詞としての補辭と名詞としての補辭は形に於て全然同じであるけれども、其の意味が少しく違ふ、即ち第三百五十六頁に見えた

To teach is *to learn*. (教ふるは即ち學ぶなり)

の *to learn* は動詞の主辭たる *to teach* と同一物である様にいふのであるが、上の例の *to come* は *he* と同一物ではない、唯だ *he* が爲す業をいふまでである。

The best way is *to send* them by post. (最上の法はそれを郵便で送るに在る)

He seems *to know* all about it.

此の場合でも上の *to send* は *is* の下の補辭 *to know* が *seems* の補辭になつて居る。上のは *the best way* が即ち *to send*……といふのであるに反して、下のは *he* が知て居るらしいといふに止る。換言すれば上の文は前後を轉倒して *To send them by post is the best way* とも言へなくはないが(文の巧拙は別問題として)、下のを同様に轉倒して *To know……seems he* (知て居るといふ動作は彼らしい)とは言へない。此の點に注目すると二者の區別が分る。

343. 副詞の用を兼ねた *infinitive*.—*Infinitive* は動詞を形容し或は形容詞副詞を形容して副詞の用を爲すことが屢ばある。動

詞を形容する時は動詞が表はして居る事實の (一) 目的 (二) 原因 (三) 理由 (四) 結果を表はす。

I spoke to him in English, French and German to make myself understood. (私は先方に此方の意味を分らせる爲めに英佛獨語で話した) (目的)

He is coming to see me to-day. (今日僕に逢ひに来ます) (目的)

She wept to read the letter. (彼はその手紙を見て泣いた) (原因)

I regret to have to say that we suffered a severe loss. (遺憾ながら大損失を被りました) (原因、下の如きことを言はなければならぬが、是れが原因で遺憾残念といふ感じが生ずるとの意)

They marched southward, only to be defeated again. (彼等は南下して来たが其の結果は唯だ再敗したとけてあった)

Did he take the examination only to fail in it again? (あの人は復た失敗しに受験したのか、受験して復た失敗したのか) (結果)

You must be a great pedestrian to walk all the way. (全距離を皆な歩くからには君は非常な健脚家に違ひない) (理由、エライ健脚家だと断じた理を to walk で表はして居る)

He is a confounded fool to say so. (そんな事を云ふなんて大馬鹿者だ) (理由)

形容詞を形容する例を示すならば、

He is likely to succeed. (あの人は成功しさうだ)

We are apt to misspell it. (吾々は夫れの綴を誤り易い)

I am willing to see them. (私は逢て見やうと思て居る)

これ等の *infinitive* は何れも其の前に在る形容詞 (likely, apt, willing) を形容して居る。

*Infinitive* は又た副詞 *enough, too* などを形容する。その場合に

は副詞の用を爲すのである。何となれば副詞を形容するものは副詞だからである。

He is *too* honest to tell a lie. (彼は虚言をつくには正直すぎて、嘘が言へない)

They ran fast *enough* to keep pace with his horse. (人々は彼の馬について行く程に疾走した)

344. 本文に無関係の *infinitive*.—或る *infinitive* は文法上本文に何の関係なく(意味上から見れば無論無関係ではないが)用ひられる。之れを *absolute* に使ふといふ。

To tell the truth, I am not fond of dogs. (實を申すと私は犬を好まないのだ)

此の文に於て to tell the truth は本文 I am 以下に對し何等の文法関係もない。詳言すれば此の *infinitive phrase* は主辭 I を形容するのでも、am の補辭でも、fond を形容するのでもなく、又た dogs を形容するのでもない。故に獨立無関係に使ふといふ。

To do her justice, she is not such an ill-tempered woman. (あの婦人に正當公平の判決を下すならばそんな心の悪い女ではないのである)

Strange to tell (又 say), he dreamed the same dream three nights. (お話し申すも不思議だが三夜同じ夢を見た)

345. *Simple infinitive* と *perfect infinitive*.—此の二種の意義用法の區別は主もに下述の點にある。

(一) *Simple* は其の附屬する動詞が表はす事實と同時に或は其以後に起る事を表はす。

(二) *Perfect* は其の附屬する動詞が表はす事實より前に完成した事を表はす。

He *seems* to be ill. (あの人は病氣で居るらしい)

これは *simple* だから動詞の *seems* と同時である、即ち *seems* も to be も現状をいふ。

He *seemed to be* ill. (病氣中であるらしかった)

He *was said to be* in hospital. (病院に居るといふ評判であった、噂が聞こえた)

此の「らしく思はれた」「評判であった」は過去であるが、「病氣中」といふのも「入院中」といふのも亦た過去である。故に両方とも *simple* が使てある。

He *is to come* to-morrow. (あの人は明日来る筈である)

I *have to go* there. (私は彼處へ行く必要義理を有して居る、即ち行かなければならん)

此の *is* 即ち「筈である」といふのは現在だが、*to come* 即ち来るのは明日即ち現在より後である。又た *have* 即ち必要を持て居るのは今であるが、實際行くのは今より以後の事である。即ち *infinitive* のいふ事は動詞の表はす事より後になる。

He *was to come* the following day. (翌日来る筈になって居た)

I *shall then have to go* there. (その時には私は彼處へ行かなくてはならん)

といへば *was* は前 *to come* は後である。又た *shall have* は未來だが、*to go* は夫れより更らに後の事である。

然るに *infinitive* が *perfect* になると動詞の表はす事實よりも *infinitive* の表はすことが前になる。

He *is said to have killed* himself. (彼は自殺したと云はれて居る、自殺したのださうだ)

此の評判や噂は現在の事、自殺は既成の事である。

I *believe him to have come*. (僕はあの人がもう来たと思する)

此の *believe* も現在、*to have come* は既に完了したのである。

He *was said to have seen* it. (彼はそれを實見したといふ評判であった)

I *regretted to have displeased* him. (自分は彼の不機嫌を買

たことを後悔した)

此の *to have seen* は *was said* より前の事、又 *to have displeased* him は *regretted* より前に完了した行爲である。

346. *To* を省いた *infinitive*.—*Infinitive* には *to* が省かれることが屢ばある、下の詞の下には之れを省く。

(一) *Bid* (命じて——させる), *let* (許して——に——させる), *to have* (をして——させる), *make* (をして——させる), *help* (手づたふ), *please* (どうか).

I *bade* them go. (彼等に命じて立去らせた) (*bade* は *bid* の過去) (受働體になると *to* が要る。They were *bid to go*.)

*Let us go.*

His father would *have* him go to sea. (彼の父は是非彼を船乗りにならしめやうと思た)

*Help me wash* these sliding screens. (此の障子を洗ふのを手傳て呉れ)

This *made* them feel at home. (この事が彼等一同を心安からしめた) (受働體には *to* あり、They were *made to run*. 彼等は敗走せしめられた)

(二) *See, hear, feel, watch, feel* 等感覺の動詞。

I *saw* them laugh at me. (私は皆なが私を笑ふのを見た) (受働體には *to* が要る、He was never *seen to laugh*. 彼は未だ嘗て笑ふのが見えたことがない)

Did you ever *hear* a wolf howl? (君は狼が吼えるのを聞いたことがあるか) (受働體には *to* を要する、He was often *heard to say so*. (彼が屢ばそんなことを言ふのが他の人の耳に入た)

Did you *watch* them come? (彼等の来るのを覗て居たのか)

Did you *feel* the house shake? (君家の震へるのを體に感じたか)

(三) *Had better, had best, had liefer, had rather, cannot but, do nothing but, do no more than.*

You had better stay for some time. (少し御逗留になる方が宜しい)

We could not but laugh at it. (それを見て笑はずには居られなかった)

He did nothing but smile. (彼はたゞ微笑した許りであった)

She does no more than pray. (あの人は念佛より外何もしない)

347. Be と infinitive.—Be に infinitive を添へると色々の意義を生ずる。

To teach is to learn. (教ふるは即ち學ぶなり)

My only chance is to attempt it again. (私の成功の望は今一度やってみるに在る)

It is to (=should) be borne in mind that Napoleon was no more of a man than we are. (奈翁も吾々同様の人間であったといふ事を記して忘れてはなりません)

This is only to let you know my safe arrival. (これは自分の安着をお知らせ申すまでです)

Is it to (=can it) be had here? (當地で買へますか)

He is to visit here next year. (來年當地へ遊びに来る筈です)

348. Have と infinitive.—動詞可能様 must の部に述べた通り have to は must と同一の効力がある、故に must の未來や過去は之れを相當の tense に合せて作るのである。

I have to go. (行かなければならん) (現在)

I had to go on business to Yokohama. (私は横濱へ用事があつて行かなくてはならなかった) (過去)

I shall have to go on business to Y. to-morrow. (未來)

之れに not を加へると need not の意味に使ふが、是れもどの tense にも使へる。

You will not have to go yourself. (君自分で行くには及ば

對する代を拂ふ)なども simple を使ふのが規則になつて居る。

I remember long ago dining with you here and spending an agreeable evening. (僕は久しい前に君と此處で晚餐を共にして心持のよい一夕を過ごしたことを覚えて居る)

I must apologise myself for not answering to your letter so long. (貴書に對し御返事永々延引に及び候段御海恕を乞はざるべからざる次第に御座候)

He was accused of instigating the rioters. (その暴動者を彼が指唆したといふ告發を受けた)

He was blamed for neglecting his duty. (務を怠たといふ攻撃を蒙た)

これ等の gerund は動詞の指して居る時よりも前に完了した事に相違ないが、特に之れを perfect にしないで解ることである故、simple にして置くのである。

## 五、准動詞の解剖

355. 准動詞の解剖は各詞につき infinitive か、分詞か、gerund かといふことを述べ、且つ何の形容辭、或は主辭、或は目的辭、或は補辭であるといふ事、若くは獨立に使用してあるといふ事を述べるのである。

1. She was right in doing so. (あの人がさうしたのは尤もであった)

“Doing.”—Gerund, in の目的辭である。

2. The major being killed, the whole party beat a hasty retreat, leaving the dead and the dying on the field. (少佐が殺されたので全隊が死者と半死者を戰場に遺棄して蒼皇退却した)

“Being killed.”—Present participle (passive voice), logical

You had better stay for some time. (少し御逗留になる方が宜しい)

We could not but laugh at it. (それを見て笑はずには居られなかった)

He did nothing but smile. (彼はたゞ微笑した許りであった)

She does no more than pray. (あの人は念佛より外何もしない)

347. Be と infinitive.—Be に infinitive を添へると色々な意義を生ずる。

To teach is to learn. (教ふるは即ち學ぶなり)

My only chance is to attempt it again. (私の成功の望は今一度やってみるに在る)

It is to (=should) be borne in mind that Napoleon was no more of a man than we are. (奈翁も吾々同様の人間であったといふ事を記して忘れてはなりません)

This is only to let you know my safe arrival. (これは自分の安着をお知らせ申すまでです)

Is it to (=can it) be had here? (當地で買へますか)

He is to visit here next year. (來年當地へ遊びに来る筈です)

348. Have と infinitive.—動詞可能様 must の部に述べた通り have to は must と同一の効力がある、故に must の未來や過去は之れを相當の tense に合せて作るのである。

I have to go. (行かなければならん) (現在)

I had to go on business to Yokohama. (私は横濱へ用事があつて行かなくてはならなかった) (過去)

I shall have to go on business to Y. to-morrow. (未來)

之れに not を加へると need not の意味に使ふが、是れもどの tense にも使へる。

You will not have to go yourself. (君自分で行くには及ば

欠

MISSING



對する代を拂ふ)なども *simple* を使ふのが規則になって居る。

I remember long ago dining with you here and spending an agreeable evening. (僕は久しい前に君と此處で晚餐を共にして心持のよい一夕を過ごしたことを覚えて居る)

I must apologise myself for not answering to your letter so long. (貴書に對し御返事永々延引に及び候段御海恕を乞はざるべからざる次第に御座候)

He was accused of instigating the rioters. (その暴動者を彼が指嚇したといふ告發を受けた)

He was blamed for neglecting his duty. (務を怠たといふ攻撃を蒙た)

これ等の *gerund* は動詞の指して居る時よりも前に完了した事に相違ないが、特に之れを *perfect* にしないで解ることである故、*simple* にして置くのである。

## 五、准動詞の解剖

355. 准動詞の解剖は各詞につき *infinitive* か、分詞か、*gerund* かといふことを述べ、且つ何の形容辭、或は主辭、或は目的辭、或は補辭であるといふ事、若くは獨立に使用してあるといふ事を述べるのである。

1. She was right in doing so. (あの人がさうしたのは尤もであつた)

“Doing.”—Gerund, in の目的辭である。

2. The major being killed, the whole party beat a hasty retreat, leaving the dead and the dying on the field. (少佐が殺されたので全隊が死者と半死者を戰場に遺棄して蒼皇退却した)

“Being killed.”—Present participle (passive voice, logical

subject の “*the major*” と共に absolute construction をなして居る。

“*Leaving.*”——Present participle, 後の “*the dead and the dying on the field*” と共に absolute construction をなして居る。

“*Dying.*”——Present participle, “*leaving*” の object である。

3. On turning round, I saw my friend totter. (振りかへつて見たら吾が友がヨロヨロするのが見えた)

“*Turning.*”——Gerund, “*on*” の object である。

“(To) totter.”——Infinitive, 動詞 saw の補辞である。

4. The young men educated here now number 2,000. (此處で教育された青年は今では二千人に及ぶ)

“*Educated.*”——Past participle, 主辞 men を形容す。

5. Judging from all I hear, he is a man of extraordinary character. (自分の聞いて居る所によると、あれは異常な人物です)

“*Judging.*”——これは absolutely に使はれ居る。

6. To tell the truth, I am not a man of rank or of wealth. (實を申せば私は門地も金もある人間ではない)

“*To tell.*”——Infinitive, 獨立に用ひられて居る。

7. It is necessary for you to begin preparations at once. (早速準備に取り掛かることは君に必要なことだ)

“*To begin.*”——Infinitive, subject “*it*” に對する説明辞である。

## 第十章

### ADVERBS.

(副詞)

#### 一、副詞の定義、分類、用法

356. 定義——副詞 (*ad'verb*) は形容詞、動詞、他の副詞及び文全體を形容する詞である。

副詞は形容詞を形容すること下の如くなる。

He is very tall for his age. (あの人は年齢の割合に身長が餘程高い)

It is comparatively easy. (それは比較的易い)

How many pens do you want? (ペンを幾本御入用ですか)

この例の very, comparatively 及び how は何れも副詞であって、其の下にある形容詞を形容して居る。換言すれば其の次ぎにある形容詞に附屬して居る。又た動詞を形容することがある。多くの副詞は此の用を爲すのである。

You paint very well. (君は繪を旨く書く)

The giraffe cannot run very fast. (麒麟は大して疾く駆けることが出来ぬ)

この well は you といはれる人の書き方を示す言葉である故、前の動詞 paint に附屬して之を形容し、fast は cannot run を形容する。

He is now dead. (彼は今は死んで此の世に居ない)

Here is your hat. (此處に君の帽がある)

When and where did you see him? (君は何時何處であの人に會ひましたか)

此の now は其の人の死んで居ないといふ状態の時を表はし、here

は帽子の所在を示して、共に動詞 *is* に附いて居る。又た *when* と *where* は共に *did see* といふ働きの起た時と場處を示して、該動詞に附屬して居る。その次ぎに副詞はまた他の副詞を形容する。上の例の

You paint **very well**.

の *very* の如きは他の副詞 *well* に附屬して之れを形容して居るし、

**How long** will you stay here? (當地には幾日御逗留ですか)

の *how* は其の下にある副詞 *long* を形容して居る。

副詞は既に形容詞及び他の副詞を形容するのである故、隨て之れと効力を齊くする語句、即ち *adjective phrase* (又た *adjectival phrase* ともいふ)、*adverbial phrase*, *adverbial clause*, 及び准動詞を形容することもある。例へば

I left the office a little **past five**. (僕は五時少し過ぎに該事務所を立去た)

といふ時には *a little* は *past five* といふ *adverbial phrase* に附屬して之れを形容し、

A letter **apparently** from his cousin at Osaka was brought in. (どうやら大阪に居るあの人の従兄から來たらしい手紙が配達されて來ました)

といへば「どうやら——らしい」といふ *apparently* は *adjectival phrase* なる *from his cousin* を形容して居る。また

He declined this offer **simply** because he was too far advanced in age. (あの人は單だ餘り年が進み過ぎて居るといふ故のみて此の勸めを辭した)

の *simply* は *because* 以下の *adverbial clause* に附屬して居るのである。又た

It is impossible to speak of him too severely. (あの人の事はどんなに烈しい言葉を使っても酷に過ぎる様に言ふことは出來ない)

He went off, **shutting** the door violently behind him. (後に

亂暴に戸を締めて出て行た)

I have never thought of his **dying** so soon. (僕はあの人がさう早く亡くならうとは思ひも寄らなかつた)

といふと、第一の文では *severely* が *infinitive, to speak* に附屬し、第二では *violently* が *shutting* といふ分詞に附屬し、第三では *soon* が *dying* といふ *gerund* に附屬して居る。何れも副詞が准動詞を形容した例である。

尙ほ此の外に上の定義にも見ゆる通り副詞が文全體を形容することがある。

**Fortunately** he was out when the assassin stole into his house.

(幸にして刺客が其の家へ忍び入た時に彼は外出して居た)

此の *fortunately* といふ一語は此の文全體に言てある事が幸であつたといふ意である故、即此の文全部を形容して居るものと視るべきである。

**Perhaps** they have some other object in view. (多分彼等は何か他に目あてとする事があるだらう)

此の *perhaps* も全文に言てある事に就いて不定或は推測の意を表はして居る。

357. 副詞の他の用途——副詞は上述の外に間々下の如き使ひ途がある。

(一) 名詞として使はれる事。

**Now** is the time for you to begin, boys. (オイ諸君始めるのは今だぞ)

**The how** is quite simple. (その方法は極簡短です)

I don't know **the why** (=the reason why). (私は其の理由を知りません)

此くの如く疑問の副詞に *the* を附けると何れも名詞の用をなす。*The wherefore* (その目的理由) の如きも夫れてある。

この外に前置詞の下に其の目的として配置される副詞は皆な名詞の用を爲す。

Till then. (其れまで)	Until now. (今まで)
By now. (今までに)	By then. (その時まで)
At once. (直ちに)	For once. (一度きり)
From there. (彼處から)	To here. (此處まで)
From under. (下から)	From above. (上から)
Before long. (近き内に)	Until recently. (此の間まで)

の如きは皆夫れてある。

(二) 形容詞の如く名詞に附屬して之れを形容する事(但しこれに就ては副詞が直接に名詞を形容するのではなく、名詞を形容して居る分詞(但し此の分詞は略せられて居るのである))を又た形容すると解しても宜しい。

In his **then** (*held*) *position* he would better have been silent.  
(あの人は當時の位置としては下手に口をきかないで沈黙して居た方がよかつたのだらう)

The **up** (*going*) *train* has just left, but the **down** (*going*) *train* has not come yet. (上り列車はもう立たが下りの方はまだ来ません)

The **above** (*given*) *examples*. (上に擧げてある例)

His last *visit* **here**. (あの人の當地へ最後の來遊)

The young *men* **there**. (彼處に居る若人)

The **once** *province* of Britain. (一たびは英領たりし地)

(三) 形容詞の如く動詞の補辭たる事。

My lamp *is* **out**. (僕の燈火は消えて居る)

"Is your father **in**?" "No, he *is* **out**." (君の處のお父様は御在宅ですか、イヤ外出して居ます)

The game *is* **off**. (稷物が出た)

He *has been* **down** with influenza for about a week. (あの人は一週間許り流行性感冒で臥て居ます)

Come when school *is* **over**. (學校が濟んだら來給へ)

① The prince *was* early **abroad**.—Stevenson. (親王殿下は朝夙く

御外出になった)

此の例の中にある動詞は何れも不完全動詞である故補辭を要する、而して其の補辭は即ち副詞 out, in, off, up, down, over, abroad である。

358. 副詞は何を表はすか — 副詞が表はす事は

(一) 場處、位置、方向、距離。

例—Here (此處), there (其處), where (何處), whence (何處から), whither (何處へ), nowhere (何處にも—ない), wherever (何處でも—する所に), forward (前方へ), northward (北方に), starboard (右舷の方に), off (離れて), away (離れて), up (上の方へ), above (上に), in (中に), within (内に).

(二) 時。

例—Now (今), then (その時に), when (何時), formerly (昔), hence (今より), thence (その時より), since (爾來), hitherto (從來), henceforth (今後), thenceforward (その以後), afterward (後に至て), before (今より前に), once (一度び), again (復び), often (折々), seldom (滅多にしない).

(三) 仕方、爲し様 (これが副詞の中に最も多い)

How (どうして), well (上手に、旨く、善く), ill (悪く), badly (拙く), thus (簡様な次第で), otherwise (他の方法で、さういふ風でなく), skilfully (巧みに), swiftly (疾く), slowly (徐々に), steadily (確實に), pleasantly (心持よく), frankly (澹泊に), fully (充分に), deeply (深く), gladly (喜んで), reluctantly (いやいや乍ら), suddenly (急に), hastily (蒼皇、急いで).

(四) 程度。

例—Very (甚だ、大に、餘程), much (多く), mostly (多くは、大概は), little (あまり—しない), so (そんなに), as (同じ程度に), more (餘計に), scarcely (ない位に), hardly (—し兼ねる).

(五) 原因。